此外寺僧廿二箇院中ニモ當時存在シタル者、恐ラクハ少ナキニ非ザル可シ。

内南谷壽命院妙見堂ニハ、傳教大師作妙見菩薩立像二童子附、及弘法大師作前立妙見菩薩有リ、東谷妙音院姥宮ニハ、行基菩薩作姥尊像、慈覺大師作同前立行基菩薩作姥神本地佛千手觀音、慈覺大師作姫尊像、同本地辨財天像、傳教大師作三面大黑天尊有リ、東谷覺善院ニハ、百濟國傳來北辰靈符尊木像、琳聖太子作靈蛇靈龜、慈覺大師作不動尊、文覺上人作波切不動尊石板、後陽成院勅額、北谷教善院不動堂ニハ、慈覺大師作不動尊、北谷延命院ニハ、慈覺大師作地藏菩薩像、北谷遍照院ニハ、毘首葛摩作彌陀如來像、惠心僧都作脇立觀音勢至、傳教大師作毘沙門天ヲ安置スルコト、文政寺社書上ニ見エ、妙音院ハ、中興開基ヲ慈覺大師、覺善院ハ、中興開基ノ琳聖太子末葉茂林朝臣、中興檀主ヲ藏人源仁綱ト記ス。而シテ淺草寺本堂承仕タル三坊ハ、文政寺社書上ニ、

常音坊　在二北谷一。

右者三社權現檜前竹成之孫ニ御座候。但地處之儀者、元中谷ニ罷在候。慶安元戊子年〇紀元二三〇八年。智樂院僧正代今之北谷に屋鋪替仕候。

三社權現竹成神社

芝附近拓開
芝附近拓開事蹟

專堂坊

右者三社權現土師眞人仲知五十八代之孫ニ御座候。但淺草寺門前町材木町〇市内淺草區。ニ而、往古ゟ住居仕候。

三社古墳　石之五輪塔三基有之候。

北向一間四方之小社ニ御座候。土師仲知を葬之處と申傳候。

齊頭坊　在二北谷一。

右者三社權現檜前濱成六十三世之孫ニ御座候。尤住居の外、門前地ニ而、貸地ニ致置候。

二日辛未〇天正十八年(紀元二二五〇年)十月。〇辛未、三正綜覽。芝村〇市内芝區。海洲ヲ拓開ス〇校註天正日記。

芝附近開拓　校柱天正日記——

二日〇天正十八年(紀元二二五〇年)十月。はれる。芝口〇市内芝區。つゞき、すのはな、よしがましげりたる處、かりはらひ候へと、被仰付。彦兵衛〇喜多村。藤左衛門〇樽屋。市右衛門〇奈良屋。に申付。藤左衛門〇樽屋。手代新吉と申もの、請負申出る。ひたち〇青山忠成。衆、請負とは、よろしく無之、日々入込候て、かりはらひ候へと、仰付らる。

五日〇天正十八年(紀元二二五〇年)九月。くもる。伊豆のものまいる。よしからせ可申との事。〇芝

海岸賦。めら○伊豆國。の藤八・吉六・權六・忠助・八内、これらにて大かたかり取、よしはたばねてほし上、段々つき立候樣、申付。

柴村○市内芝區。附近ニ關シテ、文政町方書上言フ所二三ヲ擧グレバ、左ノ如シ。

源助町○市内芝區。

一、町内草分人無浪源助と申者、古來名主役相勤罷在候故、則源助町と相唱、子孫木見源左衞門迄相續仕候處、享保○紀元二三七六年―二三九五年。初年頃、跡退轉仕候由申傳。右源助草分之由緒年代等者、相傳不申候。

柴井町○市内芝區。

一、町内○柴井町。起立之年代草創人之名町銘之起立等、年古き儀に而、書留申傳等茂無御座候に付、相分不申候。尤古町に而重き御祝儀有之候節は、町人共御能拜見被仰付候儀に御座候。

宇田川町○市内芝區。

當所○宇田川町。起立之儀は、文化三寅年○紀元二四六六年。大火之節書物燒失仕、年代等相知不申候。尤古町之儀に付、重き御祝儀等之節、町人共御能拜見被仰付候儀に御座候。

宇田川横町○市内芝區。

一、當所○宇田川横町。起立之儀は、書留等燒失仕、相知不申候得共、宇田川町續横町に付、町名に相唱申候。尤古町に付、重き御祝儀有之候節は、御能拜見被仰付候儀御座候。

本芝壹町目○市内芝區。

一、當町之儀、往古者豐島郡柴村と唱候場所に而、其頃何程有之地に候哉、相知不申候得共、當時に芝名目に相成候所、東者海邊に相添、南方之芝車町邊、西之方者西應寺町邊、北之方者神明社地增上寺一圓に、芝と相唱、右之内當所者、根元之地にも有之候哉に而、年代不知本芝と相唱申、如何之譯に而芝と號候哉、相知不申候得共、古者柴之字相用、其後芝之字に相改候由、是又年月相知不申、乍去當所名主源五郎所持仕罷在候天正十五年○紀元二四七年。十二月中古き書物に者芝邨と記有之、其以前天文二十三寅年○紀元二一四年。七月と認有之候古き書物に者柴と相記有之、右に付其頃相改候哉、又者兩樣相認候儀に候哉、相分り不申候得共、往古分の地名と奉存候。町方起立とし月相知不申候得共、古來海岸之場所に而、專船家業之者共、住居仕候由。御入國後、追々家作相增、町並商家

出來候由に而、御代官支配町場に御座候。○中略。尤御入國以前ゟ、當所に七人之百姓共罷在、海邊之儀に付、魚漁仕罷在候處、御入國後、右七人者共ゟ、毎月四度宛、御膳御菜御肴獻上仕、其後追々家作相增候ニ付、年月不レ知、本芝通四ヶ町○市内。惣家持ゟ差上來候。

金杉通壹町目○市内芝區。

一、當町○金杉通一丁目。之儀、往古金洲崎ト唱、舊地名之由。元荏原郡○武藏國。ニ屬候處、何之頃豐島郡○武藏國。ヱ混ジ候哉、且金杉ト改候儀、年月相知不レ申候。音便ニ而金曾木共唱候由ニ御座候。當所巽之方一圓海邊故、金洲崎ト唱候由。右之趣承傳候。當時町數拾壹箇所有レ之、東者金杉川口芝湊町○市内芝區。ヲ境、西者諏訪伊勢守樣御中屋敷、南ハ芝町○市内芝區。ヲ境、北ハ芝土手跡町・芝濱松町四丁目・金杉川○市内芝區。ヲ境、金杉町ト號候。古代過半漁師而已住居仕候ニ付、天正十八寅年○紀元二五〇年。御入國以來、御膳御菜御肴毎月四度宛獻上仕、芝浦○市内芝區。御成之節、番船二艘宛差出、御城米引船、其外都而浦方御役相勤、漁船之員數ニ不レ抱、年々船役錢永三貫八百文宛、御代官御役所へ上納仕候。依レ之漁師共爲ニ網干場、於ニ金杉濱○市内芝區。邊一壹反九畝歩之場所、幷金杉川之末河岸通○市内芝區。ニ而九畝廿壹歩之地所、被ニ下置一候。

附記　兼房町

〔附記〕　兼房町○市内芝區。

文政町方書上ニ左ノ如ク見ユ。御入國後ト有ルノミナレバ、時日明カナラズ

兼房町○市内芝區。

一、町内起之儀者、御入國後、幸橋御門外○市内芝區。ニ而名主平十郎者先祖平左衞門草創仕、兼房町と相唱候得共、何故右町名相唱候哉、書留申傳等無レ之相知不レ申候。○兼房、疑フラクハ平左衞門ノ實名歟。

——文政町方書上

小石川疏水各所屋敷割

四日癸酉○天正十八年(紀元二五〇年)十月○癸酉、三正綜覽。湯島臺○市内本郷區。下ニ於ケル小石川ノ潴水ヲ疏シ、其地ヲ旗下ノ士ニ分給ス。○校註天正日記。御府内備考。是頃各所ノ屋敷割ヲ爲ス。○校註天正日記。

小石川疏水事蹟

小石川疏水及屋敷割　校註天正日記ヲ抄スレバ、左ノ如シ。

四日○天正十八年(紀元二五〇年)十月。くもる。○中略。ゆしま○市内本郷區。のかたゞいのした、小いしかはのする、池になりたる所、水はかせ、大かた干かたとなる。此分やしきにわり可レ申候。小身衆、いろ〳〵申こまれ候。地せばく、人多く、わり立候事むづかし

く、藤左衞門○樽屋。に申付、地ゑづかゝせ、けんちうちて、それよりと申定む。小石川水はきよろしくなり申。○下略。

湯島ノ臺ハ、本郷○市内。ナルベシ。○小石川ノ末云々ハ、小川町○市内神田區。ノ邊ナルベシ。長祿圖ニ、往時此邊ニ一ノ池アリ、小石川ノ流ト覺シキアリテ、之ニ通ゼリ。此池、天正○紀元二二三三年——二二五一年。ノ末マデ、猶遺リシナルベシ。舊說ニ、小川町○市内神田區。ハ、入國ノ初マデ畊地ナリシトモ云ヘバ、既ニ開墾セル處モアリシナルベシ。○下略。

十二日○天正十八年(紀元二二五〇年)十月。はれる。小石川の末にてうめたて候所、大かたやしきにわりわたし、大身小身すべて貳百三十貳家也。此内小田原○相模國。衆三人、ひたち殿○青山忠成。口入にて、わりわたす。

〔參考〕校註天正日記——

十六日○天正十八年(紀元二二五〇年)十月。ふる。小石川の末出水にて、家ながす。このうち小身衆、自身にて、土俵いれ候衆あり。

御府内備考ニ、○略。上その頃は、江戸川といひて、今の龍慶橋○市内小石川區。の筋の川、南へ流れて、平川に落合なり。今の水戸殿○市内小石川町。川區小の前の土堤の少しひきくみゆる所、卽その川筋なり。それを埋しかど、後に又落入たれば、又築しかど、地落入て、少しひきゝなり。ト見ユルハ、所謂小石川末池ニ當リタル處ナル可シ。

〔附記〕參考落穗集——

飯田町○市内麹町區。坂下、神田川の留り、まな板橋の東、大番組延享○紀元二四〇四年。勤仕たる木村主膳は、代々七百石領知す。此本家は、大納言樣御扈從組木村彌十郎遠祖三右衞門弟に伊勢千代といふもの、台德公○德川秀忠。御幼少の砌、弱年にして御扈從役被仰付勤仕す。後に源太郎といひしは、是この主膳元祖也。然るに此源太郎御入國以後者、まないたばし東の沼地を、三四町程餘り拜領して、御堀普請などの節の揚土等を引せ、地形として家を作り、殘地は繩張なくして置たる處、追々御家人江戸住となるに付て、源太郎懇意の御旗本の輩懇望するに依て、數人に段々割あたへ、殘る宅地千四五百坪も有歟、至于今、其子孫として主膳居住する也。是彼家の傳說なり。

各所ノ屋敷割　小石川潴水疏流ノ前後、各所ニ屋敷割有リタリト見エ、校註天正日記ニ左ノ數節有リ。

十一日○天正十八年(紀元二二五〇年)十月。はれる。しゆり殿より、やしきわりに付て、たてはい

かほどながくともよろしく、間口は五丈ばかりと申來る。それよりせまくはめいわくとの事。わがまゝいわるゝ人にて、奉行衆こまり入候。

修理殿ハ未詳。

十五日（天正十八年（紀元二二五〇年）十月。）くもる。御藏しゆ三人、とり越（市内淺草區。）にてやしき被下る。藤左衞門（樽屋。）相越、地わり、此衆のやしき、追てめしかへさる。

此頃ヨリ翌慶長十九年（紀元二一五一年。）乃至翌々文祿元年（紀元二二六二年。）頃ニ亘リ、所々ノ屋敷割賜邸地等有リタルコト勿論ナル可キモ、今悉ク其時日ヲ辨ズル能ハズ。左ニ一括シテ其梗概ヲ擧グ。

鳥越

段々御普譜ヲ仰付ラレ、御旗本ノ小身衆ハ、地形ニ手間ノイラヌ樣ニト仰ラレ、御城ノ北西ニ當リ、大番町トテ最初ニ屋敷ヲ仰付ラル。誠ニ御積ノ如ク、岡ノ土ヲ引ナラシテ谷ヲ埋アゲ候故、普請ノ手間少キ也。次ニ河筋ニ水除汐除ノ土居ヲツキ、葭原ヲ干立、所々ニ船入ノ堀川ヲアケ、其土ヲ以テ地形ヲ上ゲ、總町屋ヲ割下サレ、夫ヨリ段々ニ諸大名ノ居屋敷ヲ御渡ナサル。其後天下ノ御在城トナリ、日本國貴賤寄集居ヲナスニ付、上下ノ屋敷取廣大ナリト云ヘドモ、畢竟江戸中ニテ本田ノツブレハ少計ニテ、大方ハ野方入海ニテ事濟也。

城西番町邊

就中江戸中天下ノ人民入込申ニ付、田畠ノ養ヒ自由ナレバ、昔往古ヨリチカヤノミ生ジ武藏野ノ原モ、上々ノ畠ニ開キ立、新ニ百姓ノ家居トナリシ村里數限モナシ。然バ御城内ヨリ、大名屋敷寺社ヘカケテ、大分ノ地形ノ樣子ナレバ、田畠ノ廣マリ候事十雙倍ナリ。如此損德マデ御賢慮ニモレ候義一モナク、當時天下ノ貴賤入ツドヒテ、何ニ一色事ノ欠タル義モ無之、諸用タリ候ヘバ、萬民居住仕リ安ジ。右百年以前、關東御入國ノ砌リ、江戸ノ樣子承リ傳ヘ考見候ヘバ、今如此ノ都ニマカリ成樣子ニハ不存、然モ茅野芦原ノ時ニ、後々末々繁昌ノ地タルベキト、御下墨遊ル大神宮（德川家康。）ノ御賢慮、奉感モ愚也。

——岩淵夜話別集

御旗本御番方の武士を御城西の方に置るゝ。町割を賽、目を用ひられ、番町とせらるゝものは、神君（德川家康。）の御下知たり。二四六の偶目は陰なるゆへに裏町を用ひられ、奇目は陽なるゆへ、其町一筋つゝ也と云々。此地は、今の愛宕山（市内芝區。）後天德寺の西城山（市内芝區。）と言所より、西北の方へ、上高田・下高田（武藏國豐島郡。）といふ地迄、牛込忠左衞門先祖領地、惡田三千石の場所也と申傳ふは、木村高敦談なり。

——參考落穗集

關東首府トシテノ江戸

文祿元年壬辰〇紀元二二五二年。御城の西北の地、大御番組衆宅地を給はる。六組に分ちて、一番より六番まで の名目あり。是より番町といふ。

——武江年表〇奉平年表同。

虎ノ門

虎の御門〇市内麹町區。内藤備後守政樹上屋敷、永田馬場〇市内麹町區。南行當り内藤紀伊守信興上屋敷、共に兩屋敷溜池〇市内。の上なり。是は神君〇德川家康。の舊臣内藤右京進藤原義清長男彌治右衞門清長、是備後守家筋也。二男甚左衞門、是紀伊守家筋なり。兄弟として共に武功忠臣抜群たるに依て、神君〇德川家康。御憐愍深し。御入國以後此邊御廻り被遊たる時、右兄弟の人に、御自身御杖を以て賜り候居地、至于今各上屋敷として在住也。後來是等の拜領地は、東照宮〇德川家康。の神勅にて賜りたれば、至極無雙の御事なるを辨へざるなり。

——參考落穗集

麹町

關東御入國之刻、於糀町〇市内。伊賀者一同に屋敷拜領仕候。表間口拾間、裏行八拾間請取申候。

——伊賀者由緒書

一木村

元鮫河橋仲町

〇上略。天正十九年辛卯〇紀元二五一年。(紀元二五一年)。十一月十八日初而御鷹野御來被爲遊候節、只今の喰違〇市内麹町區。と申

場所にて、御杖之先に而、前書山中村・大澤村・今井村〇以上市内。寺町等一圓、伊賀衆百三拾六人知行拜領被仰付。右に付、伊賀領又者一揆領等相唱候由。其後右一面を一手に改、一揆村と名付可申相談之處、老人有之、申候者、乍恐權現樣〇德川家康。御味方奉申上、首尾能御勝利之上、被遊御入國、格別之思召を以、初而拜領被仰付候間、猶此末御尊慮忘却不仕、一心に御奉公相勤候儀、肝要に候間、此度頂戴仕候村之内、往古者武藏野にて、一木原と唱へ、茜名物之地有之、右地名者、昔豐島一揆、此原山に集候ゟ、一揆原と唱初、其名高候處、後年木に書誤候由、右彼是取合、拜領一圓を一木村と名付可申由申候に付、夫ゟ村名に相成候。

伊賀町〇市内四谷區。

一、當所〇四谷伊賀町。起立之儀者、往古曠野に有之、天正十壬午年〇紀元二四二年。六月二日、信長公〇織田。於本能寺〇京都市。御生害之節、伊賀路御打越被爲遊、伊賀者貳百人、御案内申上候に付、同月〇天正十年(紀元二四二年)六月。十五日於尾張鳴海被召出、同〇天正。十八寅年〇紀元二五〇年。江府御入國之御供仕、關ヶ原御陣御供後、〇伊賀者由緒書、御入國之列ニ作ル。今孰カ是ナルヲラズ。知年月不知、半藏御門前〇市内麹町區。に而屋敷被下置候。〇下略。一町屋舗〇四谷伊賀町。拜領人名前、左之通〇節一。

關東首府トシテノ江戸

一、百八拾貳坪

右は天正十九卯年中〇紀元二五一年。橘十郎〇山岡。先祖惣右衞門儀武士地に而拜領仕候處、貞享二丑年中〇紀元二三四五年。町屋鋪に相成、引續拜領仕候。

御鷹師　山岡橘十郎

——文政寺社書上

延享〇紀元二四〇四年——二四〇七年。御先手永井善次郎組鐵砲同心は、元來五拾人にて、永祿十年〇紀元二二七年。前後、岡崎〇三河國。濱松〇遠江國。御抱の者にて有之候。往年貳拾人他所同心に分れ、殘三十人之中にも、地方にて御あてがひ被下置候者ども、至于今有之候。然るに御入國の始は、五拾人の者共、武藏江戸田〇多摩郡。に被下置候領地へ、駿河より妻子共を引取り、其身も尤ゑこた〇武藏國多摩郡江古田。に居住致し、御番の節は、彼地より五里計の所を通ひ候。其後江戸住仕候樣に在之候間、始に今の四谷御門の內〇市內麴町區。成瀨隼人正屋敷後に居住致さんといたし候處、五拾人の中にて、つく〳〵了簡いたし申出し候は、いや〳〵此所は無用に候、後々我等ごとき輕きものを、此所に被差置候まじく候、是より外、末代居住なるべき所に住居申べし迚、今の四谷坂町〇市內。その比は、藪の繁の荒地を各心まかせに地取りをいたし、住居候者、至于今、その子孫すまゐ候。これ等末〳〵の者の事ながら、本文の說の如く御入國の砌の樣子に候なり。

——參考落穗集

坂町〇市內四谷區。

一、町屋敷拜領人名前左之通〇節三。

一、三百六十坪　小普請　鈴木四郎兵衞

一、四百四十六坪餘　同　小島與左衞門

一、四百九坪餘　同　佐藤八右衞門

右天正十九卯年中〇紀元二五一年。銘々先祖拜領仕候。

御簞笥町〇市內四谷區。

一、町內起立之儀者、武藏豐島郡之內に而、往古者一圓之曠野に有之候處、天正十九卯年〇紀元二五一年。御鷹野之砌、御鐵炮玉藥奉行榊原小兵衞樣御組、右原之內當所〇四谷簞笥町。拜領仕候處、其節之上意に者、來辰年〇文祿元年(紀元二二五二年)。に者高麗御發向被爲遊候に付、少給之者共、御供仕候跡に而、妻子極老之者共、難儀可仕間、隣家近家作仕候ために、間口狹く、裏行者北之臺〇當時尾州樣御屋形邊迄。被下置候。尤町屋にも仕候樣、蒙上意、拜領仕、其後屋鋪地之內、裏之方地所、御用明地に願置候。〇中略。

一、町屋鋪拜領人名前、左之通。○節十五。

一、百七拾五坪　御鐵炮玉藥同心　船場幸吉
一、百七拾六坪餘　小普請　江波戸良助
一、貳百七拾六坪餘　同　勝小吉
一、百九十二坪餘　御鐵炮玉藥同心　岩田脩作
一、同　峯姫君樣御侍　露木七郎次
一、百八十五坪餘　小普請　鈴木庄左衞門
一、貳百四十一坪餘　富士見御寶藏番　篠塚甚右衞門
一、二百三坪餘　小普請　齋藤禮輔
一、百九十一坪餘　御鐵炮玉藥同心　服部平左衞門
一、五十四坪餘　小普請　堤官兵衞
一、二百二十三坪　支配勘定　安富定四郎
一、百八十九坪　小普請　行岡榮次郎
一、二百十四坪餘　民部卿樣御附書院番　成田與八郎
一、二百五十四坪餘　西丸御廣敷添番　細倉惠兵衞

麹町十一町目　青山御掃除町

一、百八十二坪餘　同　春山太七郎
右天正十九卯年○紀元二五一年。銘々先祖拜領仕候。
麹町十一町目○市內四谷區。
一、百二坪六合　北側横町西角　四谷南寺町法輪山勝興寺末曹同宗　祥雲山福壽院
一、百十七坪四合一勺　北側横町東角　右同人
右者福壽院開山春積、天正十九卯年○紀元二五一年。年恐從權現樣、○德川家康。右寺所寺地共、拜領仕、罷在候。
御掃除町○市內赤坂區青山。
一、町內起立之儀、當時西御丸小十人板倉彌作先祖板倉彌次兵衞、關東御入國之節、三州ゟ御供にて罷出、當所唯今袋町と相唱候邊ゟ、赤坂築地邊迄之地所、御杖先に而拜領被致候由。其後上地に相成候年代不相知、後年青山大膳亮樣上地之內、御掃除之者三十人え大繩地にて被下置、右地所板倉彌次兵衞え御渡有之、同人ゟ夫々え割渡候由申傳に而、年限等相知不申。右組屋鋪地續を以、青山御掃除町と唱來候哉と奉存候。○中略。
一、町屋鋪拜領人名前左之通。

一、千三百三拾坪　西御丸小十人　板倉彌作

右は、先祖板倉彌次兵衛、御入國之節、御供にて、三州ゟ罷出、御杖先にて拜領仕候由、申傳に御座候。（下略。）

——文政町方書上

若夫市内赤坂區權田原町ハ、御府内備考

權田原（市内赤坂區。）

權田原（市内赤坂區。）は、青山中の小名の如く呼來れども、左にあらず。鮫ヶ橋（市内四谷區。）等と同じく、元は一ッ木村（市内。）の内にして、後年おのづから一の地名となりし處なり。今權田原と唱ふる地域は、紀伊殿御屋敷（市内赤坂區。）の西に當り、御爐路町・甲賀町と鮫ヶ橋（市内四谷區。）との間を總ていへり。是も元はかくまで廣き地名にはあらざるべきを、後年おし及ぼして唱へ始しならん。事蹟合考に云、昔權田左衞門國行といひしもの住せしゆへ、この名ありと。このとたしかならず。是は御家人に權田隼人といふものあり。御領の代官役をつとめし時、賜ひて往せし地なり、ゆへにこの名のこれり、後私欲のことにてよからぬふるまひありしかば、則刑罰におこなはれ、家絶へけりと。江戸圖說に云、權太家は、藤原の姓にして、權太小二郎國廣、上總國下野田郷に住す、初て權太と稱す、其後代々遠州に住す、權太左衞門泰信、足利將軍義輝公に仕ふと云々。御入國より權太集人と云御代官居住有しとなり。改撰江戸志に云、案に江戸志に關難間記を引て、慶長十九年（紀元二七四年。）七月權田小三郎江戸におひて死す、故あつて家財を收公せらるといふ、此人の居宅なるべしと。よつて權田系圖を見るに、小三郎泰長後織部とあらたむ、永祿十二年（紀元二二九年。）はじめてつかへ奉り、天正十八年（紀元二五〇年。）御入國のとき、足輕五十人を預られ、江戸近郷の貢稅をつかさどれりと。是則同人なるべし。されば今も權田織部といふ人あれば、その子孫なるべし、未詳なることをしらずと。今三軒屋町（市内赤坂區。）の傳へには、權田丈之助が屋敷蹟とのみいへり。丈之助は小三郎の子なるにや。又事蹟合考に隼人と書しは、小三郎の父なるか、共に考ふべきよしなし。慶長頃（紀元二二五六年——二二七四年。）權田小三郎此邊の御代官たりし事は、同（慶長。）十巳年（紀元二六五年。）小三郎の手代横山庄右衞門が、淺草新寺町東光院へ出せし御朱印地反別名寄帳あるにても知らる。一說に、權太僧都何某と彫たる古碑あり、因て權太僧都墓原と稱せしを、中略して權田原と稱すといふ。是は最牽强の說なり。其故は享保（紀元二三七六年——二三九五年。）の頃、當所權田坂の邊なる安藤佐兵衞の屋敷内より、權太僧都何某、

武家地

曆應二年〇紀元一九九八年。と刻せる碑を出せし事あり。後其上に社を建て安鎭大權現と稱したるより、權田坂を一名安鎭坂ともいへり。是より權大を權太と附會し、權太原の名の起る處なりと好事のものゝいひはやせしかば、遂に書きも記して後の疑惑を傳ふる事いかにともいふべからず。

權田原三軒屋町〇市内赤坂區。

一、町内起立之儀は、往古何村之内に有之候哉相知不申候。元此邊權田丈之助殿屋鋪跡之由申傳候得共、右屋鋪有之候年代、是又相知不申候。〇町方書上。

ト有リ。權田小三郎ハ、慶長江戸圖代官町紅葉山北西ニ屋敷有リタルコト見ユ。

權田原〇市内赤坂區。ハ其下屋敷ナル可シ。入國ノ時足輕五十人ヲ預ケラレタリト云ヘバ、或ハ青山氏内藤氏等ノ賜邸頃、同ク之ヲ賜ヒテ足輕ヲモ住ハセタルコト、内藤氏等ノ如ク然リシヤモ知ル可カラズ。

〔參考〕　武家地

東京地理志料云フ、

武家小路は、市街と同からず、其幅員の廣狹は大抵地形に從て定めたるものにて、殊更に設けられし制度もなし。〇中略。德川家康東迁の際には、諸有司皆遠山が家士の舊宅を以て居第とし、之に居しよし。關原〇美濃國。の役後は、外様大名江戸に第宅を設け、尋で其妻子を移す。是後の内郭〇市内麴町區。及外櫻田〇市内麴町區。の邊なり。〇註略。是より大小諸侯竝に幕下の諸士に至るまで追々に第宅を給はりて、其妻子を府下に移せしが、猶然らざるもありて、寛永十一年〇紀元二九四年。に、譜代大名は皆妻子を府下に移すべしとの令ありしを見れば、其頃已に普く宅地を給はりしなるべし。

寛永二年〇紀元二八五年。三月府下諸侍屋敷地の間數を定められし。其割合は一萬石より七千石まで五十間四方、六千石より四千石まで四十間五十間、三千石より二千六百石まで三十間四十間、二千五百石より千六百石まで、三十三間四方、千五百石より八百石まで三十間四方、七百石より四百石まで二十五間三十間、三百石より二百石まで二十間三十間となり。

寛永の圖を參看して、當時普く宅地割のありしさまを知るべし。

其後元祿六年〇紀元二三五三年。八月に右間數を坪數に改められ、猶其後も再三の追加あり。詳なることは青標紙・柳庵襍筆等に出たれば、此に略す。

凡宅地の事を掌るもの、昔は屋敷奉行ありしが、〔大猷院殿御實記・國師日記・寓治江戸鑑等にあり。〕後

には普請奉行の所管となる。但町地は町奉行、町並地は町奉行代官の兩屬なり。

凡第宅は、上屋敷・主人の所居。下屋敷あり。居第の修理、又は火災の時など移りて之に居る。又は主人退隱の後、及其子弟等の居とするもあり。又萬石以下と雖ども、側衆・大番頭・留守居は下屋敷二ケ所までは所有することを得れど、其身一代に限るべき筈なり。然に往々累世持傳へしもありて、天保の改革に、皆上納せられたり。大諸侯なれば中屋敷あり、皆幕府より給はる所なり。屋敷添地あるは添屋敷といひ、倉庫あるは倉屋敷といふ。屋敷の數は、其家の大小に從ひて五ケ所、四ケ所、三ケ所なれど、小諸侯と雖ども必ず二ケ所あり。

延寶五年〇紀元二三三七年。刊江戸雀に、大名屋形數凡五百二十ケ所餘、小名屋形數凡二千八百七十ケ所とあり。小名とは三千石以上とも、兩番以上ともいふよし。江戸圖說には、上屋敷二百六十五ケ所、中下屋敷七百三十四ケ所と云へり。是は大名の第宅のみを擧たるなり。

又抱屋敷・塀墻家屋なきは抱地といふ。其地從來有税なれば、地租を出し、公役をも勤む。故に又地代屋敷・地子屋敷ともいふなり。と云は、昔時百姓地を買收して所有するものなり。故に市中にも間々あれど、多くは府外なる村落にあり。後世之を禁ぜらる。大縄地と云あり。大番以下諸組屋敷に多し。是は一人別には給はらず、一組へ地所一區を給はり、其頭にて人員に應じ、相當に割合せしものなり。

按に、大縄地、昔は其組頭支配まで一地所の内に在しものなれど、後世次第に沿革して、頭は無論其組も他へ移りし者あり、或は其地を其儘所有して他職に轉ずる類もありし故、後には之を停められし也。又一種豐島郡多摩郡に在るものは、相給地とも唱えて、石高を大縄地にて給はりしものなり。其内東西大久保(〇武藏國豐多摩郡)邊なるは、手作場と唱へて、昔戸主たるもの遠役に從て出征するも、家人自耕して衣食に給する樣に給はりしものゝ由。其事は新編風土記に出す。總て地方の大縄地とは、同名にて異實なり。

又町並屋敷と云あり。女官・醫員・繪師・坊主・能役者等其外目付支配のものに多く、又大縄地の内にも往々あり。薄給のものは是を以て其生計を補はしむる爲なり。に、町地を給はり、之を商人に貸して地料を收むるを許さるゝものなり。

凡武家の居室は、其外面を築地・又は長屋昔は多門とも、小屋とも唱へしといふ。を以て外構とす。前に表門あり。左右後には、家の大小に從て通用門・不明門・非常門等數門を設く。〇土門・埋門・塀重門など數樣あり。表門の内に中門あり。中雀門とも云。三家三卿等家格に由りて設く。其内を玄關とす。玄關より入る處を廣間鎗之間とも云ふ。とす。其次を使者之間・大小に由て次の間あり。使者對談之間・同上。表座敷・同上。大書院・小書院・居間書院・奥居間・同二之間等にて、其次を大奥とす。又玄關の左右便宜の所に、内玄關あり。其次に使者應對

之間小座敷あり。○幷に、内玄關より入來るものに接す。其次は中之口幷に諸役人・從者・番直の者等の詰所とす。其外ハ厩・番屋・倉庫等なり。大抵右の如くなれども萬石以上及家格に由て、遞次增減するは勿論なり。

表門以下家格によりて差等あることは、青標紙・要筐・辨志等にあれば、此に贅せず。或は云、武家作者は却て朝家の制に倣ひ、彼の寢殿對屋の狀に類し、甚た淺きなるものなりしに、世戰國となりては、專ら身を護り・敵を防ぐとに心を用ゆれば、家作向も奥深く經營し、我居處を輙く人に窺はしめざる樣に造りなすに至る。近時まで存せし武家の家作は乃ち是なり。大名の屋敷を宿所と稱することは、貞丈襍記・松屋叢話等に見えたれど、德川家に於ては、別に定められし制度もなければ、是も略す。

按に德川家中葉以降諸侯邸宅のさまは、江都聞見錄寶永中酒泉弘著。云、諸大名邸宅、四方に長屋とて、從者の小屋は、高二階作りにし、或は瓦ぶき又柿ぶき前に沙石を敷、日々水をそゝぎ塵を拂、大門より玄關の間、石を疊て路とし、次に沙石を敷、すべて巧を盡したると也。上屋敷・中屋敷・下屋敷とてあり。松平薩摩守は、屋敷七ッあり。尾張亞相の五段長屋、水戸黄門の百間長屋などとて、士卒も口すさみぬ云々。衣食住記嬉遊笑覽引。云、享保○紀元二三七六年九五年。の中頃まで、諸侯大夫の殿門表長屋の屋根は、厚さ五寸六寸の柿葺、棟に瓦を置き、鳥飛と云木を渡し、井筒に天水桶を入れ、火敵を添へ、屋根に上置候、腰板は栂檜の節なしきらびやかなりしに、度々の火災故、用心の爲にとて瓦屋根に造り替、腰板も腰瓦にかわれり云々とかくあるは維新の前までの家作にて、大抵百五十年以降の制と見ゆ。但後世は場末に居る小身と雖ども、追々に大家の風に倣ひ、自然華靡に赴きしは、太平の餘習已むを得ざる勢なるべし。然るに安政○二年、紀元二五一五年。の地震以降は、大小ともに草々の營作多く、前時の壯麗は見る影もなきに至れり。又按に、徂來政談に云るが如く、大名の江戸邸は、皆假の旅宿なるに、後世は其旅宿なることを忘れて、一切の邑入を江戸に運來り、爭て邸宅を飾り、鹵簿騶從を美にするごとくなり、甚しきは旅宿を以て本居となし、一切の事を此地に於て沙汰するものあるに至る。譜代の内、定府の小藩、或は關東に封邑あるものに往々此類ありき。是も治平の久しき、勢此に至りしなれど、頗る封建の本旨に悖れり。

下文覇都ト都制ノ條ヲ參照セヨ。

十　關東首府トシテノ江戸

神田臺下新道開通

十一月六日甲辰（天正十八年（紀元二二五〇年）十一月。）甲辰、三正綜覽。神田臺（市内。神田區。）下土取跡ニ道ヲ通ジ、谷原町（市内。）ニ達ス。（天正日記。）

神田臺下新道開通事蹟

神田臺下新道開通　天正日記云フ、

六日（天正十八年（紀元二二五〇年）十一月。）はれる。神田臺（市内。神田區。）下土とりあと道をならす。谷原町（市内。）へ通りぬける様にと申付る。かねて谷原（市内。）のもの願につきて也。（下略。）

寺社來移起立

校註天正日記谷原町（市内。）ヲ以テ、駿河臺（市内。神田區。）ノ東馬喰町（市内。本橋區。）ニ至ル邊ニ在リタル可シト爲スコト、別項記ス所ノ如シ。今神田臺（市内。神田區。）下ノ土取リ跡ニ道ヲ開クコト見ユレバ、昔時神田臺卽チ後ノ駿河臺ノ東南端ハ、少ナカラズ突出シツヽ在リタル者ナルヤ推ス可シ。而シテ謂フ所ノ新道ガ今ノ某路線ニ當ルヤハ竟ニ明カナラズ。

寺社來移起立事蹟

是年（天正十八年（紀元二二五〇年）。）各地ノ寺社江戸ニ來移リタル者少ナカラズ。又新ニ起立セルモ有リ。（文政寺社書上。江戸志。）

寺社來移起立　左ノ如シ。

稲荷社

稲荷社　文政寺社書上ニ、

鎮守稲荷社　神體木像（丈一尺二寸。）

本地十一面觀音木像（丈一丈二寸。）

右は三州碧海郡上野の鎮守にして、家康公（德川。）三州御在城の御時、奇瑞ありて御信仰淺からず、御開運の後、神領三拾石に山林境内相添られ御寄附あり。天正十八寅年（紀元二二五〇年。）關東御入國に付、驛路御輿の前後に白狐を見る人多く、家康公（德川。）にも長途影護ありしを感じ給ひ、吹上（城内。）に社を造營し給ふ。

江戸志ニハ、「湯島（市内。本郷區。）昌德寺鎮守正一位三河稲荷社、社傳ニ云、「抑當社は、そのもと三州碧海郡上野庄稲荷山隣松寺の鎮守なり。神祖（德川家康。）三州御在城の時、御陣場の守護なり。依て御開運の後、神領三拾石山林境内に相添て御寄附、其外御太刀御兜等奉納なり。天正年中（紀元二二三三年―二二五一年。）御入國のとき、御譜代御中間之面々、神詫を蒙りて氏神となし、組屋敷の内社を造營す。其後駿河臺（市内。）へ所を移され、慶長十一丙午年（紀元二二六六年。）當寺（昌德寺。）境内に移し、組中の氏神と尊敬し奉る。」ト有リ。

關東首府トシテノ江戸

鈴降稲荷社

鈴降稲荷社　文政寺社書上ニ、

天正十壬午年〇紀元二二四二年。六月信長公〇織田。生害之節、東照宮様〇徳川家康。伊賀國鹿臥兎山路え被遊御掛候節、伊賀者御道御案内仕候。其忠節御好身を以、同月〇天正十年(紀元二二四二年)六月。十五日尾州鳴海にをいて、御家江被爲召出、其後天正十八寅年〇紀元二五〇年。より服部仲殿支配被仰付、同年〇天正十八年(紀元二二五〇年)。江戸御城江御供に而罷下、四ツ谷仲町〇市内。江組屋敷被下置、此時迄茂別當願性院神體を守護し附纏ひ、則仲町〇市内四谷區。之内に安置す。是最初伊賀國の鎮守たる故なり。

篠塚稲荷社

篠塚稲荷社　文政寺社書上ニ、

當社〇篠塚稲荷社。起立年月不相知。但權現様〇徳川家康。御入國之時、開山法印六代前秀海法印此宮を預り奉る也。古き翁の物語に曰、此稲荷まします故に、稲荷野と申候由、其頃今の神田川の岸に向て有。

辨天社

辨天社　文政寺社書上ニ、

東照宮様〇徳川家康。關東御入國之砌、拜領仕候。替地引地等之儀は、無御座候。鎮座之儀は、承平二壬辰年四月被申傳候、縁起に載有之候。

天龍寺〇武藏國豐多摩郡。　文政寺社書上ニ、

護本山天龍寺

當時起立之儀は、遠州倉見領西郷村瀧谷法泉寺七代目心翁と申僧住持之節、天文廿三年〇紀元二一四年。十一月八日西月友船公〇西郷清員。を燒香仕就夫法泉寺を御當地〇江戸。え以上意引來候。其由來は、右西月友船公〇西郷清員。台德院様〇徳川秀忠。御母公寶臺院〇西郷氏。賀氏。八戸塚氏。之御親父に御座候。依之權現様〇徳川家康。關東御入國之砌、本多佐渡守〇正信。え被仰付、友船公〇西郷清員。位牌、御當地〇江戸。え引移候様、被仰付、則心翁儀右位牌持參仕、法泉寺引來、於牛込〇市内。寺地被下置、寺號を天龍寺と開闢被仰付、則友船公〇西郷清員。被爲成開基、爲香花供具料、境内三萬六千坪被下置、心翁住持仕候。

町方書上亦「天龍寺門前。一、當門前〇天龍寺門前。町屋之儀權現様〇徳川家康。關東御入國之砌、遠州倉見領西口村瀧谷法泉寺に西月友船公〇西郷家員。之御位牌有之候に付、右寺〇法泉寺。御當地〇江戸。え御引移被仰付、其節於牛込〇只今御納戸町(〇市内牛込區)邊里俗元天龍寺。寺

地三萬六千坪被下置護本山天龍寺と改號被仰付候由。ト記ス。御府内備考「天龍寺上地。又元天龍寺蹟ともいふ。四ッ谷の天龍寺、寛永（紀元二二八四年―二三〇三年。）の頃まで當所（牛込市内。）に在しといふ。境内一萬二千坪餘の構なりしよしいひ傳ふれば、此地名の廣くわたれる事推て知るべし。（中略。）御徒組屋鋪二十騎町（以上市内牛込區。）等も此寺蹟なりといふ。ト稱スル者、其地也。

龍寶寺　淺草新堀端

珠島山是應院龍寶寺

文政寺社書上ニ、

當寺起立由緒幷開山事蹟。本譽上人氏族詳ならず。增上寺第十代感譽存貞上人に師事して、螢雪積功、宗門の奥儀を稟承して、一箇の法將たり。後に三州大樹寺登譽天寶上人の選譽を以、大神君樣（德川家康。）の御側に勤仕する事（中略。）年久し。曾て神君樣（德川家康。）江戸御入城之時、是應を召連られ、八代洲河岸（市内麹町區。）に棲息の居所を賜り、自分の名を標して是應庵と云。（下略。）

願正寺　淺草北新寺町

東護山法樹院願正寺

文政寺社書上云フ、

起立之儀、開基安養坊了善、生國三州にて、俗姓は大河内善左衞門尉基高之弟、若年にて出家、本願寺教如上人之弟子に相成、三州長繩邊に草庵結、暫く居住仕、法流之儀に付、東照宮樣（德川家康。）え御目見申上、夫より御出入申上候處、上意にて御密用相勤、御小脇指道服被下置、廻國之僧形に罷成、諸國御密用、關ヶ原御陣中御用相勤候に付、於御前御褒美頂戴仕候事、都而五度別而御自筆之御書二通被下置、難有頂戴仕候。神君樣（德川家康。）天正十八年（紀元二二五〇年。）被遊御入國候に付、安養坊了善儀、御跡奉慕、江戸表に罷越、土井大炊頭殿（利勝。）を以奉窺御機嫌、御目見被爲仰付、寺地於外櫻田（市内。）壹萬坪被下置候而、寺號光瑞寺と申候。（下略。）

天嶽院　淺草北新寺町

天嶽院（市内淺草區。）

文政寺社書上云フ、

光明山遍照寺天嶽院

天正十八寅年（紀元二二五〇年。）起立。元地櫻之馬場（市内。）邊に有之。

本妙寺　淺草北新寺町

本妙寺（武藏國豐島郡。）

文政寺社書上ニ、元龜二年（紀元二二三一年。）駿州ニ起立シ、天正十八年（紀元二二五〇年。）江戸清水門内ニ移ルト見ユルコト、既記ノ如シ。改撰江戸志ニハ、「寺傳に云、當寺（本妙寺。）は正親町院御宇元龜二辛未（紀元二二三一年。）駿河國に開闢し、天正十八年（紀元二二五〇年。）彼國より江戸清水御門（市内麹町區。）のうちえうつり、又飯

田町○市内麹町區。に轉ず。その比は、寺も殊に美麗なりしかば、世に板屋寺と稱し、今按るに、此比は、かや葺のみ多かりしかば、板屋は殊に珍らしき事と見えし。事蹟合考に云、古老の話に、福井の松平の本家筑後守四番町(○市内麹町區)の居宅かき葺にせしとて、人々見物いたせしと云々。誠に延享(○紀元二四〇四年—二四〇七年)より凡五十年前は、六番町・三番町通り(○市内麹町區)其外も、類焼せざる古來の儘の武士屋敷は、皆萱葺にてありしかば、弱年のむかしよく〳〵覺えたることなり。寺院もこれにひとしかるべし。東照宮○德川家康。の御聞にも達し、御稱美ありしと云。ト有リ。

源空寺

源空寺○市内淺草區　文政寺社書上云フ、

五臺山文殊院源空寺　淺草

天正十八寅年○紀元二四〇年。開山圓譽上人御當地○江戸。湯島村に草庵を結びて、一衾不臥にして、念佛弘通在しに、都鄙老若歸依する事夥しく、此よし神君樣○德川家康。達御聞、御城え被召出、御目見被仰付、其後度々被召出、淨土宗安心起行之趣言上仕候趣に御座候。慶長九辰年○紀元二六四年。圓譽瑞夢を感じ、津戸三郎爲守法名尊願尊願は、宗祖上人の弟子源空なり。源空上人之像を護持せしに、三郎末裔之もの持參して圓譽に讓り與ふ。津戸三郎尊願之事實ハ勅修御傳廿八卷ニ出ル。津戸末裔之事、八王子(○武藏國)在ニ在リ。當時番町伏見氏是也。翌日御城に被召出、御目見之節、其旨言上仕候處、不思議に被爲思召、一寺建立可仕旨被仰付、則湯島村○市内。において、前書之通寺地拜領仕候。

善照寺

其時源空上人之寺なればとて、源空寺と寺號被下置候。右故、他國より引來り候寺にても無之、御當地在來之舊寺に而も無之、御當家樣御入國最初御開創之寺に御座候。天正十八寅年○紀元二五〇年。ゟ湯島村○市内。に在寺。

善照寺○市内淺草區。　文政寺社書上ニ據レバ、

本光山歡喜院善照寺　淺草新堀端

當寺○善照寺。元相州小田原ニ有之、天正十八寅年○紀元二五〇年。堂宇悉く兵火に燒失仕候に付、江戸へ引移再建仕候。江戸表最初起立之地幷年代、相知不申候。

唯念寺

慶長年中○紀元二二五六年—二二七四年。木挽町○市内京橋區。に移轉仕。

唯念寺○市内下谷區。　文政寺社書上左ノ如ク見ユ。「神君樣○德川家康。御地割ノ節」ト有レバ、或ハ此頃ソ來移ニ係ル者歟。

至心山觸光院唯念寺　淺草新寺町

當寺○唯念寺。者天文十五丙午年○紀元二〇六年。草創に而、往古寺地品川○武藏國荏原郡。に御座候處、神君樣○德川家康。御地割之節、馬喰町○市内日本橋區。において、易地拜領仕候。此坪數千七百七十五坪四合に御座候。

蓮乘院

蓮乘院○市内四谷區。　亦此頃ノ起立ニ係ルニ非ザル歟。文政寺社書上ニ、

扇稲荷社及清光院

放光山千眼寺蓮乗院　四谷南寺町

起立年代不二相知一候。元地麹町七丁目○市内。有レ之候。

開山鏡現、天正十八庚寅年○紀元二五〇年。九月九日寂。

扇稲荷社及清光院　文政寺社書上ニ、

扇稲荷社

清水御門内○市内麹町區。に鎮座し給ふ扇稲荷社、東照大神君○德川家康。武田家北條家御亡し、御歸陳被レ遊、其後江戸御城に被レ爲レ入、御老中御側衆江上意被レ遊候者、我今國土四海を納る事、此陣扇之德也、故に今廓内に一社造立して、扇稲荷と號し、末長く子孫繁榮あらしめ給へと、三度御頂き被レ爲レ有候由、台德院様○德川秀忠。江御再三御意被レ遊候とかや、□僧□□之節は、御近所□奉レ勤候。依二其御縁一別當職奉レ蒙レ仰□今般怠慢なく奉二御祈禱一候。爲二□冥加一記錄仕置候。以上。

慶長十一午年○紀元二六六年。九月吉日　清光院　慈　觀　印

是ニ據レバ亦入國頃ノ創立ナルガ如シ。而シテ之ガ別當タル清光院○市内淺草區。ハ、

花園山神應寺清光院　淺草

當寺○清光院。起立幷に寺地拜領之儀者、書留諸書物等燒失仕、相知不レ申候。

開山慈觀法印、卒年月不レ知。　——文政寺社書上

ト傳フ。扇稲荷緣起記者慈觀實ニ之ガ開山ナレバ、恐ラクハ稲荷社ト略〻同時ニ起立シタル者ナル可シ。又同稲荷社ヲ今ノ清光院境内ニ移シタルハ享保十九年○紀元二三九四年。ナルコト、同書鎮座勸請之由來書○文政書上收。ニ見ユ。東京府誌ニハ、「清光院○中略。昔時城内清水門ノ邊ニ創建、後今ノ地○市内淺草區松葉町。ニ移ル」ト記ス。

入國後ノ創建乃至來移ヲ傳ヘ、其時日ヲ詳ニセザル寺院有リ。姑ク玆ニ附載ス。

長命山相樹院證誠寺　下高輪臺町

○上略。往古は、武州豐島郡櫻田村霞ヶ關に有レ之候處、權現様○德川家康。御入國後、右地所寺澤志摩守殿○廣高。御屋敷に相成候に付、被二召上一、爲二代地一於二西之久保龍土丸山一○市内芝區。本多佐渡守殿○正信。小屋場地所被二下置一、堂舍再建仕候。

寺ノ舊地霞ヶ關○市内麹町區。ト有ルハ、往古江戸繪圖御成橋○今ノ幸町。内ニ「寺澤志摩」ト有ル者是歟。龍土丸山ハ今ノ芝區葺手町○市内。邊ナル如シ。此處ニ本多正信○佐渡守。ノ小屋場有リタリト見ユ。

〔附記〕下高輪證誠寺門前

文政書上云フ、

下高輪證誠寺門前（市内芝區。）

一、門前町屋起立之儀者往古西久保丸山（市内芝區。）に證誠寺罷在候節ゟ、町屋有之。

興安寺　青柳山興安寺

當寺（興安寺。）起立之儀者、駿河に有之候處、御入國已後、神田御仲間町（市内。）大岡金三郎組屋敷地（市内。）に引移。

稱名寺　廣國山一心院稱名寺

起立之地、駿州伊原郡府中横内村稱名寺、其時分之開山相知不申候。當時開基西念法師、年歴不知、東照宮樣（德川家康。）台命によつて、駿府より罷下り、江戸牛込田安に地所拜領仕罷在候。

林泉寺　郭然山壽松院林泉寺

起立之儀は、永祿年中杉原伯耆守殿山城國伏見におゐて初而一宇建立被致、悟眞山常照院林泉寺と號す。其後神君樣（德川家康。）御入國之砌、杉原家と共に御

湯島（市内本郷區）

小石川（市内小石川區）

三田寺町（市内芝區）

當地（江戸。）へ下り、神田邊（市内。）に罷在候。（今鎌倉河岸邊（市内神田區）に、林泉寺屋敷ト御公議御記錄に有之候由。）

三田（市内芝區）

法呑山蓮栖院正泉寺

開闢起立之儀者、元龜三壬申年（紀元二三二年。）之比、存同と申僧、於下總之國相馬郡に、小庵造立仕、院號泉應院と申候。然る處御入國後、櫻田溜池（市内。）之邊へ引移、於此地に、一宇建立仕、寺號正泉寺と相改申候。

駒込（市内小石川區）

十行山大乘寺

當寺（大乘寺。）儀は、元來京都本國寺末にして、相州竹鼻村に居す。開闢は天正五年（紀元二三七年。）なり。

御入國已來、谷中（市内。一部）移居ス。（中略。）

開山名は日合、十行院と號す。天正十七己丑（紀元二四九年。）四月廿五日寂。

淺草新寺町（市内淺草區）

朝倉山一條院等覺寺

越前大守朝倉左衞門尉義景之嫡男左馬頭信景也。法諱慶專權大僧都也。初而神田（市内。）に一宇造立、御入國後、上野（市内下谷區。）へ何千坪拜領之由、今現居之地加藤織部之屋敷へ替地被仰付、三十三間堂前へ下屋鋪被下置。其地所同所遍立寺に屬。往古は地中三ヶ寺有之、遍立寺・眞龍寺・樂邦寺。右之内樂邦寺

儀者、凡年代六七十年已前、本坊ゑ攝、本尊木佛等今當寺に有之候、眞・遍之貳ケ寺、今現に他地に有之候得共、如何之譯と申儀相分不申、只過去帳に地中遍立寺誰、地中眞龍寺誰、地中樂邦寺誰と名有之、以是往古地中三ケ寺有之證といたし可申候哉。類火之節、古書等燒失仕、委細之儀者相分不申候。右之通申傳候。

〔附記〕小日向（市内小石川區。）善仁寺寺中正德寺、或ハ此頃ノ創建ニ非ザル歟。文政寺社書上左ノ如シ。

正德寺（鶴高山圓通院善仁寺寺中。）

起立之年代、相知不申候。

開祖了伯、天正十八庚寅年（紀元二五〇年。）四月五日卒。

此外僧徒ノ來リ移ル者、左ノ如シ。

功運寺（市内芝區三田聖坂。）慶存　文政寺社書上ニ、

開闢起立之儀者、天正十八庚寅年（紀元二五〇年。）神君樣（德川家康。）御入國之砌、當寺（功運寺。）二代慶存從三州御供被仰付、罷下候。慶存由緒者、神君樣（德川家康。）御舍弟松平五郎樣御子息ニ而、傳通院樣（水野氏。）御取立也。

光明寺（市内芝區西久保神谷町。）證高　文政寺社書上ニ、

中興開基證高、寛永九壬申年（紀元二九二年。）十月二十日寂。右證高義、三州岡崎之產に而、常に權現樣（德川家康。）被爲召、御伽申上候者に御座候。然るに天正十八年寅（紀元二五〇年。）の秋、被遊御入國候節、御供仕江戸ゑ罷下り、光明寺住職と相成り、其翌年（天正十九年（紀元二五一年。））地内に梅花盛に付、右梅花之枝ゑ、難波津に咲や此花冬籠今を春へと咲や此花之古歌を付候而、獻上仕候處、殊之外御滿足被爲遊、無程御開運被爲在、始而御入城之砌、右證高被爲召、先達而咲也此花之和歌を添獻上仕候事、御歡被爲遊、地内に梅御吉例に付、開運梅と可稱旨、上意に而、以來年々獻上可仕旨被仰付候。

種德寺（市内赤坂區。）聖傳　文政寺社書上ニ、

起立之儀、古來小田原城（相模國。）中に有之、鎭城山本光寺と號是也。三代目聖傳和尚、天正十八年（紀元二五〇年。）小田原陳後、權現樣（德川家康。）御入國之節、御上意に而、御供に被召連、小田原（相模國。）より御當地（江戸。）ゑ引移。

十九年辛卯（天正十九年（紀元二五一年。））閏正月、德川氏是頃關東諸國ヲ檢地ス。（家忠日記。小給地方由緒書寄書。）

關東首府トシテノ江戸

關東諸國檢地事蹟

關東諸國檢地　家傳史料所收小給地方由緒書寄帳ニ、

鈴木三郎九郎組
同心拾五人

權現様〇家康。德川御代、永祿十一辰年〇紀元二二二八年。於三州岡崎被召抱、遠州御治國之砌、地方三百石被下置、關東御入國以後、關東檢地御役相勤之節、貳人扶持づゝ被下置。

伊賀之者四十五人
内、三拾八人、前々書出し有之。

伊賀竝之者
二丸同心十五人。
鈴木三郎九郎同心貳人。
西丸御門番同心貳人。
同裏御門番同心貳人。
松平主計頭組小普請壹人。
明キ屋敷之者貳人。
奥方進物取次番三人。
表火之番貳人。
奥火之番貳人。
奥廣敷番壹人。
奥御臺所番壹人。
只今へ三人ニ而潰跡者壹人。

權現様〇家康。德川御代永祿十一辰年〇紀元二二二八年。於三州岡崎、先祖之者共被召抱、五十人にて地方千石被下置、御出陣御供仕、關東御入國以後、江戸へ罷越、關東檢地御用相勤申候に付、貳人扶持づゝ拜領仕。

而シテ所謂關東檢地ノ何レノ日ニ始マリタルヤ明カナラザレドモ、武州文書家忠日記ノ類、

一、あせほ　一、領家　一、こしきや此内に林村。
一、ふちなみ　一、ひてや　一、河田や
一、石戸八幡原　一、まむろ

右之分、百姓能々御せんさくにて、御所務可有之候。來年〇天正十九年(紀元二二五一年)。御縄打之上、不足に候はゞ、足可申者也。仍如件。

天正十八年庚寅〇紀年二五〇年。九月七日　伊奈熊藏〇忠次印

牧野半右衞門殿

高九百石餘武藏國多摩郡。上總國長柄郡。三ケ村
外五拾石餘出高　四拾七人。

——武州文書〇武州足立郡瀧馬室某家藏文書。

廿六日癸巳（○天正十九年（紀元二二五一年）閏正月。）伊奈熊藏（○忠次。）忍領（○武藏國。）竿打に、熊谷（○武藏國大里郡。）

——家忠日記

まてこし候、音信候。

ト記セバ、天正十九年（○紀元二二五一年。）頃檢地シタルヤ知ル可シ。鐵醬塵蓋抄慶長六年（○紀元二二六一年。）ノ條、左ノ如ク見ユ。

慶長六年（○紀元二二六一年。）御持國參遠。駿信甲御手に入。天正十年（○紀元二二六一年。）五ヶ國。天正十八年（○紀元二二五〇年。）關東八州。（○天正十八年紀元二二五〇年ヨリ檢地ノ計畫有リシヲ指ス乎。）關ヶ原御運、信州一圓を始、知行改被仰付、三月（○慶長六年（紀元二二六一年）。）上旬、御帳面成る。世上に青表紙と云。御國繪圖新に出來。（○朝野舊聞裒稿云フ、「伊奈郡村舊事記によれば、青表紙といへるは、天正（○紀元二二三三年——二二五一年）の檢地帳の事なるべし」。）若夫當時ノ村落ニシテ、後江戸ノ市街ニ入リタル各地ノ檢地、亦同時ニ行ハレタルヤ勿論ナラム歟。

〔參考〕文祿檢地、附、地方制度整理

天正十七年（○紀元二二四九年。）ヨリ文祿（○紀元二二五二年——二二五五年。）ヲ經テ慶長（○紀元二二五六年——二二七四年。）ノ初ニ亘リ、豐臣秀吉命ジテ諸國ヲ檢地ス。所謂文祿ノ檢地是也。貫高ノ稱ヲ改メテ石高トシ、三百六十歩一段ヲ改メテ三百歩一段トス。田制篇云フ、

豐臣秀吉執政ノ時、天正十七年（○紀元二二四九年。）ヨリ文祿四年（○紀元二二五四年。）ニ至ル迄ノ間ニ、從前貫高ヲ以テ稱シタル田地ヲ改メテ、石高ヲ以テ稱シ、一段三百六十歩ノ內、六十歩ヲ除キ、三百歩ヲ以テ一段トシ、其十段ヲ以テ一町トス。是ニ於テ從前一町ノ地ハ、一町二段トナリ、一段ノ地ハ一段二畝トナレリ。コレヲ天正（○紀元二二二三年——二二五一年。）ノ石直シトイヒ、又文祿（○紀元二二五二年——二二五五年。）ノ檢地トイフ。信濃國飯田水帳ニ、天正十五年（○紀元二二四七年。）伊賀良莊錢納高ト、同（○天正。）十九年（○紀元二二五一年。）松尾領村高トヲ記シタリ。因リテ村名ノ伊賀良莊ト松尾領ト同ジキモノニ就キテ、其ノ貫高ト石高トヲ比較スルニ、一貫文ノ高一石七斗九升ヨリ二石一斗九升餘ニ至ル。平均シテ一貫二石ノ石直シナリ。熱田古證文（○鹽尻所引。下略。）ニ十貫文ノ米二十三石六斗トアルハ、一貫二石三斗六升ニ當リ、享保十八年（○紀元二二九三三年。）酒井家書上寫ニ、此頃ヨリ五百石ノ辻ニ、辻トハ道路ノ辻ニ人ノ相會スル如ク、物ノ集合シタルヲイフ。米辻、金辻ノ辻ニ同ジク、總合計高ナリ。現永百貫取之トアルハ、一貫五石ニ當レリ。卽廿貫百石ノ法ニ同ジ。カク從前ノ貫高ヲ廢シテ石高ニ改メタル所以ハ、當時天下喪亂シテ、爭戰止ム時ナク、或ハ本領ヲ失ヒテ他國ニ流宕シ、他家ニ隨從スル者少カラズ、コレヲ浪人衆ト稱ス。浪人ノ他家ニ仕フルハ、其意多ク功ヲ其ノ國ニ建テヽ、以テ我ガ本領ヲ復セムトシ、或

ハ他國ニ於テモ舊本領ニ換フベキ地ヲ得ムト欲スルニアリ。故ニ領地ヲ與フベキホドノ戰功アルニ至ルマデハ、當分廩米ヲ以テ給與ス。コノ廩米ヲ與フルニハ、從前分錢ヲ收メタル土地モ、當時ハ大抵兵粮儲蓄ノ爲ニ籾ヲ以納メシメシニ由リ、其ノ籾穀ヲ給與スルニ當リ、貫高ヲ以テ算スルヨリ、直チニ石高ヲ以テ算スルカタ便宜ナル故ニ、俸祿ハ皆石高ヲ以テ定ムルコトニナリシナリ。武田家ニテ拾貫ト云フハ四拾石ノコトナリトイヒ、天正十六年（紀元二〇四八年。）豐臣秀吉ヨリ、加藤清正ニ肥後國ニ於テ十七萬五千石ノ領知ヲ與ヘ、島津龍伯ニ攝津國內ニテ一萬石ノ知行ヲ加ヘ、同（天正。）十八年（紀元二〇五〇年。）德川氏ノ家人ニ采地ヲ給スルニ石高ヲ以テセル類ナリ。カクテ天正十八年（紀元二〇五〇年。）ヨリ始メテ石直シノコトヲ行ヒシナレド、一時ニ猝ニ改ムベキコトニアラザレバ、土地ニヨリテ、或ハ慶長（紀元二〇年——二二七四年。）ノ初マデモナホ貫高ヲ稱セシガアリシナリ。コノ石直シヲスルニ付キテハ、從前貫高ノ地ノ實際ノ收穫ニ隨ヒテ其石高ヲ定メザルヲ得ズ、且間田餘田隱田ナドヲ檢出セムガ爲ニ、檢地ノコトハ起リシナリ。コノ檢地ノ次ヲ以テ、從前ノ方六尺五寸坪ヲ截チテ六尺三寸坪トシ、一段三百六十歩ヲ減ジテ三百歩トス。カク改メタル所以ハ、コノ頃田地一千歩ヲ以テ一貫ノ高ト定メ、六貫ノ高（六千歩ノ高ナリ。）ヨリ軍役ノ馬一匹ヲ出ス制アリ。コレヲ六貫一匹トイフ。千歩一貫ノ例ニテ算フレバ、六貫ハ一町六段二百四十歩（三百六十歩ヲ一段トス、總計六千歩ナリ。）ニテ、算勘ニ於テ頗不便ナリ。三百歩ヲ一段トシ、三千歩ヲ一町トスレバ、二町ニテ六千歩、コレヲ六貫トスレバ、卽二町一匹ニテ、算勘ニ便利ナルガ爲ノミナラズ、全國町段ノ積ヲ減ジテ町段ノ數ヲ增ストキハ、段別ニ賦課スル所ノ年貢諸役ノ隨テ增加スルガ爲ナリ。コノ段積歩數ノ改革ハ、長東正家ノ計策ニ出タルニテ、天正十八九年（紀元二〇年——二二五一年。）ニ始マリタルコトナレド、文祿檢地ト稱スルハ、普ク全國ニ行ハムトセシハ文祿元年（紀元二〇二五年。）ナレバナリ。尾張國ノ檢地ハ文祿元年、（紀元二〇二五年。）伊勢國ハ同（文祿。）〇三年、（紀元二〇二五三年。）大和國ハ同（文祿。）〇四年（紀元二〇二五四年。）ニテ、コノ年（文祿四年（紀元二〇年。））ニ、二五四年）。ノ末ヨリ、宮部善祥坊・山口玄蕃頭正廣・經界ノ事ニ委シク、算勘ノ道ニ秀デタルニ依リテ、兩人ニ命ジテ諸國ノ田園道路ヲ檢査セシム。上方西國ノ國々ヲ檢地シテ越前國ニ至リシ頃、秀吉（豐臣。）〇逝去（慶長三年（紀元二〇五八年）八月十七日。）セシニヨリ、東北ノ國々ハ檢地ノコトハナカリシナリ。

天正改定制地一町圖

上	下
長三十步　一段　三百步　廣十步	一段　長三十步　三百步　廣十步
同	同
同　同	同　同
同	同
同　同	同　同
同	同
同　同	同　同
同	同
同　同	同　同

從前一段ノ地ハ、一段二畝トナリ、一町ノ地ハ、一町二段トナルコト、圖ヲ案ジテ知ルベシ。一歩ノ積ハ、方六尺ナルコト、和銅ノ制ニ同ジ。然レドモ尺度ノ制漸訛長シ、又六尺五寸竿ヲ用キシ故ニ、田積餘剩アリシヲ、慶長以後ニ至リテハ、又モトノ方六尺歩ニナレリ。

從來庄保鄕村ノ稱有リタル者ヲ廢シテ、悉ク之ヲ村トシ、直ニ之ヲ郡ニ隷シ

タルハ是時也。以テ現時ニ至ル。

文祿四年〇紀元二二五五年。豐臣大閤〇秀忠。天下諸國ヲ檢地シ、悉ク庄保鄕里ノ稱ヲ廢シテ、直ニ郡ヲ以テ村ヲ統ブルニ及ビ、上古ノ制度得テ見ル事アタハズ。當時ノ法皆其制ニ因准ス。

——新編常陸國誌

〔附記〕慶長見聞集ニ、

見しはむかし江戸繁昌のはじめ、天正十九卯年〇紀元二二五一年。夏の頃かとよ、伊勢與市といひしもの錢瓶橋〇市内麴町區。の邊りにせんとう風呂を一ッ立て風呂錢は永樂一錢也皆人めづらしきものかなとて入給ひぬ。されども其比は風呂ふたんれんの人あまた有て、あらあつの湯の雫や、いきがつまりて物もいはれず、煙にて目もあかぬなどゝいふ。小風呂の口に立ふさがりぬる風呂を好みしか今は町毎に風呂ありびた十五廿錢づゝにて入なり。湯女といひてなまめける女ども、廿人三十人ならび居て、あかをかき髮をすく。扨亦其ほかに、ようしよくたぐひなく、こゝろざまゆふにしてやさしき女房共、湯茶よといひて持來りたはむれ、うきよ語りをなす。かふべをめぐらし一度ゑめば百のこびをなして男の心をまどはす。

是ニ據レバ、天正十八年（紀元二五〇年。）ニ於ケル道三堀（市内麹町區。）疏鑿ノ時、錢瓶橋は架設セラレタル者歟。

寺社領給賜

十一月（天正十九年（紀元二五一年）。）徳川氏府内ヲ初トシテ、關東寺社ニ朱印ヲ給ス。（文政寺社書上。）

寺社領給賜事蹟

山王權現

寺社領給賜　天正十九年（紀元二五一年。）府内寺社領ノ給賜有リタルコトハ、山王權現　市内麹町區永田町日枝神社所藏文書ニ、

寄進

江戸城内五石之事。

右令寄附之畢。彌可勵武運長久之懇祈者也。仍如件。

天正十九年（紀元二五一年。）十一月日

月日ノ下、家康（德川。）ノ福德印有リ。

神田明神

神田明神（市内神田區宮本町。）　文政寺社書上ニ、

寄進

武藏豐島郡江戸之内三拾石之事。

右、如先規令寄附訖。彌守此旨、可抽武運長久之懇祈、殊可專祭祀之狀、如件。

天正十九年辛卯（紀元二五一年。）十一月日

大納言源朝臣（德川家康。）乃ノ字御判有之。

芝神明宮

芝神明宮（市内芝區神明町。）　文政寺社書上ニ、

寄進

武藏國豐島郡比々谷郷之内拾五石之事。

右令寄附訖。彌可專祭祀者也。仍如件。

天正十九年辛卯（紀元二五一年。）十一月　御朱印

湯島天神社

湯島天神社（市内本郷區梅園町。）　文政寺社書上ニ、

社領五石。右者權現様（德川家康。）御代より、引續武州豐島郡湯島郷（市内。）之内に而頂戴仕候。御朱印寫左之通。

寄進

武藏國豐島郡油島郷之内五石之事。

右、令寄附訖。殊可專祭祀者也。

天正十九年辛卯（紀元二五一年。）　權現様（德川家康）御朱印

吉祥寺

吉祥寺○市内本郷區。　文政寺社書上ニ

寄進

武藏國豐島郡本郷○市内之内五拾石之事。

右、如ニ先規一令ニ寄附一訖。殊寺中可レ爲ニ不入一彌守ニ此旨一、佛法相續、不レ可レ有ニ怠慢一者也。仍如レ件。

天正十九辛卯年○紀元二五一年。十一月日　大納言源朝臣○德川家康。御書判

千駄谷町

其地ノ豐島郡本郷○市内。ノ内ト有ルコト此クノ如シ。然ルニ文政町方書上千駄谷町書上ニハ、

吉祥寺領　西福寺領　靈岸寺領　千駄谷町○武藏國豐多摩郡。

一、當町○千駄谷町。往古武州豐島郡千駄ヶ谷村之内に而、天正十九卯年○紀元二五二年。中、吉祥寺領に相成。

ト見ユ。千駄谷町○武藏國豐多摩郡。亦舊幕時代町奉行支配ニ屬シタル地ノ一也。

青松寺

青松寺○市内芝區。　文政寺社書上ニ

權現樣○德川家康。

寄進

武藏國豐島郡貝塚之内貳拾貳石之事。

右、令ニ寄附一畢。殊寺中可レ爲ニ不入一者也。仍如レ件。

天正十九年辛卯○紀元二五一年。十一月日　御朱印

町方書上亦云フ、「青松寺門前。一、當門前起立之儀者、青松寺文明の申年○紀元二一三六年。於ニ貝塚○市内麹町區。起立仕、其後天正十九卯年○紀元二五一年。十一月御朱印頂戴仕候由。右御朱印地之内に百姓共、居屋敷御座候。」

總泉寺○市内淺草區。　文政寺社書上ニ、

寄進

武藏國豐島郡橋場○市内。之内貳拾石之事。

右、令ニ寄附一訖。殊寺中可レ爲ニ不入一者也。仍如レ件。

天正十九年辛卯○紀元二五一年。十一月日　御朱印

東光院○市内淺草區。　文政寺社書上ニ、

御朱印寺領者、天正十九年卯○紀元二五一年。十一月神君樣○德川家康。御寄附被ニ下置一候。御朱印寫。

關東首府トシテノ江戸

東光院

寄進

武藏國豐島郡江戸之内拾五石之事。

右、令寄附畢。殊寺中可爲不入者也。仍如件。

天正十九年辛卯（紀元二五一年。）十一月日

文政寺社書上ニ、

西應寺

西應寺（市内芝區。）

御朱印拜領高拾石天正十九年（紀元二五一年。）十一月神君樣（德川家康。）御代、初而拜領仕候。依之例年四月十七日十八日兩日、御祭禮修行仕候。御朱印御文言寫、左之通。

寄進

武州豐島郡芝郷（市内。）内拾石之事。

右、令寄附訖。殊寺中可爲不入者也。仍如件。

天正十九年（紀元二五一年。）十一月日　御朱印

而シテ其地ハ、西應寺町（市内芝區。）及飯倉町（市内麻布區。）ナリシ者ノ如ク、文政町方書上左ノ如ク記ス。

西應寺町（市内芝區。）

一當町（市内芝區西應寺町。）起立之儀者、天正十九卯年（紀元二五一年。）十一月、西應寺え被下置候境内拜領地之内に、當町西應寺領分と相唱、慶長十二未年（紀元二六七年。）中町家作御免に相成。

飯倉壹町目（市内麻布區。）

一、當町（市内麻布區飯倉町壹丁目。）起立飯倉と唱候儀者、舊起地名に御座候よしに而、相分り兼候得共、往古伊勢御神供幷御年貢米を入候倉之跡、飯倉と地號相唱候よし申傳候。東は增上寺御山内（市内芝區。）邊ゟ芝切通（市内芝區。）邊迄、西は六本木（市内麻布區。）ゟ永坂（市内麻布區。）邊迄、南者赤羽新堀（市内麻布區。）邊荏原郡を境、北者西久保（市内芝區。）邊より我善坊谷（市内麻布區。）邊迄、一圓飯倉村と唱候場所に御座候よし。天正十九年（紀元二五一年。）十一月中、芝西應寺（市内芝區。）え寺領拾石被下置、右拾石之内、飯倉村（市内麻布區。）之内に而五石三斗、芝郷（市内芝區。）之内に而四石七斗被下置。

善福寺（市内麻布區。）

文政寺社書上（善幅寺文書同。）ニ、

寺領幷境内竹木諸役御免除御朱印御文言寫、左之通。

寄進

關東首府トシテノ江戸

善福寺

武州豐島郡阿佐布郷（市内。）之内拾石之事。

右、令寄附訖。殊寺中可爲不入者也。仍如件。

天正十九年（紀元二五一年。）十一月　　御朱印

〔附記〕善福寺寺中、文政書上ニ左ノ如ク記ス。

光善寺（境内貳百五十三坪。）

天正年中（紀元二二三三年―二二五一年。）芝金杉（市内。）に而開基、明藝起立、寛文年中中興開基宗善、由緒有之、當所（市内麻布區。）え引移申候。

金藏寺（境内四百八十坪。）

起立之儀は、開基金藏坊、了海上人之弟子也。親鸞聖人當山立寄の砌、了海上人と俱に密宗を改、親鸞聖人之弟子と相成、夫ゟ數代金藏坊と名乗り、地中に罷在相續仕候。其後十五世覺了代、元和五己未年（紀元二二七九年。）金藏寺と寺號相改申候。

福泉寺（境内六百四十二坪。）

開基海俗、寂年不詳、相州鎌倉出立川山内氏也。永仁元癸巳年（紀元一九五三年。）善福寺開基了海上人上京之節、立寄逗留之内預教示、直弟に相成、一寺建立仕候。

中興開基道祐、本坊十三代自祐海代由緒御座候而、永祿元戊午年（紀元二二一八年。）御當地（市内麻布區。）え引移候事。道祐寂年相知不申候。

西福寺（境内五百四十四坪。）

起立之儀、年代相知不申候。往古ゟ善福寺境内住居仕候。開基了教、善福寺中興了海弟子、延慶二己酉年（紀元一九六九年。）七月廿八日寂。

專光寺（境内二百六十九坪。）

起立之儀、年代相知不申候。往古者專光寺芝下町（市内。）榮門寺隣寺に罷在候由に御座候。本山免許之法物、宗祖親鸞聖人御影裏書、柴村專光寺と御座候。其後十四代目智慶住職之節、善福寺境内に地坪數貳百六拾九坪借地致し、寺引地せしむ。其砌之書物等一向相見不申候間、芝貳町目（市内。）名主源五郎方にて古來之書附聞合候處、古繪圖面有之、段々被調候。右繪圖面方書に、寛文五年巳（紀元二三二五年。）六月廿六日表拾四間裏行町並之通、元地主專光寺ゟ法性院え賣渡、五拾三年以前ゟ一向宗專光寺屋敷、四年以前買添二百三拾貳坪、開基了智は、了海上人の弟子に御座候。元應二年（紀元一九八〇年。）七月十四日寂。

善正寺（境内百一坪餘。）

起立は天正年中〇紀元二二三年―二五一年。開基祐玄、善福寺中におひて寺建立仕候。
開基祐玄文祿四乙未年〇紀元二五四年。十一月廿一日寂。
善光寺境内弐百七十二坪。
起立者、文保元巳年〇紀元一九七七年。善福寺開基了海上人弟子了遵、善福寺地中に
おひて建立仕候。右了遵文保元巳年〇紀元一九七七年。十一月十日寂。

宗參寺

宗參寺〇市内牛込區。　文政寺社書上ニ、
御朱印寺領拾石、天正十九年卯年〇紀元二五一年。十一月中、七千三百廿九坪七合
餘拜領仕、内二千二百八十一坪門前町屋に建來申候。御朱印御文言、左之通。
寄進　宗參寺
武藏國豐島郡牛込村〇市内。内拾石事。
右令寄附之畢。殊寺中可爲不入者也。仍如件。
天正十九年辛卯〇紀元二五一年。十一月日　御朱印

法恩寺

法恩寺〇市内本所區。　文政寺社書上ニ、
御朱印高五石、天正十九辛卯年〇紀元二五一年。十一月東照宮樣〇德川家康。御代、初而
拜領仕候。御文言之寫、左之通。
寄進　法恩寺
武州豐島郡江戸之内五石之事。
右、令寄附之畢。殊寺中可爲不入者也。依而如件。
天正十九年〇紀元二五一年。十一月日　御朱印

淨光院

淨光院　文政寺社書上ニ、
寄進　淨光院
武藏國豐島郡本郷〇市内。之内五石之事。
右、令寄附訖。殊寺中可爲不入者也。仍如件。
天正十九年辛卯〇紀元二五一年。十一月日　福德御判
淨光院ハ、後ノ小石川〇市内。祥雲寺是也。今武藏國北豐島郡池袋村ニ轉ズ。

附記　北品川稻荷社及南品川貴布禰社

〔附記〕
北品川稻荷社及南品川貴布禰社　新編武藏風土記稿北品川〇武藏國荏原郡。稻
荷社ノ條「天正十九年〇紀元二五一年。南品川貴布禰社及當社〇稻荷社。領合テ五石一紙
ニ御朱印ヲ賜フ」ト見エ、南品川貴布禰神社〇武藏國荏原郡。ノ條、亦「〇上略。明年〇天正十九年
（紀元二五一年）。十一月品川郷〇武藏國荏原郡。ニテ五石ノ御朱印ヲ寄セラル。サレド此社
關東首府トシテノ江戸

領、昔ヨリ北品川〇武藏國荏原郡。稲荷社ト中分ス」ト見ユ。所謂御朱印ハ、

寄進　大　明　神

武州荏原郡品川郷之内五石之事。

右令寄附之訖。彌可勵武運長久之懇祈之狀如件。

天正十九年〇紀元二二五一年。月日　御朱印

兩社門前ハ後皆町奉行支配ニ入ル。文政寺社書上云フ、

北品川稲荷門前

一、右門前之儀者、當所〇北品川。稲荷神主小泉出雲拜領。

南品川貴布禰社地門前

一、當門前起立之儀者、貳百參拾八年以前天正十九卯年〇紀元二二五一年。中、大明神

え爲御寄進、品川領〇武藏國荏原郡。之内に而、高五石、乍恐東照御神君樣〇德川家康。御

朱印を被下置。

〇北品川(〇武藏國荏原郡稲荷社ハ、今ノ品川神社也。新編武藏風土記稿ニハ「稲荷社。境内除地九段七畝、別ニ拜領地千八十三坪九合五勺。東海寺(〇武藏國荏原郡品川町)ノ北ニ隣レリ。祇園貴布禰ヲ相殿トシ、又東照宮ヲ祀奉リ、四坐ヲ總テ品川大明神ト稱ス。神體ハ各箱中ニ深祕ス。稲荷ハ文治三年(〇紀元一八四七年)勸請、後當國ノ守護職二階堂

出羽入道道蘊倉稲魂ノ像ヲ納メ、本社等總テ再建シ、社地ヲ吉瑞岡ト名ヅク。永享四年(〇紀元二〇九二年)正清入道幸純新ニ造營ス。幸純ハ道蘊(〇二階堂)ガ子孫ナルベシ。(〇中略)文明十年(〇紀元二一三八年)祇園ヲ勸請シテ相殿トス。貴布禰ハ勸請ノ年代詳ナラズ」ト有リ。品川神社由來記ニハ、「祭神天乃比理乃咩命。合殿。宇賀乃賣命、素盞雄尊。一、當社(〇品川神社)ハ、後醍醐天皇之御宇、當國(〇武藏國)之守護二階堂出羽入道道蘊本社。末社等悉ク修造、剩ヘ自ラ敬信スル所ノ觀音古像ヲ社域ニ安置ス。(寛永年中(〇紀元二二八四年——二三〇三年)迄、社前北方ニ觀音堂アリシハ、卽チ是ナリ。其頃神託ニヨリ芝(〇市内)增上寺中觀音院ヘ移セリト云ヒ傳フ。其像ハ今尙ホ同院(〇觀音院)ニアリ)。應永年中(〇紀元二〇五四年——二〇八七年)當郷(〇品川)ノ住人吉清入道幸純深ク神威ヲ崇敬シ、宮司大夫四郎(大夫四郎ハ、當社ノ神主ナリシモ、其傳記不レ詳。社司小泉家墓地(元境内)ニ建武(〇紀元一九九四年——一九九五年)元德(〇紀元一九八九年——一九九〇年)曆應(〇紀元一九九八年——二〇〇一年)等刻セル古斷碑ノ存スルハ、同氏族ノ墮墓ナリト云傳フ)。ト相議テ社殿造營ノ事ヲ興シ、永享四年(〇紀元二〇九二年)三月神殿、幣殿、拜殿等始テ落成ス。(今本社門前馬場町ト稱スルハ品川驛(〇武藏國荏原郡)街道ニ出ルヲ、往古ヨリノ大門路ニシテ、其頃競馬ノ神事ヲ行ヒタルヲ以テ此名アリト云フ)。其後小田原(〇相模國)北條家ニ於テ、屢修理ヲ加ヘ、德川幕府ニ至リ、家康公(〇德川)ヨリ、品川(〇武藏國荏原郡)近傍ノ地五石ヲ社領トシテ寄附セラレ、以來德川家御代々ノ寄附品少カラズ。又品川(〇武藏國荏原郡)汤御出獵ノ時々、將軍御參拜御祈願所トナレルヲ以テ、社殿ハ勿論、神主住宅等、悉ク幕府ノ修造スル所タリ。(幕府ニ於テ始テ社頭ヲ修造セシハ、元和中(〇紀元二二七五年——二二八三年)ナリ)。一、天乃比理乃咩命(安房國洲崎明神ノ御分

神)宇賀乃賣命ノ二神ハ、勸請年月不レ詳。素盞雄尊ハ、文明十年(〇紀元二一三八年)六月、太田持資入道道灌ノ勸請スル所ニシテ、此三柱ノ神ヲ合シ、古來品川大明神ト號シ、品川驛(〇武藏國荏原郡)ノ鎭守タリ。近世稻荷大明神ト稱ヘタリシモ、明治元年(〇紀元二五二八年)六月以降、社號ヲ復古シ、品川神社ト號ス。境內地名芳、葉ノ岡字天王山ト云フ。ト見ユ。

〇貴布禰社ハ、新編武藏風土記稿ニ「貴布禰社。除地四段七畝十二歩。天王横町(〇武藏國荏原郡南品川)ノ奥ニアリ。祭神閻魔龍閻山祇閻罔象三神、各深秘ス。祈雨止雨ノ守護神ナリ。社傳ニ、和銅二年(〇紀元一三六九年)九月九日藤原伊勢人勸請シテ、當所(〇品川)ノ鎭守トス。一說ニ、天長年中(〇紀元一四八四年——一四九三年)ノ勸請トモ云。又類聚國史ヲ引テ、弘仁九年(〇紀元一四七八年)武藏荏原郡品川ニ鎭座ト見ユト。今按ズルニ類聚國史ニ此文ナシ。日本後紀弘仁九年(〇紀元一四七八年)五月山城國愛宕郡貴布禰神爲二大社一ト載ス。是當社ニアラザルコト明ナリ。又伊勢人(〇藤原)ガ山城貴船明神ノ夢想ヲ得テ、鞍馬寺ヲ創建セシ故事アレバ、コヽニ彼社ヲ勸請セシヲモテ附會セシナラン。當社元枝鄕三ツ木(〇武藏國荏原郡)ニアリシト云。今社跡ニモ貴布禰社アルハ、舊地ヲ存セントテ建置シナリト云。例祭九月九日。拜殿ノ神二座アリ。左神明ハ、長元二年(〇紀元一六八九年)九月十六日勸請スル所、今モコノ日ヲモテ祭ル。右祇園牛頭天王ハ、寶治元年(〇紀元一九〇七年)六月十九日勸請ス。此神ハ、南品川獵師町、當所ノ門前地、又本榮・蓮長・願行・海藏・常行・妙國・品川・海雲・海晏等十寺ノ門前町屋、二日五日市村(〇以上武藏國荏原郡)ノ總鎭守ニテ、例祭六月七日神輿ヲ氏子町ニ渡シ、海晏寺門前(〇武藏國荏原郡)ヨリ舟ニテ海上ヲ廻リ、獵師町(〇武藏國荏原郡)ヨリ上陸シテ、南品川一丁目(〇武藏國荏原郡)ノ假屋ニ駐メ、十九日ニ至テ、歸社ス」ト。

北品川清德寺　新編武藏風土記稿所收文書ニ

寄進　清德寺

武藏國荏原郡品川之內拾石之事。

右令寄附畢。殊寺中可爲不入者也。依如件。

天正十九年辛卯(〇紀元二一五一年。)十一月日　御朱印

之ガ門前地ニ關スル文政書上ハ云フ、

北品川清德寺門前

一、右門前之儀者、天正十九年(〇紀元二一五一年。)十一月、同寺(〇清德寺。)え御朱印被下置境內御除地之內に御座候。門前起立之儀は、年代不相知。

〇清德寺ハ、新編武藏風土記稿ニ「清德寺。除地一町七畝七歩餘。東海寺域內(〇武藏國荏原郡北品川)ニアリ。寛永十四年(〇紀元二二九七年)東海寺御建立ノ頃、此地ノ寺院多ク外ニ移サレシガ、此寺ハ澤庵和尙ノ嘗宿寺トセシ由緖ヲモテ、其儘爰ニ置レタリ。福聚山ト號ス。禪宗臨濟派、鎌倉建長寺末。元德二年(〇紀元一九九〇年)眞照大定禪師ノ創建、本山三十世佛壽禪師ヲ請テ開山トス。壽八十二。大定禪師ハ貞和二年(〇紀元二〇〇六年)十二月八日化ス。其後兵亂ヲ歷テ衰微セシニ、天文中(〇紀元二一九二年——二二一四年)梅江和尙中興シテ舊觀ニ復セリ。ヨリテ小田原(〇相模國)北條ノ家人遠山隼人祐制關東首府トシテノ江戶

札ヲ與ヘ、島津右衞門尉源忠貞寺領ヲ寄附ス。忠貞(〇島津)ハ永祿二年(〇紀元二二一九年)八月十二日卒ス。(諸家系圖ニ、八月廿日戰死ストアリ。未ダ孰カ是ナルヲ知ラズ)。法號長德軒龍堂泉公ト云。位牌墳墓當寺(〇清德寺)ニアリ。是ヲ中興ノ開基ト稱ス。按ニ諸家系圖ニ、島津相模守入道源忠幸、其子號長德軒、幼而剃髮、入レ寺勤學文、享祿年中(〇紀元二一八八年——二一九一年)十九歲、出於薩州、赴野州足利之學校、時渡遠州今切、大風忽起覆レ舟、書籍盡滅失、長德急棹小舟、全レ命而至駿河、郡守今川五郎氏親豫聞長德先祖有雄名、令使問來路之辛苦、且賜百人之旅資、親交異レ他。氏親謂長德曰、願汝棄釋氏業、可還俗、長德卽諾、其後以三浦氏女爲妻、生二子、卽慶辨是也。長德文學之暇、亦有志于醫術。天文(〇紀元二一九二年——二二一四年)初北條氏綱羅微恙、招而到相州小田原、療氏綱(〇北條)疾、不日而疾愈。由レ是氏綱(〇北條)益貴重之、日夜侍左右、無レ怠。長德素因談軍法之奧儀也、遂不レ能還駿河。氏綱(〇北條)每出戰、與長德密話軍法之善謀、而攻レ城圍レ邑、果如長德言、無不勝焉。故氏綱(〇北條)屢加倍采地、賜數千封戶。(領武州之內六鄕・河崎・小久松井・伊佐沼・寺井・伊佐沼・相州柳島上町屋等、此外領地有數處。)常列家臣己亥(〇紀元二一九九年)五月十八日、武州淺草奉加帳有長德軒・大道寺盛富・松田盛秀等名。永祿年中(〇紀元二二一八年——二二二九年)八月廿日戰死。當其諱日、大風不起云云。又後藤家譜ニモ、長德軒ガコトアリ。記載諸家系譜ト同シテ、唯文字大ニ略ス。當時再興ノ古記アリ。左ニ載ス。福聚山清德禪寺再興記。前住大德松喬叟宗佺書レ之。武藏州荏原郡品川鄕、福聚山清德精舍、乃佛國禪上足福山雲外庵開山佛壽禪師草創之靈場地、關左騷亂以降、舊基久沒、蓁荆、太息有レ餘、其遠孫前禪興梅江西堂和尙、勵再造之志、而抽修緝之功矣、構佛殿也、本尊安置虛空藏菩薩尊軀、不動威怒王毘沙門天王侍立于左右、土地祖師二堂、各設レ像排列之、架客殿也、彫刻觀音大士嚴容、號福聚山之謂乎、權輿于天文六年戊戌(〇紀元二一九七年)九月十三日、結局于同(〇天文)十年庚寅(〇紀元二二〇一年)之秋、以消取吉日良辰也、於レ茲輪奐盡レ美、宏規一新、西顧則山岳鬱巖、而就レ中東顧、則江海渺茫而在レ傍、淮塔雖レ不レ及三百尺、聳浮雲層落々、澄觀師之經始可想見焉、退則房之甍峰、邇則武之平野、實足レ爲奇景也、老住端坐此中、晨鐘暮鼓、晝誦夜禪、勤修無解焉、一方古禪刹亦莫レ如之、嗚呼澆末之世、恢復宗門者、希有甚希有也、住持梅江和尙、一日訪老衲於金山龍光室中、諗曰、願作記筆、時天文第二十歲舍辛亥年(〇紀元二二一一年)詞、垂之將來者□幸也、不レ克峻拒、聊授夷則念、建長雲外庵末寺印、前大德曠適老人松喬叟宗佺書レ之、武州品川鄕有小刹、號福聚山清德禪寺、巨山衆妙門開闢之祖佛壽禪師創建之道場也、東關亂後、地久荒廢者、殆乎六十餘祀矣、其苗裔前住禪興梅江和尙、嘆祖風之不振、而剪除荆棘、造立凡所レ可レ有之殿宇、經始不レ日成矣、專禮樂一新、人僉以□手加額曰、蕪社中興在此時也、請乎作記、且又不レ歉需賦、一偈不遺、揶揄塞責云、箇活迦藍所々身、呼中興業亦纖塵、宗門今得叔孫氏、禮樂時哉已一新、曠適道人宗佺籍手印。右ノ記ニ雲外庵末寺印。又天正十九年(〇紀元二二五一年)ノ水帳今ニ藏ス。卷末ニ、天正二十年壬辰(〇紀元二二五二年)三月十三日、深次郎右衞門ト載セ、花押ヲ記ス。又天正七卯(〇紀元二二三九年)二月日ト題セシ水帳ヲモ藏ス。是當寺舊領ノ水帳ナルベシ。其內ニ當寺號ノ外、清臺寺光嚴寺ノ名アリ。共ニ當時ノ塔中ナリ。清臺ハ字榎下(〇武藏國荏原郡)ノ臺ニアリ、今廢ス。光嚴ハ今當寺(〇清德寺)ノ末トナル。

關東首府トシテノ江戶

妙國寺

南品川妙國寺　新編武藏風土記稿所收文書ニ、左ノ如ク見ユ。

寄進　妙國寺

武藏國荏原郡品川之內拾石之事。

右令寄附訖。殊寺中可爲不入者也。仍如件。

天正十九年（紀元二五一年）十一月日　御朱印

文政書上ニハ、

南品川妙國寺門前

一、妙國寺古門前起立之儀者、天正十八寅年（紀元二五〇年）中、家作御願濟ニ相成候得共、其節之御奉行御役人方御姓名等、一向相分不申候。

此門前亦町奉行支配ニ入リタル地也。

吉祥寺轉移

是月（天正十九年、紀元二五一年、十一月）吉祥寺ヲ神田臺（市內）ニ移ス。（文政寺社書上。御府內備考。慶長見聞集。東京通志。）

吉祥寺轉移事蹟

吉祥寺移轉　文政寺社書上駒込（市內）吉祥寺書上云フ、「天正中（紀元二二三年——二二五一年）權現樣（德川家康）拙寺（吉祥寺）五代目元照と申僧に御歸依爲遊、每度登城被仰付、或時元照言上申上候者、當御城之氣象を相伺候處、東西南北十里之外迄も相續き、御代萬歲に可有御座候之間、何方成共御替地被下置候はゞ、寺宇引移申度段申上候得者、御感不淺、則本多佐渡守（信正）幷全阿彌承而、天正十九年（紀元二五一年）十一月、於神田臺（市內）御替地被下置候。雖然彼地遠方と御上意有之、御禁書幷御用地被召上、間敷之御書被下置候。所謂禁制及寺地轉移セザル可シトノ掟書ハ、

掟

神田臺（市內）吉祥寺境內、永不可替地者也。

天正十九辛卯（紀元二五一年）十一月日　全阿彌

吉祥寺

禁制

一、木生禁斷之事。

一、竹殺切採事。

一、橫合非分之事。

右三ヶ條、令停止之、若於背此旨輩者、速處罪科者也。仍如件。

辛卯（天正十九年、紀元二五一年）十一月　全阿彌

吉祥寺

——文政寺社書上

御府内備考其位地を辨ジテ云フ、「吉祥寺跡ハ、水道橋の外、本郷○市内本郷區。と小石川○市内小石川區。の境なるべし。今の石川石丸建部氏等之屋鋪などすべてその舊跡にや。この寺に藏する天正○紀元二二三三年——二二五一年。のころの文書には、神田の臺とあり。このごろすべて此邊を神田といひしにや。元和年中○紀元二二七五年——二二八三年。の本郷○市内。の圖を見るに、水道橋の外に吉祥寺ありて、よほど廣きさまなり。東の方は大岡源右衞門が組のものおれり。北は小笠原壹岐守が下屋鋪なり。西南には道をおべり。○中略。吉祥寺は、明暦三年○紀元二三一七年。の回祿の後、駒込○市内本郷區。へうつりしなり。」東京通志亦云フ「元和圖今ノ本郷元町壹町目水道橋外西南角○市内。ニ在リ。寛文圖、今ノ水道橋ヲ吉祥寺橋ト記ス。」ト。慶長見聞集ニ「見しは今江戸吉祥寺の境地、在家離れたる古跡、此住地、洞谷禪師と申て、法令世に超へ、釋迦達磨變化かと沙汰せらるゝ。或日愚老此寺へ參詣せしに、人倫たえたる閑居、物さびたる靈地、山高うして上求菩薩をあらはし、たにふかきよそほひは、下化衆生を表せり。四神相應の地をしめし。後に淺間山○信濃國。日光山○下野國。そびへ、東に筑波山、○常陸國。西に富士山○駿河國。箱根山○相模國。軒端につらなり。和光の影もくもりなく、佛法を守護し給ひ、月眞如の光をかゝげ、前には生死の海まん〳〵として、彼煩惱のあかをすゝげば、むしの罪障も消滅すと覺へたり。誠に有がたき靈山、谷めぐり、岩松そばだつて、風常樂の聲をなし、不變の色をあらはす。あたりに植へたる草木迄も、心あり顏なり。」ト見ユルハ、此境ヲ指シタル者ナル可シ。

赤坂一木町屋成立事蹟

赤坂一木町屋成立

元赤坂町

赤坂一木町屋成ル。○文政町方書上。武江年表。

赤坂一木町屋成立　武江年表言フ所ニ據レバ、赤坂一木○市内。ノ町屋成ル、天正十九年○紀元二二五一年。十一月ニ在ル如シ。

一ッ木町○市内赤坂區。

一、町内起立之儀は、往古武州豐島郡貝塚領人繼村ト唱、不殘山畑に而有之候處、乍恐御入國之節、伊賀之者百四十人之驗地に被下置、百姓町屋居に罷成、御鷹次御役相勤來候處、延寶三卯年○紀元二三三五年。中ゟ、一ッ木村ト書改申候。

——文政町方書上

十一月○天正十九年(紀元二二五一年)○中略。赤坂一ッ木○市内。町屋出來。

——武江年表

元赤坂町○市内赤坂區。

關東首府トシテノ江戸

一、町内起立、往古村方に而、武州豐島郡赤坂庄下一木村と申、奥州街道に而、出畑百姓家有之、其頃町内之儀は、當時松平出羽守様御上屋鋪表御門近辺邊有之候所、天正年中（○紀元二二三年―二二五一年。）御入國之後、町御奉行御支配に相成、元赤坂町と相唱、間數百八十五間半之町地に御座候所、御見附御用地に相成、寛永十四丑年（○紀元二二九七年。）同村之内に而、當地所え替地被下置候。其頃之書物等燒失仕、御支配に御成候年月、御奉行様御名前等、相知れ不申。尤元赤坂町と相唱候は、赤坂内に而、始而町屋出來仕候故、元赤坂町と唱候由申傳候。町内幷代地之儀は、古町に付、御城に而御能有之節は、前々より拜見被仰付、御錢御酒御菓子共、頂戴仕候。

一、舊家

名主（○元赤坂町）　茂左衛門

右、往古之儀は、相知れ不申、先祖茂左衛門儀、下總國葛飾郡寺島村産にて、則氏を寺島と相名乗、天正年中（○紀元二二三年―二二五一年。）乍恐權現様（○德川家康。）御入國の節、參州岡崎より御馬の口を取候て、御供仕候由、其後當所（○市内元赤坂町。）草創人に付、慶長年中（○紀元二二五六年―二二七四年。）名主役被仰付、赤坂御門内にて、町屋支配に付被仰付。

――文政町方書上

附記　原宿町

江戸湊口澪標

江戸湊口澪標事蹟

〔附記〕　原宿町

豐多摩郡澁谷町大字原宿ハ、舊幕時代町奉行支配地タリ。文政町方書上云フ。

原宿町（○武藏國豐多摩郡。）

一、當町（○原宿町。）往古之儀、武州豐島郡原宿と唱候。鎌倉より奥州え之街道に而、宿驛に有之候處、其後村方而已に相成候。然處天正年中（○紀元二二三年―二二五一年。）御入國之後、同（○天正。）十九辛卯年（○紀元二二五一年。）中伊賀衆一同大繩地に被下置、年月相分不申、百姓町家作仕來候。

是年（○天正十九年（紀元二二五一年）。）府内瀨戸物町住民野地豐前江戸湊口ニ澪標ヲ樹ツ。（○慶長見聞集。）

江戸湊口ノ澪標　慶長見聞集云フ、

見しは今江戸河口に洲崎有て、鹽みちぬれば、船道を見うしなひ、舟を洲へのりあげ、波風に損する也。瀨戸物町（○市内日本橋區。）に野地豐前といふ人有。他に施す心ざし、身の爲にあらずやとて、天正十九卯の年（○紀元二五一年。）の事なりしに、洲崎にみをしるしを立る。是を俗にほんぎといふ。舟人見て悦事限りなし。惣じて水の深き處をみをといふて、しるしに立る木なり。これをみをつくしと、歌に

多くよまれたり。心をつくすといふ心なり。○中略。今はは や野地○豐前。も死ぼん木も打て跡なし。然ども名は朽やらで殘りとゞまり、此洲を野地ぼん木と名付て、出入舟おさ、舟におゐて是を尋る。河瀨のあらんかぎり氏名立て朽べからず。

〔附記〕佃島

文政町方書上ニ據レバ、佃島○市内京橋區。ノ漁獵亦此前後ニ起ルガ如シ。果シテ然ルヤ否ヤヲ知ラズ。姑ク茲ニ附記ス。

佃町○市内京橋區。

一、佃島○市内京橋區。獵師之義者、天正年中○紀元二二三年—二二五一年。ゟ御由緒を以、御成先漁獵御用、御膳御肴御用、御膳白魚御用、其外諸御用品々相勤來候。

寺社ノ起立及來移本願寺別院

僧光壽○教如。光瑞寺ヲ神田○市内。ニ創ス。之ヲ淺草本願寺別院ノ濫觴トス、○本願寺誌要。白石紳書。東京通志。此外是年○天正十九年〈紀元二二五一年〉。ヲ以テ起立若クハ來移シタル寺社若干。○文政寺社書上。

寺社ノ起立及來移本願寺別院

寺社ノ起立及來移　市内淺草東本願寺別院ノ起立ハ

淺草別院

一、位置及寺域

淺草別院は、東京市淺草區松清町に在りて、現在の寺域面積一萬二千餘坪なり。

天正十九年○紀元二二五一年。教如上人○光壽。德川家康より江戸神田西福寺前の地方五十間の寄付を受け、一宇を建立して、光瑞寺といふ。之を當院○本願寺別院。の濫觴となす。慶長十四年○紀元二二六九年。幕府更めて神田明神下○市内。の地方百間を寄せて之に移轉せしめ、宣如上人の時に至り、光瑞寺の號を廢して、本願寺末刹と稱す。寛永七年○紀元二二九〇年。同上人の撰にかゝる鐘銘に、日域東武州江戸城下神田本願寺者、吾一方之淨刹也云々といへり。

明暦八年○三年〈紀元二三一七年〉。正月江戸大火當院○本願寺別院。亦類燒して、堂宇悉く烏有に歸するや、同年○明暦三年〈紀元二三一七年〉。六月幕府淺草○市内。の地東西百貳間南北百九間を寄せて此に移らしむ。現今の境内是也。　——本願寺誌要

本願寺別院

淺草區淺草松清町○市内。ニアリ。域内三千二百六十九坪。眞宗。京都東本願寺ノ

別院ニシテ、懸所ト稱ス。天正十九年辛卯（紀元二五一年。）徳川氏寺地若干ヲ筋違門外（後加賀原ノ地。）ニ賜ヒ、本願寺十二世光壽（教如。）始テ一宇ヲ創シ、慶長十四年己酉（紀元二六九年。）神田明神下ニ移リ、明暦三年丁酉（紀元一六五七年。）災ニ罹リ、五月四日三十三間堂脇ニ於テ百間四方ノ地ヲ賜フ。（明暦年錄。）即今ノ地ナリ。京都本寺内ノ役寺僧輪年來テ之ニ居ル。

——東京通志

而シテ白石紳書言フ所、左ノ如シ。

一、東本願寺江戸の御堂の事は、三州の一向寺長滿正寺壽教寺などいふ僧等、三河御普代衆の旦那寺なる故に、江戸へ移り來りて寺地を賜てありし、彼壽教寺大きに力を費して公儀を經て、終に本願寺のかけ所をとりたてゝ本願寺へ參らせし也。

彼壽教寺は、今は亡びしなり。故は、壽教寺の末寺に願正寺といふあり。安藤治左衞門など旦那にて、東泰院殿の代に、安藤など本寺へ請ふて末寺となり、依之東泰寺衆も默し難く、壽教寺へ願正寺をもらはれたり。其賞には壽教寺を一家になすべきよしなりければ、壽教寺大に憤りて、しからば我寺をは亡すべしとて、終に破却して退きたり。口惜き事の由高德寺いふ。又西本願寺のかけ所は、善養寺といふ一向僧、東の寺建立を見て公へ願ふて取立たる也。

善德寺
聖德寺
日輪寺
赤城大明神
善立寺

此外天正十九年（紀元二五一年。）ノ起立若クハ來移ト傳フル寺社ハ、既記ノ獅子吼山專稱院善德寺（市内淺草區。）坪根澤（城内。）ヨリ平川口（市内。）ニ移ル。用明山四天王院聖德寺（市内淺草區。）同上。神田山日輪寺（市内淺草區。）柴崎村（市内。）ヨリ白銀町（市内。）邊ニ移ル。ノ外。

赤城大明神社（市内牛込區。）

文政寺社書上ニ、

牛込赤城

赤城大明神社

別當赤耀山圓明院等覺寺　天台宗

（上略。）天正十八年庚寅（紀元二五〇年。）東照宮（德川家康。）御入國之御時、別當等覺寺住持者、中興より七世良辨法印也。同（天正。）十九年辛卯（紀元二五一年。）御繩うち淺葉孫三郎殿、御代官權田織部殿、先規に任せ、當社（赤城大明神社。）山林竹木共に御除き、夫より代々地頭御代官野村彦太夫殿まで、相違無之。

善立寺（市内淺草區。）

文政寺社書上ニ、

大光山善立寺

天正十九辛卯年〇紀元二五一年。起立に御座候。由緒左之通。

當寺〇善立寺。舊蹟三州岡崎善立寺儀は、御先祖西忠様〇松平親忠。之御代、安祥之御城〇三河國。より岡崎之御城〇三河國。え御移候刻、善立寺も御供仕、岡崎〇三河國。え罷移候。依之西忠様〇松平親忠。より爲御褒美寺領二拾七石三斗五升目之御朱印頂戴仕、夫より相續き道閑様〇松平長親。道忠様〇松平信忠。權現様〇德川家康。迄之御朱印頂戴仕候。善立寺住持代々いづれも御譜第衆之子孫に而候故、權現様〇德川家康。三州に被爲成御座候御時、毎年菅生川〇三河國。に而御川狩之刻、御畫辨當御小休に、何時も善立寺へ計被爲入候、旁之由緒に候得ば、關東御入國之時分、住持日得御供相願候處、早々可參旨御上意に而御供仕、本多佐渡守殿〇正信。を以屋敷拜領仕度段言上仕候處、御供仕候儀被爲在御感、望次第可被下置旨、本多佐渡守〇正信。より被仰渡候得共、文箱一つに而被下候故、屋敷過分に拜領仕候茂無詮故、少々拜領仕、此時何方に而地面拜領仕候哉、相知不申候。則三州岡崎之寺山號共に引移、今以岡崎に善立寺之舊地相續致候而、當時は御朱印十石頂戴仕候。乘輿獨禮、御代替御禮申上時服拜領等格式置被仰付候儀、全以權現様〇德川家康。御影と難有奉存候。其後屋鋪替之時、石川八左衞門殿・内藤金左衞門殿神田〇市内。に而屋鋪申請候。今之三河町近邊と申傳。

其頃は日得不如意故、建前之外明地を貸地に致罷在候。

幸龍寺〇市内淺草區。　文政寺社書上ニ、

妙祐山幸龍寺

起立之儀は、天正十九辛卯年〇紀元二五一年。湯島〇市内。邊に而建立之由申傳。其後年月不知當所〇市内淺草區。へ替地に被成候。

幸龍寺草創興起、左之通。

一、東照宮様〇德川家康。遠州濱松御在之砌は、ちんとうと申所に寺御建立被下、朝暮御祈禱被仰付候。

一、其後駿府〇駿河國。え御移被爲成候時は、さきのみや〇駿河國。と申處に寺御立被下、御祈禱仕候。

一、其以後無程關東え御入國被遊候而、神田湯島〇市内。ニ寺御立被下、御祈禱仕候。

瑞林寺〇市内下谷區。　文政寺社書上ニ、

慈雲山瑞林寺

當寺〇瑞林寺。起立者、天正十九辛卯年〇紀元二五一年。乍恐依東照宮〇德川家康。台命、大久

安養寺

保治右衞門殿奉行に而、於馬口勞町（○市内日本橋區。）百間四方之寺地拜領被仰付、則堂塔御建立被下置、御朱印頂戴仕、日新が院號を以山號に可致旨被仰付、卽慈雲山と號候。右開山日新と申者、本山身延十七代之住持開基日蓮大菩薩に嫡々相承之弟子に而、權現樣（○德川家康。）御開國以前より毎度御懇之蒙上意、所々之御陣え御祈禱御札獻上仕、幷蠟燭獻上仕候。天正十八年（○紀元二五〇年。）小田原（○相模國。）御陣中え、御祈禱御札御馬之履一千足幷杉原紙等獻上仕候。日新え被下置候御直書之御消息數通、以今身（○甲斐國。）延山藏中に守護仕候。右由緒を以、權現樣（○德川家康。）御入國之砌、身延山（○甲斐國。）え千石之寺領可被爲有御寄附旨、御懇之上意有之候處、日新申上候者、當山者祖師日蓮正統之遺趾に而、一宗惣本山之道場に候得者、諸國參詣之且供を以相續致來候間、寺領頂戴之儀者、乍恐御免被成下、何卒御一統之砌宗門修學檀林地一ヶ所御免被成下、別に於御城下、身延宿院地一ヶ所起立被成下候者、永法流弘通仕、難有奉存候旨、奉願候處、兩樣共に御聞濟被爲遊、下總國飯高寺檀林御朱印三十石頂戴仕、當寺（○瑞林寺。）え茂御朱印頂戴仕候。

安養寺（○市内牛込區。）　文政寺社書上ニ云フ、

醫光山長壽院安養寺

寺起立相知不申候。元來御城平川口（○市内。）に罷在候處、權現樣（○德川家康。）御入國之砌、天正十九年辛卯（○紀元二五二年。）田安（○市内麴町區。）え替地拜領仕、其後田安（○市内麴町區。）御用地に付、天和二丙辰年（○紀元二三四二年。）替地當所（○市内牛込區。）え拜領仕候。

牛込

本松寺（○市内牛込區。）　文政寺社書上ニ、

牛込高田

長久山本松寺

起立天正十九卯年。（○紀元二五一年。）往古起立之地者相知不申候得共、御用地に付被召上、市ヶ谷尾張殿五段長屋邊（○市内。）え替地被下置候趣に御座候得共、其後類燒之砌舊記に燒失仕候由に而、地名幷年月等相知兼申候。

喜福寺（○市内本郷區。）　文政寺書上ニ、

本郷六丁目

孤峯山喜福寺

開闢之儀者、年月難相分候得とも、高慶と申僧開基仕、其後何世に候哉、全春代、御代官澤四郎右衞門殿御取次に而、天正十九卯年（○紀元二五一年。）拜領地に相成申候。

町方書上ニハ、「喜福寺門前。一門前町家起立之儀者、往古より喜福寺境内に而、

關東首府トシテノ江戸

天正十九年〇紀元二五一年。本郷〇市内本郷區。邊御代官澤四郎右衞門樣御取次に而、拜領地に被仰付。ニ下見ュ。

本覺寺　〇市内淺草區。　文政寺社書上ニ、

龍島山本覺寺

天正十九辛卯年〇紀元二五一年。起立と申傳、元馬喰町〇市内日本橋區。に御座候。

玉林寺　〇市内下谷區。　文政寺社書上云フ、

望湖山玉林寺

天正十九辛卯年〇紀元二五一年。起立。

開山用山元照和尚吉祥寺五世。慶長三戊戌年〇紀元二五八年。八日廿七日示寂。

本法寺　〇市内淺草區。　文政寺社書上ニ、

長瀧山本法寺

天正十九年辛卯年〇紀元二五一年。起立仕候。

宗延寺　〇市内下谷區。　文政寺社書上ニ、

報新山三光院宗延寺

起立年代、相知不申、天正十九辛卯年〇紀元二五一年。小田原〇相模國。より引地に相成

本覺寺　淺草新寺町

玉林寺　谷中

本法寺　淺草八軒寺町

宗延寺　下谷

蓮久寺　駒込鶏聲窪

福壽院　麹町十三丁目

法藏寺　四谷法藏寺横町

太宗寺

申候。

蓮久寺　〇市内石川區小。　文政寺社書上ニ、

朗昌山蓮久寺

開闢起立、天正十九辛卯年。〇紀元二五一年。元者神田明神下〇市内神田區。拜領地に御座候。

福壽院　〇市内四谷區。　文政寺社書上ニ、

祥雲山福壽院

起立不詳。但し境内之義は、天正十九年卯年〇紀元二五一年。之頃拜領被仰付候趣に申傳御座候。

法藏寺　〇市内四谷區。　文政寺社書上ニ、

五刧山辨財院法藏寺

起立之儀者、天正十九年。〇紀元二五一年。寺地拜領之節者、表四ツ谷通〇市内四谷區。より裏東福院〇市内四谷區。之邊迄有之候。

太宗寺

霞關山本覺院太宗寺

豐多摩郡内藤新宿町〇武藏國。ニ在リ。文政寺社書上云フ、

長安寺

當寺○太宗寺。起立之儀は、關東御入國之後、内藤家二代目内藤彌三郎後修理亮清成法名孤光院殿と號。屋敷地を拜領之節、太宗と申僧、當寺之場所に小庵を結び罷在たるにより、誰呼となく太宗が庵と申せしよし。

長安寺○市内四谷區。　文政町方書上、四谷長安寺門前書上ニ、

一、當地主長安寺、天正十五亥年○紀元二二四七年。於市谷本村○市内。草創仕候處、同○天正。十九卯年○紀元二二五一年。東照宮様○德川家康。寺社被遊御改候に付、御奉行板倉伊賀守様○勝重。より被仰付、御代官松下孫重郎様・伊奈熊藏様○忠次。御縄打に而、御差置御免被成下。

下谷龍泉寺町

龍泉寺

龍泉寺○市内下谷區。　古寺ナルコト勿論ナレドモ、其起立ノ日ヲ詳ニセズ。中興深盛天正十九年○紀元二二五一年。ヲ以テ寂スト云ヘバ、中興亦是ヨリ先ナリシナラム歟。今姑ク茲ニ附記ス。

東光山等印院龍泉寺

起立相知不申候。

中興法印深盛、天正十九卯年○紀元二二五一年。二月八日寂。

妻戀稲荷社　白山權現社　松平家忠邸營構　松平家忠邸營構事蹟

〔附記〕

妻戀稲荷社○市内本郷區。

文政寺社○湯島妻戀稲荷神主村木主殺。書上ニ、

天正十九年○紀元二二五一年。正月五日、神前え備候鏡餅を燒、献上仕候樣被仰付、則奉献上候。從是年々正月例と成、燒備献上仕候儀に御座候。○朝野舊聞裏稿云フ「按ずるに此上文に東照宮○德川家康。東國御巡見の序、稲荷社に御駕をよせられし事を記す。今年○紀元二二五一年。燒備を召されしも、此故あればなるべし。

白山權現社○市内小石川區。

文政寺社書上ニ、

天正十九年辛卯○紀元二二五一年。十一月、御鷹野御成の日、當社○白山權現社。御鎮座の傳記聞召されて、御神拜あらせられたり。

二十年壬辰○天正○十二月八日改元、文祿元年○紀元二二五二年。三月廿三日癸未○癸未、家忠日記、三正綜覽。忍○武藏國。城主松平家忠○又八郎。江戸邸ヲ營構ス。○家忠日記。

松平家忠邸營構　家忠日記云フ、

廿三日癸未○天正二十年○紀元二二五二年。三月。我等屋敷普請させ候。

四日○天正二十年○紀元二二五二年。四月。雨降。屋敷、家たて候。

是レ忍○武藏國。城主松平家忠ガ、其江戸邸ヲ營構シタルヲ指ス者ナル可シ。其位置明カナラズ。家忠日記又記ス、「廿一日辛巳○天正二十年(紀元二二五二年)三月。雨降。江戸ヘ參著候。傳馬町○市内日本橋區。佐久間所ヘ居候」。十二日庚午○天正二十年(紀元二二五二年)七月。舟橋○下總國。より舟に而江戸ヘ著候。我ら屋敷に居候」ト。卽チ三月廿一日○天正二十年(紀元二二五二年)。ニハ、家忠○松平。未ダ江戸ニ邸宅ヲ有セズ、傳馬町○市内日本橋區。人足問屋佐久馬平八方ニ寓シ、七月十二日○天正二十年(紀元二二五二年)。ニハ、其江戸邸既ニ成ルヲ以テ乃チ之ニ入リタルコトヲ知ル可シ。

譜第大名中、此前後ヲ以テ江戸邸ヲ營シタル者少ナカラザル可キモ、今其所傳ヲ得ズ。

淺草火災

廿六日丙戌○天正二十年卽チ文祿元年(紀元二二五二年)三月○丙戌家忠日記正綜覽。**夜淺草**○市内淺草區。**火有リ**。○家忠日記。

淺草火災事蹟

淺草火　家忠日記——

廿六日丙戌○天正二十年(紀元二二五二年)三月。　あさくさ筋○市内。に火事出來候。

精シキハ變災史ヲ看ヨ。

日比谷入江塡築

是月○天正二十年卽チ文祿元年(紀元二二五二年)三月。**德川氏江戸城ヲ增築シ、西丸ヲ創シテ、文祿二年癸巳**○紀元一五三年。**九月ニ及ビ、三年甲午**○文祿○紀元二三五四年。**正月、更ニ營築スル所有ラムトシ、伏見城**○山城國。**築造ノ役ニ會フテ中止ス。**○家忠日記。當代記。創業記考異。井伊家譜。聞見集。家忠日記增補追加。落穗集追加。**此間城濠ノ揚土ヲ以テ、日比谷入江等ヲ塡築ス**。○落穗集追加。文政寺社書上。

日比谷入江塡築事蹟

日比谷入江塡築　德川氏ハ入國當時、城池ハ僅ニ應急工事ヲ施シタルニ止メ、專ラ力ヲ城下ノ拓開ニ用ヒ、文祿元年○紀元二五二年。ニ至テ、城池ノ修築ニ著手シ、西丸ヲ營築ス。事皇城篇ニ具記ス。而シ城濠掘鑿ノ揚土ハ、之ヲ日比谷入江其他ノ塡築ニ用ヒタル者ノ如ク、落穗集追加ニ、左ノ如ク見ユ。

小木曾申候は、惣て西の御丸下の儀は、地高に在之候處に、西の御丸御堀などもほられ候に付、大分の餘り土有之、獵師町○市内麹町區。日比谷邊。邊の茨原の儀は、大形築地のごとくに成、獵師町○市内日比谷邊。の儀も、程なく一つゞきの町屋となり、肴店其外種々の賣買物なども有之、處の名をばひゞ屋町と申、殊之外繁昌仕候處に、其以後又御曲輪内と成候節、只今のひゞや町○市内芝區。引被申候由。是又小木曾申候也。

關東首府トシテノ江戸

參考落穗集ハ之ヲ解シテ「一つゞきの町屋となり、肴店その外種々の賣買物なども有之、所の名をひゞや町と申とは、是又本文の通りたるべし。ひゞといふものは、ひゞ網など唱ふ。正字は無之、漁人詞歟。○中略。江城下御繁花に付て、品川○武藏國表・深川○市内。裏等、此ひゞ其數幾千に及び候ゆへ、上總及び三浦○相模國。本牧○武茌原郡。藏國等の漁獵少くなり候ゆへ、かの浦〳〵のものどもも愁訴年を經、ことに一とせ大水にて、そのひゞ悉く浪にとられ候より、打つゞきさつらひ候も、悉く浪にとられ、終に再興なりがたく、斷絶せしよしなり。○中略。然しそのむかしひびかせぎいたし候獵師ども居候間、ひゞやといひしもの、此所に在て、終に移し出されしが、今芝口○市内芝區。のひゞや町なり。又此所の肴屋町、京橋○市内京橋區。外に出されしもの、今の新肴町○市内京橋區。なり。同じく彌左衞門町○市内京橋區。といふも、疊町○市内京橋區。などいふも、ひゞや町の同所なりしが、各移し出されしとぞ。されば彼新肴町○市内京橋區。の一名を内町と唱ふるは、彼御城の内の町といふ、其むかしの土俗の唱へのよし、かの所のふるき町人どものもの申傳ふ所なり」ト云ヘリ。文政町方書上左ノ如ク見ユルハ、從來ノ漁村、此頃ヨリ、漸ク町屋ト爲リシヲ指ス者ナル可シ。

芝口町一丁目東側○市内芝區。

一、町内起立之儀者、相分り不申候得共、往古日比谷御門邊○市内麹町區。有之候町屋、年月不知當所○市内芝區。え替地被仰付、日比谷町一町目と相唱。○下略。

芝口二町目○市内芝區。

一、町方起立之年代草創人等、相分り不申候得共、往古は日比谷御門内○市内麹町區。に罷在、日比谷町と申候處、慶長年中○紀元二二五六年——二二七四年。當所○市内芝區。え引地に相成、日比谷町二町目と相唱申候。

芝口三町目○市内芝區。

一、町内起立之儀者、書物等燒失仕、相分不申候得共、名主長兵衞先祖長兵衞儀者、右町草創人に有之、慶長十一午年○紀元二六六年。迄當時之日比谷御門之内○市内麹町區。に有之候而、日比谷町と相唱候處、同年○慶長十一年（紀元二二六六年）。月日不知當場所○市内芝區。え引け地に相成、如元日比谷町と唱來候。

江戸町年寄

江戸町年寄事蹟

十月○天正二十年卽文祿元年（紀元二二五二年）。遠州ノ商人喜多村彌兵衞ヲ江戸町年寄トス。○御用達町人由緒。

江戸町年寄　天正十八年○紀元二五〇年。八月、商人樽屋藤左衞門・奈良屋市右衞門ガ關東首府トシテノ江戸

江戸町年寄ト爲シタル者歟。

町年寄　喜多村彦右衛門

一、私先祖喜多村彌兵衛義、權現様（家康。）御入國之節、江戸表相應之御奉公御用可被仰付之旨に而、從遠州被爲召連、御供仕、御當地（江戸。）町年寄被仰付之、天正二十年辰（元。文祿元年紀二二五二年。）十月、御黑印頂戴、江戸三人の年寄之内に而、私迄九代無斷絶、御役相勤申候。（略。中）

一、三ヶ村（武藏國豐島郡關口村、小日向村、金杉村。）御代官、幷刀帶之熨斗目著用、神田玉川兩水道、幷類燒之度々拜領物、拜借米等、何も同役一同に而、右は樽屋藤左衛門方にて書出候故略之。

——御用達町人由緒

天正日記彦兵衛有リ、同書校註之ヲ喜多村氏ノ祖トス。或ハ彌兵衛其人邪非邪。

寺院來移及創立

是年（天正二十年卽文祿元年紀元二二五二年。）**寺院ノ江戸ニ來移リ、及創立スル者若干有リ。**（文政書上。）

寺院來移及創立事蹟

寺院來移及創立　左ノ如シ。

誓願寺

田島山快樂院誓願寺

文祿元辰年（紀元二二五二年。）開山東譽魯水和尙相州小田原誓願寺住職之節、神君様（家康。）御鷹野御序、寺地上覽似田中島と被仰、依而田島山と稱來候。

誓願寺草創者、人王百十八代後陽成院御宇天正十八庚寅年（紀元二二五〇年。）此寺（誓願寺。）本在相州小田原、春三月（天正十八年紀元二二五〇年。）北條家敗軍、夏四月（天正十八年紀元二二五〇年。）北條（氏政。）滅亡、依而小田原（相模國。）爲荒廢之地、江戸（市内。）へ賜地、神田白銀町壹町目（市内。）一宇御建立。

——文政寺社書上

誓願寺門前

一、右門前町屋之儀は、田島山快樂院誓願寺草創、人皇百拾八代後陽成院御宇、天正十八庚寅年（紀元二二五〇年。）相州小田原に而、東譽上人開基、文祿元壬辰年（紀元二二五一年。）御當地（江戸。）白銀町壹町目邊に而寺地拜領被仰付。（下略。）

——文政寺社書上

〔附記〕誓願寺坊中

文政寺社書上云フ、

快樂院（誓願寺坊中。）

本寺（誓願寺。）元神田白銀町（市内。）に有之候節、文祿三甲午年（紀元二五四年。）塔中七軒致建立候其一ヶ院に御座候。

麻布龍土六本木（市内麻布區）

深廣寺

高明山松德院深廣寺

起立之儀は、文祿元壬辰年（紀元二五二年。）西久保城山邊（市内芝區。）に而御座候。

芝三田寺町（市内芝區）

清久寺

天祥山清久寺

起立之儀は、文祿元壬辰年（紀元二五二年。）四月本寺九世呑諸和尚之起立に御座候。

妙福寺

往古は、於八丁堀（市内京橋區。）拜領地え起立罷在候。

淺草新寺町（市内淺草區）

長久院

皇頂山妙福寺

文祿元壬辰年（紀元二五二年。）建立仕候。

芝（市内芝區）

芳荷山長應寺長久院

起立開山等之儀、舊記に有之候。寫左之通。

芝高名輪村芳荷山長應寺儀者、於三河國西之郡者、古跡に而御座候。西之郡

邊者鵜殿家領地に而、於三州者鵜殿家大身に而御座候。長應寺は鵜殿家之菩提寺に而、七堂之寺之由申傳候。鵜殿三郎藤原長持之長男藤太郎氏照滅亡之時節、城（茂）寺（茂）燒失仕候。

其以後は、鵜殿家或は打死、或は立退、誰（茂）建立之人無之故、退轉仕候。

權現樣（德川家康。）御臺所西之郡樣は、鵜殿之御家に而御座候故、長應寺を一度御建立可被成と御意被成、鵜殿家之子族日翁聖人、幼少より出家に御取立被遊、其已後文祿元壬辰年（紀元二五二年。）日比谷御門之內（市内麹町區。）に、日翁を爲住持長應寺を御建立被遊候。其寺地御用地に罷成、竹川町（市内京橋區。）に而代地被下、寺引移申候處、最も又御用地に罷成、八町堀（市内京橋區。）に而代地被下、寺引越申候處、又御用地に罷成、芝高名輪村（市内。）に而代地拜領仕候。長應寺者、三河に而退轉之寺を、於當地御再興被遊候。

長泉寺（市内本郷區。）

享和三年（紀元二四六三年。）閏正月長泉寺住職廓巖書上ニ據レバ、

寺地ヲ賜フ亦文祿元年（紀元二五二年。）ニ在ル如シ。

江府本郷丸山祝峯山長泉寺開闢起立

――文政寺社書上

作レ恐申上候。長泉寺境地、往古者、小石川金杉（市内。）に御座候而、永祿三年庚申

關東首府トシテノ江戸

華德院

○紀元二二〇年。起立に御座候。拜領地に相成候儀者、起立年ゟ三拾餘年相過候而、文祿元壬辰年○紀元二五二年。右之地所拜領被仰付。○下略。

華德院○市内淺草區。　文政寺社書上ニ據レバ、

稱光山長延寺華德院　淺草天王寺

當寺○華德院。元下野國佐野の邊に在之、天台第二祖慈覺大師之開基にして、其後世代不詳、年號不知、武藏國霞ヶ關に移り、慶長年中○紀元二二五六年——二二七四年。今の淺草○市内。の地に移し、閻王の別當と相成候よし、書留、相見申候。往古理正院と申候。○下略。

第一世權大僧都永奮、文祿元年○紀元二二五二年。月不知三日寂。

東京府誌ニハ、「貞觀年間○紀元一五一九年——一五三六年。僧慈覺開基、僧永奮中興。」ト有リ。永奮文祿元年○紀元二二五二年。ヲ以テ寂スレバ、或ハ此頃ノ轉移中興ニ係ル者歟。

寶祥寺

寶祥寺○市内牛込區。　開山大休林甫和尚文祿元年○紀元二二五二年。ヲ以テ寂スト傳フ。亦此頃ノ創立ナラム歟。姑ク玆ニ附記ス。

金谷山寶祥寺　牛込高田

起立之儀は相知不申、元地之儀は、市ヶ谷八幡宮之西谷○市内。に罷在候。

開山東昌寺五代大休林甫和尚、文祿元年壬辰○紀元二二五二年。七月八日寂。右は筑前寶滿之城主高橋氏之一族に御座候。

開基寶祥寺殿久屋伊長居士、俗姓松下氏元祖、慶長五庚子年○紀元二二六〇年。八月朔日卒去。

——文政寺社書上

藤原肅江戸ニ來ル

藤原肅來江戸事蹟

文祿二年癸巳○紀元二二五三年。藤原肅○愃。江戸ニ來リ、家康○德川。ノ爲ニ貞觀政要ヲ讀ミ、閑暇過淺草寺詩角田川詩及四景我有解ヲ作リ、以テ武江ノ景勝ヲ敍ス。○惺窩文集。羅山先生文集。

藤原肅江戸ニ來ル　羅山先生文集所收惺窩先生行狀云フ、「文祿二年癸巳○紀元二二五三年。赴武州之江戸、執謁於源君、○德川家康。命令讀貞觀政要、閑暇作四景我有文、爲東關之遨遊。」ト。惺窩文集載スル所過淺草寺詩幷序、角田川詩幷序、四景我有解等、此時ノ作也。

過淺草寺詩幷序

達武之江戸城里許、地曰淺草、有寺曰淺草。嘗聞、觀音大士堅座之妙境也。一日呼杖屨、携家僮六七輩、放目信脚遊歷、漸入此境。則四顧閑爾、不聽群籟。雲淡地淨、而

肺肝爲之炳然、參天溜雨、雨杉風檜、綠松連枝處、疑問金沙灘上之嬋娟。白花送香時、怪坐補陀落迦之老人。老屋蕭條三十二宇、隱映竹林蓬蒿之間、而擔半傾、垣漸頹、突兀其中間者、大士之宮也。左畔右畔、層塔高廟、屹立者、鬱乎者、大小若干、皆其附庸也。時野僧三二枚、于茅索、絢、以補直祠堂之罅漏。予就渠讀口碑、曰、寺之揷草、迺推之則遠在堆古天皇統御之日。嘗此濱有漁者、曰濱成。曰竹成。二漁一時下網捕魚、網裏稍動、而如有物。學之則數寸之觀音像也。拜以奉祠焉。靈異不可縷數、遂威一方勝區。始寺僧學法相、慈覺師寓于此、改而成天台。今掌寺事者專堂、僅頭是彼二漁之裔也。來由粗如斯。予愈問愈不答。劍首之一映而去矣。雖意根如薤本之不可拔不奈何。予戲呼童子、諭曰、蛤殼裏得之者文宗、而魚網中得之者濱成也、若有誠信、則無剎不現身、爾輩敬之。童子侍傍微哂曰、應身今安在哉、衆人之不誠信乎、大士之不靈驗乎。予指白櫻樹吟曰、意足不求顏色似、前身相馬九方臯。白衣仙人來也、吾無隱爾。童子低頭不答、予亦一笑。

昔年遺事記濱成。弘誓海中曾度生。又爲詩人一身現。白衣仙子白花櫻。

角田川詩幷序

淺草之東畔、跬步而有角田川。輕舟短棹浩歌一望、有鳥翩翩可愛。所謂觜與脚赤

者、昭昭乎倭歌集中。不問其名、亦知爲都鳥。蓋名者實之賓也、故其鳴如京都聲。予不覺發鄉思。南巢北嘶、物尙然、況人乎。昔白氏左遷江州之湓浦、而舟中聽彈琵琶者之有京都聲、淚濕青衫。千載之佳話也。于彼于此、江州之湓浦、江城之角田、舟中之京客、感京都聲者同、而所愧不能作歌行矣。雖然其鳥語之管絃、豈不及商婦之琵絃也耶。吁。

飛鳴有鳥角田川。名曰京都聲自然。我亦舟中湓浦客。斷腸認作琵琶絃。

四景我有解

何地無山。山之無色者、意之懶也。何地無水。水之不清者、心之忙也。所謂意懶山無色、心忙水不清。古人云、我亦云。我日本六十州之間、誇游觀廣覽之美者、以關以東之八州爲甲。八州之美者、以士峰武野、隅田筑波之四景爲冠。故不到者爲非人矣。予亦以斯遊爲意久矣。嘗聞、佳山水者、觸發道機。仲尼之登泰山在川上、有所以哉。文祿癸巳（二年紀元二五三年）。蒙八州牧伯源亞相家康卿之佳招、而遊武之江城、而踰年。旅寓環堵之室中、書我有之二大字、而扁之。有客笑曰、子之蕭然之行李、未有尺地、未有小屋、未有一物、何以爲我有哉。予曰、甚哉汝之拘矣、陋哉汝之隘矣。我有一宇、不假工巧、不費修補、汝卻不知哉、圓顱于上、是我棟宇也、方趾于下、是我基址也、載

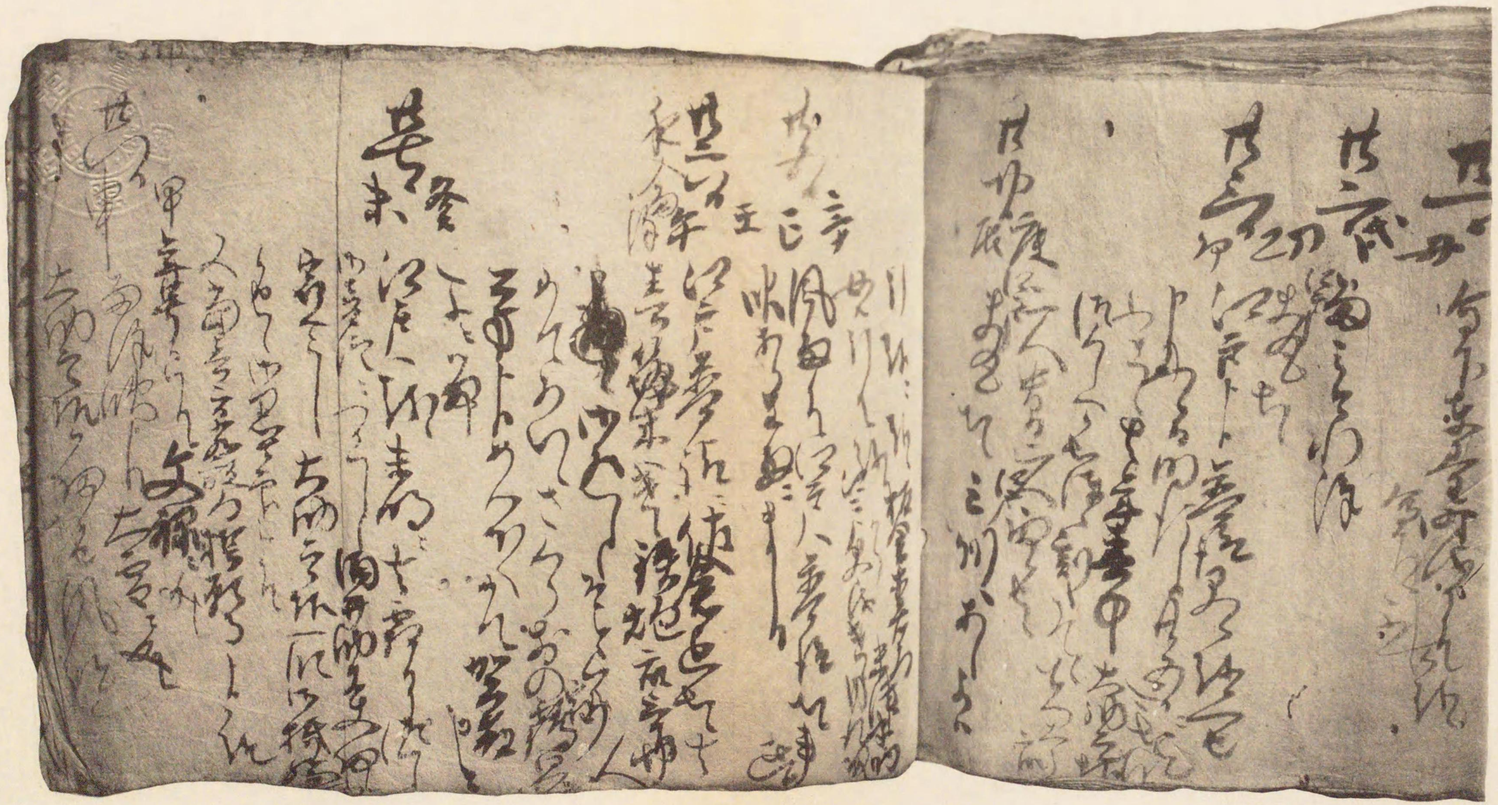
我伏、我、到處有、我屋、不、可、言、無矣、我屋之所在者、乃我地也、不、可、言、無矣、瞻、前忽後者、皆我尤物也、悉我珍具也、不、可、言、無矣、夫雪之於、冬、雖、爽、未、足、奇焉、夏雪皎潔之朝、一由旬之士峯之高懸也、仰成、一箇吳笠、即却不、重、花之於、春、雖、美、未、足、奇焉、秋花撩亂之日、數百里之武野之橫舖也、俯成、一箇楚鞋、則又能香、隅田之水之洄洄而貯、月者、瓢中之物也、筑波之山之擾擾、而抹、雲者、詩中之料也、豈止是而已哉、萬象者屋裏之有也、不、可、與、人。客曰、吁子之言者、揚子之爲、我也、君子者不、可、稱矣。曰然也、衆人者、屋裏之人也、以可、與、之。客曰、子言者、墨子之兼愛也、君子者不、可、語矣。曰然則何如。曰。物皆有、主、豈無、主也耶、欲、自有、不、可、得、欲、與、人亦不、可、得、物皆有、主、屬、主而已。曰、主爲、誰乎。曰府君、問、府君、府君不、有、問、衆人、衆人不、有、於戲人之所、欲者、我所、不、有也、我之所、有者、人所、不、欲也、於、是乎、室有、空虛、心有、天遊、納、隅田河于瓢中、挾、筑波山于詩中、士峯之笠、武野之鞋、鞋襪從、此始、瓢飲、乎此、詩興、乎彼、恍然自適、則非、四景而已、非、八州而已、非、六十州而已、天下之山色、不、入而目染、天下之水清、不、洗而耳濡、游覽之美、擧在、一身。山水物色、游覽之美而已哉、天下之至理、不、思而心廣體胖也。初是爲人歟。斯遊樂哉。地其不、廣乎、屋其不、大乎、物其不、備乎、實威武不、能、屈、富貴不、能、奪、貧賤不、能、移、意必固、我既絕之後、優哉遊哉、我以爲、我有、

家忠日記

（原（慶四）す四分。（延七）す二分。）

子爵松平忠和藏

松平家忠自記スル所。家忠（○松平）慶長庚子（五年○紀元二二六〇年）ノ役、伏見城（○山城國）ニ壯烈ナル忠死ヲ爲シタルコト、人知ル所ノ如シ。又文才有リテ連歌ヲ能クス。本文ハ日記ノ内、文祿二年（○紀元二二五三年）正月廿三日ヨリ廿九日マデノ條也。



云。客翻然起而斂衽謝曰、子其學登而小天下、臨而嘆晝夜之者歟。非揚與墨矣。

以テ當年ノ角田川及江戸ノ狀況ヲ推ス可シ。

江戸普請

此頃、江戸城内外、幾多ノ土木工事有リ。○當代記。家忠日記。

江戸普請事蹟

江戸普請 文祿二年○紀元二五三年。ニヲ中心トシ、之ガ前後江戸ニ幾多ノ土木工事有リ。當代記

文祿二年○紀元二五三年。中、武州江戸普請專也。

ト見ユルノミナラズ、家忠日記ニ之ニ關スル記事多カリシコト、皇城篇既ニ之ヲ記ス。此等ハ勿論城池ノ普請多カル可シト雖、城下ノ普請亦少ナキニ非ザル如シ。今其箇所等ニ關スル詳傳缺グ。

大友氏牛込屋敷

是年○文祿二年(紀元二五三年)。府内○豐後國。城主大友吉統國除カレ、子義乘○大友宗五郎。

徳川氏ニ預ケラル。義乘○大友宗五郎。後仕ヘテ常陸筑波郡ノ内三千石

武藏牛込○市内。ノ内三百石ヲ賜ヒ、牛込○市内。ニ居ル。今ノ榎町○市内牛込區。

大友氏牛込屋敷事蹟

大友氏牛込屋敷 八、

濟松寺邊其邸阯ナリト云フ。○諸牒餘錄。寛政重修諸家譜。御府内備考。

關東首府トシテノ江戸

一、義統○大友。代、分國錯亂、天正十五年○紀元二四七年。秀吉殿下○豐臣。九州征伐之砌、豐後一國三十七萬石餘ヲ義統○大友。ニ賜候。其後敍ニ四位侍從一候。文祿元年○紀元二二五年。朝鮮在陣之時依ニ讒言一領國ヲ被ニ召放一、佐竹義宣ニ被ニ預一候。嫡子宗五郎義乘○大友。者、權現樣○德川家康。被ニ爲預一之候。○中略。慶長十年○紀元二六五年。七月十九日病死仕候事。

一、義統○大友。嫡子大友宗五郎義乘、敍ニ五位一、任ニ侍從一候。文祿二年○紀元二六五年。退國之後、權現樣被ニ召仕一之、常州筑波三千石、武州牛込三百石之地拜領仕候。浪人衆と申之。今之高家衆之事候。

——譜牒餘錄

吉統 初義統。長壽丸。五郎。左兵衛督。從五位下。從四位下。侍從。○大友。○傳略ス。

義乘 鹽法師丸。宗五郎。從五位下。侍從。

母は吉弘氏。文祿二年○紀元二五三年。父吉統○大友。領國をのそかるゝのとき、義乘○大友。をは、東照宮○德川家康。あづからせたまひ、後奉仕し、常陸國筑波郡のうちにをいて三千石、武藏國牛込の內にして三百石の采地を賜ひ、すべて三千三百石を知行し、牢人衆に列す。慶長五年○紀元二六〇年。上杉景勝御征伐に、台德院殿○德川秀忠。に供奉し、小山○下野國。にいたる。このとし○慶長五年紀元二二六○年。吉統○大友。秋田實季にめし預けらるゝといへども、義乘○大友。にをいては、もとのごとく近侍したてまつる。十七年○慶長紀元二二七二年。七月十二日死す。年三十六。法名眞馨。妻は高橋鎭種入道紹運が女。

一女子　一尾淡路守通春が妻、

一女子 佐子局　東福門院○源和子。の御所につかへ、のち弟正照○大友。が三男近江守義孝○大友。を養ひて子とし、別に家を起す。これ大友式部大輔義珍が祖なり。

一正照 長熊丸。長三。右京。松野を稱す。

一女子　伊藤權右衛門某が妻、

一義政 一法師丸。左兵衛督。父にさきだちて死す。

一義親 龍丸。長五郎。右衛門督。母は紹運○高橋。が女。父が家を繼、台德院○德川秀忠。につかへたてまつる。元和五年○紀元二二七九年。八月八日死す。年二十七。法名玄昌。嗣なくして家たゆ。妻は今川左馬助範以が女。

一女子　上杉源四郎長員が妻。

「女子　畠山外記親元が妻。

ト傳フ。大友義乗ノ牛込○市内。ニ住シタルヤ知ル可シ。其地ハ、御府内備考、

大友屋敷蹟

大友家の傳説を聞に、大友宗五郎義延修理大夫義統の嫡男なり。の旅館は、今の濟松寺○市内牛込區。の所にて、大友屋鋪と號して、大なる松の木あり。按に寛永（○紀元二二八四年——二三○三年）の比、大友家屋へ御成ありしとみゆ。その時は、素心尼の居し所なるべし。後に寺となりて蔭涼山濟松寺と號するも、この故なり。今御先手の組屋敷のうちなる松は、大友の家人吉良傳左衞門深柄七右衞門の二人義延○大友。に從ひ來れり、かの吉良○傳左衞門。が營作する數寄屋の松なり。傳左衞門○吉良。は、關ヶ原○美濃國。の時、義延○大友。の父義統○大友。へ使して、遂に西國にとゞまれり。又深柄○七右衞門。は、義延○大友。に隨身して、主君早世の後慶長十二（○七歟）年（○紀元二二六七年）七月十日卒せりと。前にいふ所と時たがへり。子孫酒井家に寄食し、いまかの家にありといふ。南向茶話。牛込天神町○市内。民家の所往昔文祿○紀元二二五二年——二二五五年。の比、大友左兵衞督義統の屋敷なり。此義統○大友。文祿○紀元二二五二年——二二五五年。のころ朝鮮征伐の役に怠り、領國沒收、毛利家へ被預、其後佐竹家へ被預替、常陸にて卒す。嫡大友宗五郎義延は、關東に被預、此處に居住し、義延○大友。後敍從四位下侍從豐後守、常陸國筑波郡にて三千五百石、戰功に依てなり。無程早世、斷絶す。今の濟松寺の東の方、大友屋敷、大友の松と云あり。江戸餘礫。大友家舊蹟は、今の濟松寺の邊なりといふ。相傳ふ、昔慶長○紀元二二五六年——二二七四年。元和○紀元二二七二年——二二八三年。のころ、大友家この所にて三百石ほどの地を領せしと。初大友左衞督義統、領國を沒收せられしに、のちその子宗五郎義延○大友。御當家にめし出され、常陸國にて三千石、江戸牛込にて三百石を賜ふ。この人慶長十七年壬子○紀元二二七二年。七月二日卒す。とし三十六歳。その子左兵衞督義親○大友。家をつぎ、是も元和五年己未○紀元二二七九年。八月廿五歳にて卒し、世つぎなければ家たへたり。このころ此地も公にいりしなるべし。改選江戸志。

ト記セバ、濟松寺○市内牛込區。ノ邊其處ナル可シ。而シテ由原宮年代略記○大日本史料所收。「慶長十年乙巳○紀元二二六五年。七ノ十九、大友豐後守義統、卒ニ江戸牛込。牌銘中庵宗巖大禪定門」ト見エ、豐陽志○大日本史料所收。「大友豐後守左兵衞督從四位下侍從義統ハ○中略。文祿二年○紀元二二五三年。五月、於ニ朝鮮軍法ニ背給ヒ、秀吉公○豐臣。ノ勘氣ヲ蒙リ、豐後國守護職ヲ沒收セラレ、安藝宰相輝元○毛利。ノ預ニ成、周防大畑ニ蟄居シ、慶長五年○紀元二二六○年。石田○三成。ニ組シ、豐後ニ歸リ旗ヲ擧シガ、軍慮拙ク、黑田如水○孝高。ニ降參

シ、虜ト成、江戸牛込○市内。ニ蟄居シ、同○慶長。十年乙丑○巳。七月十九日逝去アリ。法名中庵宗巖大居士ト云。ト見ユルニ據レバ、吉統○大友。亦或ハ牛込○市内。ニ住シタル如シト雖、一面慶長日記ニハ「七月十九日○慶長十年(紀元二二六五年)。大友宰相義統入道宗巖於常州配所卒。」ト有リ。バジェー日本耶蘇教史○大日本史料所收。亦「吉統○大友。は、初め基督教を棄て、謫地に住したりしが、是より先き、感賞すべき改宗を爲したることは、既に述べたり。其後は耐忍苦行を以て日を送れり。初めメアコに追放せられ、其舊領地を復せんとして投獄せられ、復釋されて、遂に出羽の秋田に謫せられ、其國の領主に預けられたり。然るに出羽の領主も其封を遷されしかば、吉統○大友。も之に伴ふことゝなり、非常の困難に陷れり。」ト爲ス。寛政重修諸家譜ニモ秋田實季ニ預ケラレタルコト見ユ。實季○秋田。慶長七年○紀元二六二年。五月八日封ヲ常陸國宍戸ニ移セバ、共ニ宍戸○常陸國。ニ移リテ其地ニ卒シタルヤモ知ル可カラズ。牛込○市内。ニ卒ストセバ、義乗○大友。ノ居邸ニ來リ住ミタル者ナル可シ。孰カ是ナルヲ知ラザル也。

寺院ノ來移及新建

寺院ノ城下ニ來リ移リ、及新建スル者若干。○文政寺社書上。

寺院ノ來移及新建

文祿二年○紀元二五三年。中ニ寺院ノ來リ移リ及新建セラレタル者、左ノ如シ。

法禪寺○市内深川區。　文政寺社書上ニ、

深川

日照山專求院法禪寺

起立之儀は、至德元子年○紀元二四四年。○紀元二二五三年。神君樣○德川家康。依上意、品川宿○武藏國荏原郡。ゟ道三河岸○市内麹町區。え轉地被仰付、諸堂御造營。

中興開山英譽上人雲碩和尚、慶長七寅年九月廿三日卒。俗姓伊賀守範俊。於美濃國領十二萬石餘、織田信長公之臣に而、英雄之聞有之、神君樣○德川家康。より度々被召候得共、忠臣不事二君、迚、遁世之由。三州大樹寺に而剃髮。其後增上寺十二世源譽觀智國師御弟子相成候由。年月相知不申。品川○武藏國荏原郡。法禪寺住職者、文祿年中○紀元二二五二年—二二五五年。と申傳候。年月相知不申候。住職中、日日登城之義、御使番を以數度被仰付候得共、遠方故御斷申上候處、御免無之。依而近邊え轉地被仰付候處、是又遁世之身に而、何之望も無之、後世之營專志、旁擅緣も有之、容易に難相成旨御受申上候。然處、强而依君命、只本尊と自分而已相移候旨、則道三河岸○市内麹町區。に而六十坪程之寺地被下置、諸堂造營、

關東首府トシテノ江戸

本尊安置仕候。其砌山號計り相改日照山と可ㇾ稱旨、君命之由申傳候得ども、安永度○紀元二四三二年―二四四〇年。類燒之節、記錄燒失仕、其儀不ㇾ詳。但中興最初住職之寺、只今は品川宿法禪寺御座候。神君樣○德川家康。御歸依不ㇾ淺、御入國之砌、三河ゟ被召連、日々登城御對話、御直に獨禮席被仰付候。

廣德寺○市內下谷區。　文政寺社書上ニ、

圓滿山廣德寺

文祿二癸巳年○紀元二五三年。於神田內○市境內拜領、壹萬坪と申傳。當時松平伊賀守殿屋敷其地と云。○中略。尤古來相州湯本に在ㇾ之北條家開基文祿二年○紀元二五三年。御當地○江戶。ゑ被召出候由申傳之事。

長龍寺○市內牛込區。　文政寺社書上ニ、

富聚山長龍寺

右起立之儀者文祿二癸巳年○紀元二五三年。心岩舜應和尙、於四番町○市內麴町區。新に空地拜領仕、一宇建立。

江砂餘礫ニハ、「長龍寺、むかしは土手四番町河野勝左衞門越智通泰居屋敷○市內麴町區。へ、朝野舊聞裒稿云フ「案ずるに、此書〈○江砂餘礫〉河野通泰の屋敷とあるは疑ふべし。文祿二年○紀元二五三年。建立す。」ト有リ。

長泰寺　文政寺社書上ニハ、

鳳仙山長泰寺

當寺○長泰寺。起立之儀は、本寺○長龍寺。二世舜應和尙弟子平僧嚴雪和尙、四番町○市內麴町區。におゐて空地を拜領し、一庵を建立し、平喜山長泰寺と名け、平僧末寺に相願、平僧開山と成り、其後平僧二世宗達和尙當所○市內牛込區。ゑ替地拜領仕。東京府誌ニハ「文祿二年○紀元二五三年。創建、僧宗達開山。」ト見ユ。

蓮妙寺○市內淺草區。　文政寺社書上ニ、

法乘山蓮妙寺

文祿二癸巳年○紀元二二三年。矢之藏○市內日本橋區。に而、寺地拜領仕候。

西念寺○市內四谷區。　文政寺社書上ニ、

專稱山安養院西念寺

起立は文祿二癸巳年○紀元二五三年。中。元寺地は麴町八丁目南横町志水谷○市內四谷區。ゑ替地拜領被仰付候。

と申所に罷在候處、惣御堀御普請に付、寬永十一甲戌年○紀元二九四年。中、當所○市

安樂寺

安樂寺○市内四谷區。　文政寺社書上ニ、　四谷南寺町

醫王山延命院安樂寺

起立之儀は文祿二癸巳年。○紀元二五三年。但地所之義は麹町清水谷に而、慶長十七壬子年○紀元二二七二年。寺院拜領罷在候所、御堀御用地に付被召上、爲代地、只今之處、寛永十一甲戌年○紀元二二九四年。拜領仕候。

宗泰院

宗泰院○武藏國豐多摩郡。　文政寺社書上ニ、　市谷左内坂

永昌山宗泰院

當寺起立之義は、嘯山春虎和尚四番町○市内麹町區。に而少々明地を求、菴を結居住仕罷在候所、其頃文祿二癸巳年○紀元二二五三年。境内拜領仕、永昌山宗泰院と相改、開闢被致候。

附記　春日神社釣燈籠

〔附記〕　春日神社釣燈籠銘ニ云フ、

市内芝區三田壹町目春日神社釣燈籠銘ニ云フ、

春日社　奉寄進。

右奉祈武運長久、子孫繁昌、諸願成就處也。

文祿貳年○紀元二二五三年癸巳九月吉日　施主奏樂寺晹雪敬白

千住大橋架設

千住大橋架設事蹟

春日社寄進爲現世安穩、後世善處也。

文祿貳年○紀元二二五三年癸巳貳月吉日　施主井上梅雲敬白

三年甲午○文祿○紀元二二五四年。九月、千住大橋ヲ架ス。○天寛日記。泰平年表。武江年表。新編武藏風土起稿。東京地理志料。

千住大橋架設

一、文祿三甲午年○紀元二二五四年。千住大橋初而掛渡し、伊奈備前守○忠次。掛りに而出來仕候。大橋鎭守同所熊野權現別當圓藏院方記錄に有之、其外小普請方御役所に筆記等無御座候。委細之儀者相分兼申候。三橋飛彈守差出候書付。——天寛日記

九月○文祿三年(紀元二二五四年)。千住大橋を始て掛くる。此地の鎭守同所熊野權現別當圓藏院の記錄に、伊奈備前守殿(○忠次)これを奉行す。中流急湍にして橋柱支ゆるし、船中の人水に漂ふ。伊奈侯(○忠次)熊野權現に祈りて成就すといふ。——武江年表

文祿三年○紀元二二五四年。始テ千住○武藏國南足立郡。ニ橋ヲ架ラル。是ヲ千住ノ大橋ト云フ。——泰平年表

大橋　南ノ方○武藏國南足立郡千住町。荒川ニ架ス。長六十六間。幅四間。御入國ノ後北國ノ通路自由ナラシメンガ爲、伊奈備前守忠次ニ命ゼラレ、文祿二年○紀元二二五三年關東首府トシテノ江戸

ヨリ三年〇文祿二二五四年。〇紀元ニ至リテ掛渡セリト。其頃ハコヽヨリ二町程水上ニアリ。其地當時海道ニ係リシ渡裸川ノ渡リトテ渡津アリシ地ナリト云。其後年過テ今ノ橋ヨリ少シク西ニ掛直サレシガ、夫モ替リテ天明四年〇紀元二四四四年。今ノ所ニ掛ラレシヨリ、御普請度々ニ及ブト云。相傳フ、小塚原町〇武藏國北豐島郡。熊野社ハ、文祿年中〇紀元二二五二年—二二五五年。始テ橋ヲ掛ラレシ時、彼社ニ祈誓シテ功成シカバ、其後修理ノタビコトニ、橋ノ殘木ヲ以テ當社ヲ修造セラルヽコト定例ナリ、土人是ヲ橋ノ守護神ト呼ベリ。棟札ノ中ニ正保四年〇紀元二三〇七年。ノモノアレバ、文祿〇紀元二二五二年—二二五五年。ヨリ後ニ掛直サレシハ此年ノ事ニヤ。出水ノ節ハ、人夫ヲ出シテ橋ノ流失ヲ防ト云。

此外諸書載スル所、之ヲ略ス。

——新編武藏風土記稿

寺院ノ來移及創建

是年〇文祿三年〇紀元二二五四年。城下ニ來移リ、及創建スル寺院若干。〇文政寺社書上。

寺院ノ來移創建事蹟

長延寺

文祿三年〇紀元二二五四年。城下ニ來移リ、及創建シタル寺、左ノ如シ。

長延寺〇市內牛込區。　文政寺社書上ニ。

萬昌山長延寺　市ヶ谷

當寺〇長延寺。起立之儀者、文祿三午年〇紀元二二五四年。月日不レ知、開山喚英長應和尙、幷弟子笑岩長閑和尙、遠州濱松罷在候時分、長閑者、神祖〇德川家康。御歸依僧に而、關東御入國之砌、被召連、御供仕、當國〇武藏國。え罷越候。其刻成瀨隼人正御願を以、寺地拜領、幷寺建立之御奉加御俵粮拜領仕由に候。右長閑者、不斷御近習仕、御鷹野之御供にも被召連候。

壽松院

壽松院〇市內淺草區。　文政寺社書上ニ、

不老山無量寺壽松院

當寺開山善譽林貞上人、最初鍛冶橋御門之內〇市內麴町區。にて寺地拜領之上、文祿三午年〇紀元二二五四年。一寺起立成就。當時松平阿波守殿屋敷地之由申傳候。然處慶長八年〇紀元二二六三年。右爲御用地被召上、柳原雁淵〇市內神田區。にて代地被下置、其後當寺〇壽松院。五世宗譽廓運代、正保元酉年〇紀元二三〇四年。又々當所〇市內淺草區。え轉地拜領被仰付候。右開山善譽上人、天正年中〇紀元二二三一年。相州小田原不老山無量寺壽松院住職、文祿三年〇紀元二二五四年。鍛冶橋內〇市內麴町區。に而一寺創建之砌、山寺院之三號共、全小田原〇相模國。表之通、被引移候。

〔附　記〕　文政寺社書上云フ、

附記

玉泉院

玉泉院〇壽松院寮舍

關東首府トシテノ江戸

種德寺

起立之儀は、文祿三年〇紀元二五四年本坊創立之砌起立之由申傳候。

種德寺〇市内赤坂區　文政寺社書上ニ、

本光山種德寺

赤坂

起立之儀、古來小田原城中〇相模國。ニ有之、鎮城山村光寺と號是也。三代目聖傳和尚、天正十八年〇紀元二五〇年小田原陣後、權現樣〇德川家康。御入國之節、御上意ニ而御供ニ被召連、小田原〇相模國。か御當地〇江戸。え引移、文祿三甲午年〇紀元二五四年麹町十丁目〇市内。に於て寺地拜領仕候。聖傳儀、折々被召出、法儀をも御聞被遊候。然處小田原陣後之儀候得ば、檀那の無之、相續難成御座候處、小笠原播磨守康廣室、北條氏康公之息女に御座候處、依御同樣被致歸依、中興開基と相成、鎮城山本光寺を靈鳳山種德寺に改號有之、寛永二乙丑年〇紀元二八五年。六月五日逝去に而、則法名種德寺殿惠光宕智大姉と申候。

然ルニ同寺〇種德寺。大鐘銘ニハ、「鎮城山本光禪寺者、爲小田原〇相模國。北條氏綱令弟平内左衞門尉自號幻庵、法稱本光寺殿龍淵鐵公卿創之。天文十年辛丑〇紀元二二〇一年。所落成也。請金湯第二世東光智燈禪師大室和尚爲開山祖也。爾後天正十九年辛卯〇紀元二五一年。移攸於此地内。〇市改號靈鳳山種德禪寺。」ト有リ。武江年表ノ類亦「小田原〇相模國。の靈鳳山種德寺、今年〇天正十九年(紀元二二五一年)。麹町〇市内麹町區。へ移り、後赤坂一ツ木〇市内赤坂區。へ移る。」トス。

廣岳院

廣岳院〇市内芝區。　文政寺社書上ニ、

醫王山廣岳院

芝二本榎

當寺〇廣岳院。儀ハ、開山全梁和尚、東照宮樣〇德川家康。御知己ニ付、御入國之頃、御尋に依而出府仕、文祿三午年〇紀元二五四年。御鷹野御供仕候節、只今之西久保〇市内芝區。に藥師堂一宇有之候を、御供先に而拜領仕、寺地被下置、寺建立仕、醫王山宗英寺と號し候處、其後開基佐久間五郎左衞門殿法名を以、廣岳院と改號仕候。

附記二本榎廣岳院門前

其地今ノ市内芝區西久保葺手町ナルコト、御墓地篇之ヲ記ス。

〔附　記〕　二本榎廣岳院門前。〇二本榎廣岳院門前　起立之儀、往古文祿三甲午年〇紀元二五四年。西久保〇市内芝區。ニ有之候處、承應二癸巳年〇紀元二三年。當所〇市内芝區。ニ替地被仰付。尤其以前か門前家作御免ニ付、町家共引移申候由。

町家起立ノ年代明カナラザレドモ、姑ク玆ニ附錄ス。

覺永寺（○市内赤坂區。）　文政寺社書上ニ、

清涼山覺永寺　赤坂寺町

起立之儀者、文祿三甲午年（○紀元二五四年。）より四十一年、赤坂一木村（○市内赤坂區。）に罷在候之處、其節此地を御堀御用に付被召上、寛永十二乙亥年（○紀元二九五年。）只今之地所拜領被仰付候。

蓮光寺（○市内淺草區。）　文政寺社書上ニ、

大黑山蓮光寺　淺草新寺町

當寺（○蓮光寺。）は文祿三午年（○紀元二五四年。）源交院日寶上人之開基に御座候。舊跡は、兩國矢ノ倉（○市内日本橋區。）に御座候。

長遠寺（○市内淺草區。）　文政寺社書上ニ、

安立山長遠寺　淺草新寺町

起立之儀は、文祿三甲午（○紀元二五四年。）に御座候。元京都要法寺末に而、妙榮寺と唱候。

威光院（○市内淺草區。）　文政寺社書上ニ、

鶴亭山威光院　淺草新堀端

當寺（○威光院。）起立之年代不詳候。

ト有リテ、起立年代詳ナラザル如キモ、東京府誌ハ、記シテ「文祿三年甲午（○紀元二五四年。）僧辨德開基、元和八年壬戌（○紀元二八二年。）八町堀（○市内京橋區。）ヨリ此（○市内淺草區。）ニ移ル」ト爲ス。

此外文政寺社書上、獅子吼山專稱院善法寺書上、「御入國翌年（○天正十九年（紀元二二五一年））平川口（○市内。）に移り、又三年を過、大船町（○市内。）に移り」ト見ユ。亦是年（○文祿三年（紀元二二五四年））ノ轉移ナラム歟。

別本當代記、法華宗承教寺（○市内芝區。）ノ西丸所在地ヨリ芝邊（○市内。）ニ移ルヲ此年（○文祿三年（紀元二二五四年））ナリトシ、寺邊ノ百姓ハ麻布百姓町（○市内。）ニ移ルト記スコト、上文ノ如シ。

善法寺

承教寺

附記　貳本榎承教寺門前

江戸西の丸ハ、文祿三年午（○紀元二五四年。）に始御普請、御城地に始は法華宗承教寺居る。其廻りに百姓ども居る。承教寺芝（○市内。）邊へひけ、百姓ども、今の麻布百姓町（○市内。）へひけ申候。

——別本當代記

〔附　記〕　貳本榎承教寺門前

東首府トシテノ江戸

起立ノ年代明カナラザレドモ、姑ク左ニ文政町方書上武本榎承教寺門前書上ヲ抄ス。

一當門前（○武本榎承教寺門前。）者、承教寺元ト西久保（○市内芝区武本榎。）に罷在候處、承應二巳年（○紀元二二一三年。）御用地に而被召上、當時之場所（○市内芝区西久保。）より之門前町屋ヲ引候由候。然處承教寺拜領地之内、表通東側壹ケ所、横町北側に而壹ケ所、此坪數六百坪、町家作願濟に而建築申候。尤元地（○市内芝区西久保。）より之門前町屋ヲ引候由申傳候。

若夫徳川氏時代ニ町奉行支配地内ナリシ郡部ノ寺院中、是年（○文禄三年（紀元二二五四年。））ノ創建ト稱スル者ニハ、豐多摩郡大久保町（○武藏國。）ニ長光寺有リ、内藤新宿町（○武藏國豐多摩郡。）ニ、正受院・成覺寺・源慶寺有リ。

長光寺　大久保百人町

玉寶山長光寺

開闢年代相知不申候。但鐘銘ニ文禄三年（○紀元二二五四年。）之由、相見申候。

成覺寺　四ツ谷内藤宿

明了山願光寺正受院

當寺（○正受院。）起立之義者、文禄三申（○午歟。）年（○紀元二二五四年。）之内ニ御座候。

源慶寺　四谷内藤宿

十劫山無量壽院成覺寺

當寺（○成覺寺。）起立之義者、文禄三午年（○紀元二二五四年。）開山淨蓮社山及譽上人瑞翁悳和尚、在住三十年。

松榮山鶴峯院源慶寺

松榮山鶴峯院源慶寺起立之儀者、文禄三午年（○紀元二二五四年。）ニ御座候。

〔附記〕　利根川流路ノ轉移

文禄三年（○紀元二二五四年。）忍（○武藏國。）城主松平忠吉（○下野守。）其臣小笠原三郎右衞門ヲシテ、利根川ノ水ヲ疏導シテ太井川即チ渡良瀨川ニ通セシム。

自武藏埼玉郡上川又（○武藏國。今稱會之川。）以上、（○利根川ヲ指ス。）雖沿革未考、以其地形漸高爽、其水勢漸駛快推之、必無大沿革也。上川又藏（○武藏國。）以下故道、自是地（上川又。）南指、經不動岡（○武藏國。）過川口（今稱會之川。）存一細流。自是割總武兩葛飾郡間（○武藏國南葛飾郡。）至猿又（今稱古利根川。）西折、自龜有（○武藏國南葛飾郡。）經小菅（○武藏國南葛飾郡。）今稱古隅田川。隅田（○武藏國南葛飾郡。）等地、入江戸海。是往古之河道也。文禄中（○紀元二二五二年——二二五五年。）塞上川又（○武藏國。）疏新川（今之利根川。）自下外野（○武藏國。）經島川（○武藏國。）入今古利根川、更塞隅田川、拓中川達海。於是河道一變。後又塞新川、入今之古利根川、自島川（○武藏國。）至金杉（○武藏國。）合大井川。於是河道二變。

——下總舊事考

利根川古道

上流。上野國南勢多郡西群馬郡界吾妻川ニ會スル以上ハ、概ヲ山丘ノ間ヲ奔流シ、左右峭崖アルヲ以テ、變遷少シト雖其下流ハ古ヘ廣瀨川其本流ニシテ、東南流、直ニ武藏國榛澤郡ニ至リ、烏川ニ會ス。後水路變遷シテ、今ノ本流ヲ爲スト云。又上武ノ界ハ、寶永二年乙酉（○紀元二三六五年。）ノ頃、上野ノ人、利根川ノ氾濫ヲ憂ヒ、水勢ヲ殺ガムト欲シ、横渠ヲ那波郡（○上野國。）ニ鑿チ、烏川ニ合ス。是ニ於テ武藏賀美郡八町河原村其衝ニ當リ、屢患害ヲ被ル。乃チ之ヲ官ニ訴フ。官爲メニ命ジ、利根川ノ水七分ヲ本流ニ通ジ、三分ヲ横渠ニ疏セシム。故ニ七分川三分川ノ俗稱アリ。然ルニ天明三年癸卯（○紀元二四四三年。）七月淺間山（○信濃國。）噴火シ、焦砂本流ヲ埋メ、其水悉ク横渠ニ注ギ、以テ今ノ狀ヲ爲シ、遂ニ烏川水路ヲ本流ト爲スヲ以テ、又烏利根ノ稱アリ。

下流。往古ノ水路ハ、今ノ武藏北埼玉郡上川俣ヨリ東南ニ注下シ、上（○以下武藏國）新郷村下新郷村（今新郷村大字。）砂山村・上川崎村（今須影村大字。）志多見村（今志多見村大字。）馬内村・禮羽（ライハ）村（今禮羽村大字。）南篠崎村（今大桑村大字。）ヲ經テ、川口村（同上。）ニ至リ、（今會川アリ。上新郷村ニ發シ、禮羽諸村ヲ過ギ、南篠崎村ニ至リ、葛西用水ニ入ル。蓋古道ナリ。後淺淤シ、諸村ヨリ湧出スル泉流ヲ合セ、今ノ流域ヲ爲ス。）北葛飾郡八甫（ハツホ）村（今八輪野崎村大字。）ノ邊ニ於テ、頗ル浩瀚ヲ爲ス。

（○武藏國）北埼玉郡向古河村（今川邊村大字。）人某所藏北條氏照（陸奥守。）文書云、（文首ハ缺損ス。）

小手指宿ヘ、（小手指村今下總西葛飾郡五霞村ニ屬ス。）著候。於此儀者、明鏡ニ聞屆候（此條詳ナラズ。）

一、八甫迄上船者、商船及卅艘之由申、其直ニ彼船モ上候條、別ニ咎無之條、早々可被戻候。

一、八甫之儀者、當知行ニ候。然者無體ニ他之船可通子細ニ無之候。今迄此穿鑿爲如何不被申候。向後者一段可申付候。誰歟船通共、改而可承候。

恐々謹言。

六月三日　氏照（○北條花押）

布施美作守殿

右八王子城（○武藏國。）主北條氏照文書ニシテ、蓋永祿（○紀元二二一八年——二二二九年。）天正（○紀元二二三三年——二二二五一年。）ノ頃ニ在リ。此地氏照（○北條。）管下ニ屬セシナルベシ。八甫村（○武藏國。）ハ、幸手澤（○武藏國。）ノ西北ニ在リ。此書ニ由リ之ヲ觀レバ、當時此地商船ノ多ク上下シ、利根川ノ巨流タリシヲ知ルベシ。

又天正元年癸酉（○紀元二二三三年。）北條氏政大擧シテ、簗田持助ヲ關宿城（○下總國。）

ニ攻ムト欲シ、弟氏照（北條。）ヲシテ栗橋ニ據リ、舟橋ヲ架シテ、武藏・下總ノ兵ヲ督シ、利根川ヲ渡リ之ニ逼ラシムト。（宇都宮氏茂文書、楓軒文書纂、常陸志料等。）

按ニ栗橋ハ、卽今下總西葛飾元栗橋村（五霞村大字。）ニシテ、關宿（下總國。）ニ接近ス。其舟橋ヲ利根川ニ架スルト謂フ者、亦蓋ハ甫（武藏國。）ノ近傍ニ在リシナリ。

是ヨリ南流シ、幸手驛（武藏國。今幸手町。）上高野村（今高野村大字。）・下高野村・杉戸驛（今杉戸町。）ノ西ヲ過ギ、同郡二合半領（吉川村以南、小向村ニ至ル數十村ヲ云。）ト南埼玉郡八條領（八條村南、北諸村。）ノ間ヲ過ギ、南葛飾郡猿俣村（武藏國。今水元村大字。）ニ至リ、（今古利根川ト云。）曲折西南ニ轉ジ、龜有村（武藏國南葛飾郡。今龜有村大字。）ヨリ西流シ、小菅村（武藏國南葛飾郡。今綾瀨村大字。）ニ至リ、南ニ折レ、（今古隅田川ト云。）隅田村（武藏國南葛飾郡。今隅田村大字。）ニ至リ、入間川ニ合シテ隅田川ト爲ル。是古ノ本流ナリ。

吾妻鏡治承五年辛丑（八〇八。紀元一四一年。）閏二月廿三日條云、下河邊庄司行平・同弟四郎政義、因ニ古我（下總國。）・高野（武藏國。）等渡ニ云々

按ニ、高野渡ハ卽高野村（武藏國。）ナリ。古我ハ卽古河ニシテ、渡良瀨川ヲ固ヘ、高野ハ利根川ヲ守リシナリ。

義經記云、隅田川ハ、利根ノ庄藤原（上野國。）ヨリ落チ、水上遠シ云々。

按ニ、或今ノ狀ニ泥シ、義經記ヲ以テ誤ト爲ス者アリ。然ラズ。利根川古ヘ隅田川ニ會スレバ、是以テ當時ノ狀ヲ觀ルニ足ル。

僧堯惠北國紀行（文明十九年（〇紀元二四七年。））云、利根・入間ノ二川オチアヘル處ニ、カノ古キ渡アリ云々。

按ニ、入間川ハ、秩父郡（武藏國。）ニ發シ、入間郡（武藏國。）ヲ經テ入間川ト稱シ、下流隅田川ト爲ル。正保國圖、千住大橋（武藏國北豐島郡。）ノ上流ヲ入間川ト記ス。其荒川ト稱スル者ハ、荒川水路變遷シテ、舊川ニ會スルヲ以テナリ。

利根川第一變（附、大井川）

文祿三年甲午（〇紀元二五四年。）松平忠吉（下野守。）忍城（武藏國。）ヲ領スル時、其臣小笠原某（右衞門。）ニ命ジ、堤ヲ川俣村（武藏國。）ニ築キ、利根川水路ヲ斷チ、川俣村（武藏國。）ヨリ東ニ導キ、北埼玉郡佐波村（武藏國。今原道村大字。）ニ至リ、（卽今世利川水路。）更ニ東南ニ疏鑿シ、琴寄村（武藏國。今東村大字。）ト北葛飾郡高柳村（武藏國。今靜村大字。）ノ間ヨリ、川口村ニ至リ、舊流ニ會シ、又八甫村ヨリ總新田ニ至リ、南流武藏下總ノ界ヲ爲シ、（今庄內古川ト云。）中葛飾郡金杉村（武藏國。今豐田村大字。）等ヲ過ギ、（今島川ト云。）上宇和田（同上。）狐塚村（今豐田村大字。）等ヲ過ギ、（今島川ト云。）上宇和田（武藏國。今金杉村大字。）ト北葛飾郡上內川村（武藏國。今旭村大字。）ノ間ニ至リ、太井川（下總國。）ニ入リ、松戸國府臺等ノ西ヲ經テ、海ニ注グ。之ヲ新利根川ト稱ス。是ニ於テ本流始テ今ノ江戸

川ニ合シ、西川俣（武藏國。）ヨリ東川口（武藏國。）ニ至ル本流ハ、漸ク淺淤シテ、遂ニ古道ヲ失フニ至ル。

太井川ハ、卽今ノ江戸川水路ニシテ、蓋渡良瀨川ノ下流ナリ。渡良瀨川ハ、源ヲ下野ニ發シ、南流下總西葛飾郡古河町ノ西北ニ至リ、思川ニ會シ、東南流同郡川妻村・小手指村・元栗橋村・江川村（今五霞村大字。）ヲ劃シ、關宿ニ至リ、南流今ノ中葛飾郡（武藏國。）・東葛飾郡（武藏國。）ヲ界シ、金杉村（下總國。）ニ至リ、諸水ヲ集メテ漸ク巨流ト爲リ、太井川ト稱ス。

類聚三代格卷十六、太政官符、應造浮橋布施屋幷置渡船事云々。下總國太日河四艘（元二艘。加二艘。）云々。右河等崖岸廣遠、不得造橋、仍增件船。

吾妻鏡治承四年庚子（紀元一八四〇年。）九月廿九日條云、江戸太郎重長、依令與景親（大庭三郎。）于今不參之間云々。被遣中四郎惟長于葛西三郎清重之許、可見太井要害之由僞而、令誘引重長、可討進之旨、所被仰也云々。

同年（治永四年（紀元一八四〇年））十月二日條云、武衞（源頼朝。）相乘于常胤（千葉介。）廣常（上總介。）等之舟檝、濟太井、隅田兩河云々。

仙覺萬葉集注釋云、葛飾郡中有大河、云布止井。其川東云葛東郡、西云葛西郡云々。

按ニ、文祿三年（紀元二五五四年。）忠吉朝臣（松平。）ノ本流ヲ東ニ導カレシハ、新ニ之ヲ鑿タレシ若シ。然レドモ川俣ノ名ハ多ク三叉ノ處ヲ謂フ。北埼玉郡（武藏國。）川俣村ノ對岸・上野國邑樂郡、又川俣宿アリ。是ニ由リ之ヲ觀レバ、或古ヘ小支流アリ、此地三叉ヲ爲シ、忠吉朝臣（松平。）其支流ニ因リ之ヲ增鑿セラレシナラム歟。未ダ其證ヲ得ザレバ、姑ク疑ヲ闕ク。（武藏通志同。）

利根川流域沿革考（史學雜誌所收。）

其說ク所悉ク當ルヤ否ヤヲ知ラサレドモ、文祿（紀元二五五年。）ノ工事ニ利根川ノ水ヲ太井川ニ導キタルハ事實ナラム歟。尙新編武藏風土記稿葛西志等ヲ參考シテ可也。利根川流路ノ轉移ハ、隅田川水勢ノ長消ニ關シ、隅田川水勢ノ長消ハ、江戸水陸ノ一進一退ニ關ス。之ガ爲メ江戸沮洳地ノ乾キタル者少ナキニ非ザル可ク、水災ノ如キモ亦爲ニ多少ノ輕減ヲ見ルニ至リタルナラム歟。若夫落穗集追加ニ、老人物語仕候は、手前など子供の節ハ、淺草川のはば只今の通りには無之、干汐の節は殊の外に川はゞせまく流るゝ故、川向ふの兒共と、此方の子供と、川ばたに立ち向ひ、石つぶてを打合申たる事之候」ト

見ユルハ、此時利根川ノ水ヲ太井川ニ導キタル爲メ水量ヲ減ジタル爲ナルナカラムヤ。後荒川ノ全水ヲ入間川ニ合スルト同時ニ、下流ノ埋立成リテ水流ヲ緩漫ニシ、爲ニ再ビ川幅ノ擴大ヲ致シタル者ニナル可シ。全水ヲ入間川ニ合セザル前ノ荒川本流ハ、古綾瀨川筋乃至元荒川筋ニシテ、古利根川ニ入リ埼玉郡大瀨村（武藏國。）ト南葛飾郡猿又村（武藏國。）トノ間ヲ東シ、金町村（武藏國。南葛飾郡。）ノ北ニ至リテ、太井川ニ會シタリト云ヘバ也。（新編武藏風土記稿參照。）

金座濫觴

四年乙未（文祿二。紀元二五五年。）是ヨリ先京師ノ彫工後藤德乘（光次。）金貨鑄造ノ命ヲ受ケ、後藤庄三郎（光次。）ヲシテ代テ江戸ニ至リ、之ガ鑄造ニ當ラシム。是ニ至テ成ル。之ヲ江戸金座ノ濫觴トス。（金銀圖錄。御用達町人由緒。後藤系圖。後藤常市所藏文書。後藤龜市所藏文書。財政篇參照。）

金座濫觴事蹟

金座濫觴　相傳フ、

武藏小判金（圖略。）

右墨書武藏判ハ、文祿中（紀元二五二年―二五五年。）初テ造ル所ナリ。判ノ上下扇面ノ内ニ、桐ノ極印打ノ之、壹兩武藏光次ノ六字ト花押ヲ墨書ス。今ノ大判ノ墨書ノ如シ。重サ四匁八分弱。面槌目。愚按ニ、紳書ニ、後藤云、文祿四年（紀元二五五年。）江戸駿河兩所ニテ小判ヲ定メラレ、金ノ位小判一兩ノ目、旨ヲ得テ定ム。（後藤家譜ニハ、文祿五年（紀元二五六年）トアリ。按ニ慶長古小判ハ、本金五拾ノ位ニシテ、一兩金日四匁七分六厘ナリ。文祿金モ、此ノ品位ナルベシ。）此小判ニ墨ニテ光次ト書キ、是ヲ武藏判ト名ケタリ。慶長五年（紀元二六〇年。）ソノ墨書ヲ極印ニ改メラルル云々。又按ニ、石川正西ガ聞見集ニ、大閤（豐臣秀吉。）ノ時マデハ、スナ金・碁石金・ハツシ金・國々ヨリ京ヘ持上リ、銀子ニ替ヘケルニ、兩替師トモ黑キ石ニ金ヲスリ付ケ、色ヲ見テ、南鐐カヘト、直段不同ニ云タリ、其頃モ江戸ニテハ兩人金見ヲ命ゼラレ、今ノ一兩判ノ形ニシテ墨判ナリ、是ハ江戸近キ國々ハ用ユレドモ、今ノ如ク直段定リタルコトハ無シ。御一統ノ後、墨判ヲ止メラレ、光次（後藤。）ニ命ゼラレ、京田舍金子ノ直段モ定リタリト云々。此等ヲ參考シテ當時小判ノ制ヲ見ベク、又京田舍目ノ辨ヲ明ラムベキナリ。京目小判ノ圖下ニ出ス。又按ニ舜舊記ニ、慶長三年（紀元二五八年。）六月吉田奉加黃金七兩渡也トアレバ、此頃ハ小判ヲモ黃金幾兩ト云ヒシニヤ。

——金銀圖錄

文祿四年乙未（紀元二五五年。）

武藏小判成。（光次と墨書す。武藏と駿河兩所にて造らせらる。）

——武江年表

關東首府トシテノ江戸

四年（文祿二年、紀元二五五年。）駿河墨判小判金及ビ武藏墨判小判金ヲ鑄造ス。○額分判金ヲ造ル。

是歲（文祿四年、紀元二五五年。）駿河江戸兩所ニ於テ、小判ヲ作ル。之レヲ駿河墨判・武藏墨判トイフ。（金吹方手續書。）○金銀圖錄。（金吹方手續書。）○額判金ヲ造ル。

謹按、小判始メハ墨ニテ花押等ヲ書シ、慶長六年（紀元二六一年。）ヨリ墨判ヲ廢シ、刻印ト爲シタリ。

——大日本貨幣史

御用達町人由緒收金座後藤庄三郎由緒書「亦文祿四未年（紀元二五五年。）迄小判出來不仕、以前板金或は砂金を其代物に應じ、相對を以通用仕候。（中略。）然る處、金銀は御政務之第一之事に被爲思召旨、宜敷相計候樣にと、御直に金銀改役被爲仰付、初て小判出來仕候」ト見ユレバ、謂フ所ノ武藏小判ハ、文祿四年（紀元二五五年。）ノ發行ニ係ル如シ。而モ之ガ著手ハ文祿二年（紀元二五三年。）ニシテ、後藤德乘（光次。）命ヲ豐臣秀吉ニ受ケ、弟七兵衞（後藤。）ヲシテ代テ江戸ニ下ラシメシモ、七兵衞（後藤。）年少ニシテ江戸ニ居ルヲ嫌ヒ、京都ニ歸リタルヨリ、止ムヲ得ズ手代橋本庄三郎ニ後藤姓ヲ與ヘ、江戸ニ下ラシメ、以テ鑄造ノ事ニ任ズトハ、彫刻後藤家ノ所傳也。後藤龜市所藏文書之ニ同ジキコト、下文抄スル所ノ如シ。備陽武義雜談、

東照宮（德川家康。）關東を領せさせたもふ頃、京都後藤德乘（光次。）と云彫工の弟を召す、遠國を嫌ひ行ものなかりし所、後藤庄三郎（光次。）我れ行んとて關東に至り、寵にあずかる。もし天下をしろしめさば、願ひ壹ッ叶ひ給ひと申、易きことなりと上意なり。更ば黃金を四ッに切て、天下を通用せばやと望たり。果して天下東照宮（德川家康。）に歸しけれは、庄三郎（後藤光次。）が望みのごとく命ぜられたり。今の壹分と云は是よりはじまれり。

ト傳フル者、亦同ジキヲ見ル。竟ニ金座後藤家由緒書及後藤系圖言フ所ニ同ジカラザル也。今姑ク後藤龜市所藏文書ニ從フ。而シテ之ガ鑄造所乃至金銀改所ノ位置ハ、市內某ノ地ニ在リタルヤ明カナラズ。或ハ後藤系圖光次（後藤少輔三郎。）譜ニ、文祿四年（紀元二五五年。）於武州江戸、賜居宅地。ト云ヒ、御用達町人由緒金座後藤庄三郎由緒ニ「江戸居屋鋪も度々被爲成（德川家康。）候、此居屋敷も、御直（德川家康ヲ指ス。）之御見立にて、錢龜橋（市內麴町區。）ヵ被爲遊上覽候て、拜領仕候事」ト見ユル後藤屋敷內若クハ其近傍ニ在リタルニ非ザル歟。謂フ所ノ錢龜橋（市內麴町區。）ヨリ上覽遊バサセラレテ拜領シタリト有ル後藤屋敷ハ、往古江戸繪圖今ノ常盤橋外日本銀行所在地（市內日本橋區。）ニ後藤ト記ス者是ニシテ、古記錄皆記シテ本町（市內日本橋區。）ノ後藤

ト云ヒ、もと兩がへ町（市内日本橋區。）ヲ南ニシ、ふきや町（市内日本橋區金吹町。）ヲ北ニス。（往古江戸繪圖。）鑄造所乃至金銀改所ノ位置亦概推ス可シ。之ヲ江戸金座ノ濫觴ト爲ス。大日本貨幣史言フ所ハ、左ノ如シ。

舊貨幣ノコトヲ纂述センガタメ、德川實紀・寶貨叢記・吾職秘鑑等ノ書ヲ參看互考スルニ、德川氏初メ八州ノ封地ヲ得シ時、金見役トイフヲ設ケ、一兩判ノゴトキ墨判ヲ造テ、通行セシメタリシニ、其時京ノ彫工（彫工ハ實紀ノ文ニ從フ。）後藤ノ族ニ庄三郎光次（後藤。）トイフモノアリテ、德川氏ノ召ニ應ジ、關東ニ到シガ、庄三郎（後藤光次。）頗ル才幹學術アルモノナレバ、金銀ノ鑑定ヲ業トスルノミナラズ、本多正純・林信勝等ト共ニ政務ニモ預カリタリ。庄三郎（後藤光次。）曾テ議シケルハ、小判金ヲ四分ニシテ一分判ヲ鑄造セバ、輕便ニシテ世ニ益アルベシト。因テ一分判ヲ造リタリ。而シテ慶長金ハ、江戸・京・駿河・佐渡・甲斐ニ於テ極印ヲ有スル人ヲシテ鑄造セシメ、庄三郎（後藤光次。）ノ許ニ贈リ、鑑定ヲ受ケ、通用セシニテ、蓋シ此トキニハ未ダ別ニ一定シタル金座トイフモノハ之レ無シ。其後元祿八年（紀元二三五五年。）貨幣ノ改鑄ニ當リ、始メテ本郷（市内。）靈雲寺側ニ改鑄局ノ設ケラレシトキ、世人之レヲ金座トイフ。是レ金座トイフ名ノ始メナリ。其後元祿十一年（紀元二三五八年。）正月、本町壹丁目ニ此金座ヲ移セリ。右庄三郎（後藤光次。）ハ、同人家記ニ據レバ、其先ハ美濃ノ人ニテ、長井某ト稱シタリトヅ。

後藤庄三郎（光次。）ハ、御用達町人由緒及後藤系圖ニ、

金座後藤庄三郎由緒書

本姓長井氏也　後藤庄三郎光次

權現樣（德川家康。）以來後藤と改相名乘申候。本姓長井氏に而左之通りに御座候。

大膳大夫大江廣元弟長井武藏守親廣より十二代孫

初代　長井藤左衞門尉利治

迄代々濃州加納城に居住仕、領地八萬石にて、屬二土岐家一罷在候所、家來依二反逆一、敗亡仕、氏族等、爲二家臣一齋藤道三利政一、沒落仕候。

二代目　長井彥右衞門尉利氏

右父藤右衞門尉利治沒落之砌、戰死仕候。

三代目　長井彥四郎利德（後改二藤右衞門尉一。）

右父彥右衞門尉利氏嫡子に而、祖父父共に沒落以後、京都に浪人に而罷在候處、悴少輔三郎光次、於二聚洛（聚樂。）被二召出一候以後、權現樣（德川家康。）にも御目見仕、慶

長七年〇紀元二六三年。於京都〇山城國。病死仕候。

四代目　元祖　初長井少輔三郎ト云　後藤庄三郎光次

右父彦四郎利德忰にて御座候。京都〇山城國。に浪人に而罷在候所、先祖之由緒等達上聞、文祿二年〇紀元二六三年。於京都〇山城國。聚洛、〇山城國。權現樣〇德川家康。え初而御目見仕、御側御用被爲仰付、軍中諸事取計等仕、甚御意に入、相勤罷在候。以後蒙上意候而、後藤と相改め候事に御座候。當時後藤と相名乘候者共とは、家筋別段之義に御座候事。右初而御目見仕、關東御發向之砌、御供被爲仰付、殊に御仕置之義、御下知承之候に付、日々登城仕、御側近く、御用相勤候事。

一、文祿四未年〇紀元二五五年。迄、小判出來不仕以前は、板金或は砂金を、其代物に應じ、相對を以通用仕候。銀も山出銀之儘、灰吹銀と申、通用仕候。然る處、金銀は、御政務之第一之事に被爲思召旨、宜敷相計候樣にと、御直に金銀改役被爲仰付、初て小判出來仕候。銀も又同事に而御座候。依之銀座も支配仕り、萬事相計候事。

一、庄三郎〇後藤光次。義、日々登城仕、御老中樣方之御列座に而諸事取扱仕候故、官祿可奉願之段、奉蒙上意候所、辭し奉申上に付、馬飼料として、江州小比江村におゐて五十一石六斗之御朱印頂戴仕、今に所持仕候事。

一、慶長五年〇紀元二六〇年。濃州關ヶ原御合戰之後、御一統之節、最初被爲仰出候御制札、庄三郎〇後藤光次。え被爲仰付、京都〇山城國。え持參仕候事。

一、大阪〇摂津國。御陣御掛之義、庄三郎〇後藤光次。え被仰付、取扱申候。其節之書狀十三通、所持仕候處、先年酒井讃岐守殿一覽被成度由被仰候に付、遣申候所、讃岐守殿〇酒井。方にて燒失仕候故、先年御尋之節も、十三通之寫計差上申候。右十三通之寫、今所持仕候。且又御扱之義に付、城中え罷越、織田有樂子息武藏守、大野修理子息信濃守、右兩人取來り候故、甚だ奉預御感候事。

一、慶長廿卯年〇元和元年(紀元二七五年)。同月晦日御陣之節、淺野但馬守殿〇長晟。無比類働にて、御感狀被下候に付、松平右衞門佐殿〇正久。秋元但馬守殿〇泰朝。幷庄三郎〇後藤光次。承之、右三人連判狀、但馬守殿〇淺野長晟。へ被遣候事。

一、御前え庄三郎〇後藤光次。被爲召、大阪城〇摂津國。中、金銀改可申旨、安藤對馬守殿〇重信。庄三郎〇後藤光次。兩人え、被爲仰付、六月二日大阪〇摂津國。か金二萬八千六十枚一本附、銀二萬四千枚、庄三郎〇後藤光次。京都〇山城國。へ持參仕候事。

一、長崎〇肥前國。表唐人商船出入之事、幷長崎〇肥前國。御用、於江戸諸事相計、異國え之關東首府トシテノ江戸

書翰等、庄三郎（光次。後藤）え被爲仰付、取遣仕候事。

一、權現樣（家康。徳川）え從台德院樣（秀忠。徳川）御肴御上げ被爲遊候節、權現樣（家康。徳川）少し御機嫌惡敷義御座候所、庄三郎（光次。後藤）御挨拶申上、御機嫌御直り被爲遊候に付從台德院樣（秀忠。徳川）爲御褒美、家（原。藤）小倉山色紙御掛物御手自奉拜領、今に所持仕罷在候事。

一、台德院樣（秀忠。徳川）弘法草之手跡御尋被爲遊候節、御近習衆庄三郎（光次。後藤）方に可有御座と申上候に付、則庄三郎（光次。後藤）を被爲召、右手跡之義御尋被爲遊候に付、所持仕候段申上候所、御前に弘法眞之手跡は有之候得共、草之手跡無之に付、差上候樣に被爲仰付、則指上申候所、甚奉預御感候。右之代に、其方手前に無之者可被爲下との奉蒙上意、古筆之手鑑拜領仕候事。

一、庄三郎（光次。後藤）妻義、當時御進物番青山善十郎娘に御座候。權現樣（家康。徳川）奉蒙上意候て、妻に仕候。然る上大橋局と申す方を妾に可仕旨にて被下置候而、男子出生仕、成長之後、二代目庄三郎廣世（藤。後）と申候。慶長廿一年（元和六年）（紀元二二七）古酒井雅樂頭忠世殿方にて元服仕、世と申す一字被下候て、廣世と申候事。

一、庄三郎（光次。後藤）家來、名代役高野宗左衞門・河邊仁左衞門兩人之者は、度々御目見も仕候者共に御座候。其子孫も今に相勤罷在候。駿府（駿河國。）にて御用被爲仰付候節は、御用に掛り申候者共え、爲御扶持方、百二十人扶持被下置候事。

一、權現樣（家康。徳川）御側近ク相勤候に付、駿府（駿河國。）にて庄三郎（光次。後藤）拜領屋敷江、度々被爲成候。御成御門も有之候所、地震に而破損仕候故、唯今たゝみ置所持仕候。御成之節之石之手水鉢も、于今駿府屋鋪に所持仕候。唯今江戸居屋鋪えも度々被爲成候。此居屋敷も、御直之御見立にて、錢龜橋（市内麹町區。）ゟ被爲遊上覽候て、拜領仕候事。

光次（後藤。）

少輔三郎、後改少輔右衞門尉。元龜二年（紀元二三一年。）生于洛陽。文祿二（紀元二五三年。）春（初「天正十七年」ニ作リ、抹殺シテ「文祿二春」ニ改ム。）於京聚樂亭、謁家康公（徳川。）。文祿二年（紀元二五三年。）於江州野洲郡、賜食邑、金銀改職奉之、依家業稱後藤、時々御前、動御氣色。文祿四年（紀元二五五年。）於武藏江戸、賜居宅地。慶長五年（紀元二六〇年庚子）家康公（徳川。）發軍兵於濃州關ケ原、與石田治部少輔三成（石田。）大戰、終三成（石田。）敗績。此時光次（後藤。）居武藏江戸、

御用達町人由緒

公之大戰因、難居于武藏、發江戸到關ヶ原、○濃美國。時軍畢、家康公○川。德大勝、天下一統、被遣最初之制札於京都、○山城國。光次○藤。後承命特持制札赴京都○山城國。立制札。洛中諸人、看制札甚喜。慶長十九年○紀元二二七四年。廿年○慶長二二七五年。兩度大阪○攝津國。合戰時、昵近供奉。十九年○慶長二二七四年。紀元陣、大要害難攻、不可得利依然、家康公○川。德仰光次○藤。後廻策爲和睦之計策。和睦十二月廿日○慶長十九年(紀元二二七五年)。事成而家康公○川。德曰、願可取城中質子。於是光次○藤。後因鈞命赴城中、織田有樂侍從長益入道。織田信長弟也。息武藏守、大野修理大夫以吉秀頼臣。家臣。○豐息二歲童出之。光次○藤。後忿怒而曰、何以二三歲童爲質子哉、早可出嫡子信濃守○野。○大由申之。修理大夫○大野。氣屈而質子出事甚遲移刻、終不得已出信濃守○野。○大而光次○藤。後捕二質子、歸家康公○川。德軍營。公○家康。德川聞此旨、甚感美光次。○藤。後而後家康公○川。德命諸士、破櫓埋堀、暫翌年○元和元年(紀元二二七五年)。秀頼○豐臣。又據大阪城○攝津國。起兵。然埋暫如平地、故家康公○川。德大得勝利、大阪城○攝津國。陷。是皆家康公○川。德承命、光次○後藤。謀計用間織田有樂大野修理大夫十三通之有書。同年○元和元年(紀元二二七五年)。五月七日家康公○川。德與秀頼○豐臣。合戰時、公軍兵大敗北之時、不離公○家康。德川之臺旆、有勇志。其後公○家康。德川集諸士、辨先鋒後殿、議攻戰之進退、指諸士曰、汝等敗北時、逢誰某耶。此時一兩輩逢光次○藤。後耶否、正其進退。由是光次○藤。後勇志揭焉。然先鋒大戰得利、後拒者不能交戰、故不顯其勇志。同年○元和元年(紀元二二七五年)。十二月、家康公○川。德自駿河到江戸、有御放鷹、光次○藤。後供奉。家康公○川。德還御于駿府。光次○藤。後依小冗留于江戸。同月○元和元年(紀元二二七五年)十二月。廿四日自秀忠公○川。德手自定家卿○藤。原。小倉山庄色紙○伊爾也己乃也之邊乃遍左奈久良乃良美。伊勢大輔歌賜之。大阪○攝津國。合戰之時、謀計忠功之旨蒙仰、家康公○川。德爲供奉赴江戸、每度列家老末座、賜饗、天下重寶器物等、於數寄屋賜御茶。大阪○攝津國。陣以後、患眼疾退居。光次○藤。後仕家康公○川。德日夜侍御前不怠、恩顧不少。光次○藤。後常慕和漢風。民部卿法印道春○林信勝。聞書、刑部卿法印永喜○林。始屬光次○藤。後談漢和事、後達高聞。仕秀忠公○川。德常侍御前。又飛鳥井雅庸冷泉爲滿日野輝資入道唯心鳥丸光廣、駿府下向之節、學倭歌及源氏物語伊勢物語奥義秘說。光廣○鳥丸。光次○藤。後所詠之歌感美之詠歌、並詞書、光次○藤。後倭歌光廣詠歌載之。寛永二年○紀元二二八五年。七月廿三日死。年五十五。葬江戸誓願寺。法名淨譽法心。

——後藤系圖

然ルニ後藤龜市所藏文書○後藤常助所藏文書同。ハ、庄三郎○光次。實ハ遠州ノ人橋本氏ニシ

テ、實名光次ハ、實ニ後藤德乘光次ノ實名ヲ假用シタル者ト爲ス。言フ所頗ル金座後藤ノ所傳ニ異ル所有レバ、煩ヲ厭ハズ左ニ之ヲ揭出ス。

去々寅五月中、大判金四分一之分量を以、新規中判金吹立之儀、分量仕譯書幷、試本相添伺候處、今以御沙汰無御座候、且右に付權現樣○德川家康。蒙御定候段、其以來數度金吹御用相勤候次第等申上、奉歎願候覺○後藤常市所藏文書本書ノ寫包紙ニ「辰之年中根次郎左衞門殿江上證候二通之控、追而御案內次第上可レ申候」ト有リ。

一、私元祖後藤祐乘儀足利公方家昵近ニ而、京都住居仕候。且祐乘○後藤。儀、笄目貫等之彫刻ニ付、名譽之恩賞を請候に付、子孫江鑿法傳授仕、代々彫工ヲ兼申候。右祐乘○後藤。方五代目後藤德乘光次儀、織田信長時代、通用金銀之製作仕候。是日本通用金之最初ニ御座候。且大閤秀吉○豐臣。時代、大判金小判金吹立、殊ニ桐之紋極印免許ニ相成、其上自分光次之極印打候儀に相成申候。其外世上金銀之位定、幷金銀掛改分銅役被申付候。尤從ニ先祖領シ來候山城國之內に而知行高貳百五拾石之朱印被賜之候。其後權現樣○德川家康。江被召出、每度彫物御用等被仰付、且金位分量調合方等御尋に付申上候處、文祿二年○紀元二五三年。於關東始而大判小判御吹立被遊旨、被仰出候ニ付、弟七兵衞○後藤。儀、爲名代差下シ、吹立御用爲相勤候處、同人○後藤七兵衞。儀病身ニ罷成、御用相勤兼候ニ付、慶長元申年○紀元二五六年。家來橋本庄三郎ト申者、功者成者ニ御座候ニ付、猶子ニ仕、同姓之列ニ加ヱ、關東江差下シ、右桐之紋極印、光次之極印相渡、金銀御用爲相勤申候。尤德乘○後藤。儀者、於京都住宅、不相替彫物御用、吹立御用共、兼相勤申候。勿論如先代貳百五拾石之御朱印被下置候。右庄三郎○橋本。儀、關東え差下し候節之規定證文、今以所持仕候間、則右之寫左ニ申上候。○後藤常市所藏文書中、此起請ノ古寫本有リ、包紙ニ「後藤庄三郎、先祖德乘公ヱ指上候神文三通（○左記二通及元和ノ誤證文、京都同苗八郎兵衞ヨリ指下記ス。蓋本書明暦（○三年紀元二三一七年）火災ニ燒亡シタル時、京都ノ分家ニ在リタル寫文ヲ寫シテ之ヲ送ラシメタル者ナリト云フ。

起請文之事

一、私儀遠江國住人橋本庄三郎と申候而、貴公樣召仕之者ニ無紛候。然ル處今度從ニ大閤樣○豐臣秀吉。判金座小判座被爲仰付候ニ付、爲御名代與、武州江戶國司德川內府樣○家康。御分國江罷下候ニ付、御名字被下置、後藤家之御猶子ニ被成被下、後藤庄三郎と名ヲ相改候段偏ニ御高恩之次第難有奉存候。此上者、後藤家之御差圖、幷判金小判座御用筋、何れ共ニ貴公樣御下知ニ少も相背申間敷候。若一事ニ而も令ニ相違者、從是神文。○後藤常市所藏文書ニハ、所謂神文「天照皇大神宮・春日大明神・正八幡大菩薩・神罰冥罰可ニ罷

蒙候者也。仍而如件」ト記ス。

慶長元年○文祿五年(○紀元二二五六年)十一月改元。慶長元年ト云フハ引用ノ日ノ追記歟。三月七日　後藤　庄三郎書判　血判

後藤徳乗様

一札之事

一、今度從太閤様○豐臣秀吉。判金小判座之儀被爲仰付候ニ付、爲御名代與、私儀關東江罷下候様ニ被仰付候儀、難有仕合存奉候。此上は不依何事ニ、貴公様方被仰下候儀并御一門中方被仰下候儀、一々急度相守可申候。末々に至候迄も、少も、御指圖相背申間敷候事。

一、右依御名代たるに後藤家之御猶子ニ被成下、御名字御免被成下、難有奉存候。此御報恩ニ、毎年黄金三枚宛差上ケ可申候。尤子々孫々ニ至る迄も、永代右之黄金差上ケ可申候。爲後日一札證文仍而如件。

慶長元年○追記歟。○紀元二二五六年。三月二日　橋本　庄三郎印判　書判

後藤徳乗様

右之通規定相極、爲名代差下置候處、其後庄三郎○後藤。儀於關東、追々奢侈ニ罷成、殊ニ光次者自分名乗之趣ニ仕、自分判形ニも相用候趣、相聞候ニ付、兩極印可相返旨、及懸合候得共、爾々返答も不仕候間、其段御老中秋元但馬守殿○泰朝歟。之ヲ泰朝トスレバ、老中ニ非ズ、側用人ナル可シ。え徳乗○後藤。方度叱り候、定而同人○後藤光次。方相詫可申候、併承知之所ハ、可爲勝手次第との御事ニ御座候。右に付庄三郎○後藤。儀態々上京仕、同姓一列之者え向、様々相詫、極印二本者全ク預リ候ニ相違無之、子孫に至り、御用相勤候共、名代ニ紛無之趣之起請文七通迄差出、且爲冥加、年々金三枚ヅヽ、永久可差越旨ニ而相歎候ニ付、赦し遣申候。

右之通、徳乗○後藤。方申上候段、從但馬守殿○秋元泰朝歟。被達上聞候處、庄三郎○後藤。を屹度叱り候様、上意ニ付、右體御沙汰被成下候との御事、於京都内々承り及、實以難有御事、骨髄ニ徹シ、身命ニ餘り、二三日之間飲食をも絶候而、落涙而已ニ罷在候由申傳候。

一、慶長四亥年○紀元二二五九年。世上通用宜敷修法申上候様、蒙上意候ニ付、則小判金四分一之割を以一分判之儀申上候處、御聞濟被爲在、吹立被仰付候ニ付、京都

江戸兩所ニ而、御用相勤申候。尤自身江戸表（江茂）罷出、本白銀町（○市内日本橋區。）ニ而四百坪之地所拜領仕、御用相勤、其後代々交代仕、御用相勤申候。

一、十代目廉乗光侶代、江戸住居ニ相成候以後、元祿八午年（○紀元二三五五年。）八月爲ニ御隱密御用一廉乗光侶（○後藤。）通乗光壽（○後藤。）父子共、御勘定所ヘ被召候而、神尾備前守殿（○大目付神尾元清歟。）松浦市左衞門殿御列座ニ而、此度大判小判歩判共吹增之御趣意ニ付、分量調合方等、書面を以申上候様被ニ申渡一候。右御調ニ付、土屋相模守殿（○老中土屋正直。）加藤佐渡守殿（○若年寄加藤明英。）ヘ御直ニ申上候儀も有レ之、其後吹增被ニ仰付一、於ニ本郷役所一、大判凡三萬枚程吹立、小判歩判者於ニ京都一吹立申候。尤後藤庄三郎方ニ而も小判歩判吹立申候。

一、十一代目通乗光壽（○後藤。）代、寶永七寅年（○紀元二三七〇年。）正月御勘定所ヘ御呼出有レ之、吹立之儀ニ付、御尋御座候ニ付、前々之振合申上候。此度者、吹立御用者御斷申上候由ニ而、委敷書留無ニ御座一候。尤此度之御趣意者、性合分量等、古代之格ニ劣り候御修法ニ付、一向御斷申上候由申傳候。

一、右同人（○後藤通乗。）代、正德四午年（○紀元二三七四年。）二月御勘定所ヘ御呼出有レ之、水野因幡守殿（○久重。）伊勢伊勢守殿殿（○貞數。）大久保大隅守殿（○忠香。）御列座ニ而、同斷御尋御座候ニ付、前々之振合を以申上候。此節も吹立御用之儀者御斷申上候。

一、十二代目壽乗光理代、享保十巳年（○紀元二三八五年。）二月御勘定所に御呼出有レ之、駒木根肥後守殿（○政秀。）萩原源左衞門殿御列座ニ而、金位幷吹立分量等御尋有レ之、其後追々御取調之上、大判金慶長之古金之通吹直し被ニ仰付一、御用相勤申候。

一、右同人（○後藤壽乗。）代、享保十五戌年（○紀元二三九四年。）十月晦日於ニ御隱密一、御用新部屋ヘ御呼出ニ而、御側衆田沼主殿正殿（○意行（○田沼）時ニ小姓タリ。側衆ニ非ス。）御逢有レ之、私家筋之儀、幷庄三郎家筋之差別、御尋有レ之、殊ニ金位定之承傳、幷吹立調合分量等、御尋有レ之候ニ付書付を以御答申上候。

一、右同人（○後藤壽乗。）代、元文元辰年（○紀元二三九六年。）正月御勘定所ヘ御呼出有レ之、町御奉行大岡越前守殿（○忠相。）御勘定御奉行細田丹後守殿（○滿次。）同組頭青木次郎九郎殿御列座ニ而、御隱密之由ニ而、小判歩判吹立之修法御尋ニ付、巨細申上候。其後御吹替之儀被ニ仰付一、猶又六月九日（○元文元年（紀元二三九六年）。）御呼出有レ之、則右之御三人御列座ニ而、庄三郎方共申合、兩家ニ而吹立候様被ニ仰付一候處私方者彫物之御用向兎角繁多ニ付、吹立之儀者庄三郎（○後藤。）一手ニ被ニ成下一候様仕度段、御斷申上候處、越前守殿（○大岡忠相。）被ニ仰聞一候者、夫者餘り謙退過候申分ニ候、元來小判歩

判共、其方家ニ而吹立候儀ニ有之ニ付先規を被思召候而、被仰付候儀ニ有之、其上近來庄三郎（後藤。）方ニ而吹立候性合等も如何ニ付、雙方ニ而吹立候得バ、御爲に宜敷との御趣意ニ而、被仰付候儀ニ付、達而御請申上候樣、御利害ニ付、無據翌十日（元文元年（紀元二三九六年）六月。）御請申上候。左候者、兩家ニ而吹立候分混じ不申樣、極印替候樣、被仰渡候ニ付、私方者龜甲之内ニ文之字、庄三郎（後藤。）方者丸之内に文之字と相定申候。右ニ付京都ニ住居罷在候金吹役之者共、呼下候積ニ而、京都引拂罷越候樣申付遣候處、數代住居之儀ニ候迚、殊之外難澁申越候ニ付、又々種々御歎申上、吹立御用御斷申上候。右大岡越前守殿、夫者餘り謙退過候申分と被仰候譯者、其頃之庄三郎（後藤。）儀者、祖父廉乘（後藤。）幼年之頃、看坊仕候程乘之悴源一郎と申者ニ御座候處、廉乘光侶（後藤。）之兄ニ仕候而、故庄三郎（後藤。）急養子ニ差遣、大伯父之續ニも御座候間、常々之儀者不及申、於殿中茂、會釋向等格別ニ仕候儀を、兼々御存知有之、此度御用向之結構を大伯父に讓り候儀との御心得ニ而、右體被仰聞候儀と奉存候。

但、年々年頭御禮之節、庄三郎（後藤。）儀私方に罷越候上、召連登城仕、且獻上之御品、同人ニ持參爲仕、御席に差出候舊例ニ御座候處、右源一郎事庄三郎（後藤。）代ゟ、此例相止申候由。尤其外之儀者、矢張先祖ゟ規定を相守候由申傳候。

一、十四代目私父桂乘光守（後藤。）代、寛政四子年（紀元二四五二年。）中、金銀吹立之儀に付、御勘定御奉行久世丹後守殿（廣民。）ゟ封書を以御隱密御尋之儀有之候に付、則封書を以巨細御答申上候。猶又翌丑年（寛政五年（紀元二四五三年））正月八日御隱密爲御用、御勘定所ゟ御呼出有之、御勘定廣瀨吉之丞殿ゟ、此度金銀千枚分銅御吹立之御趣意之由に而、御尋之趣有之候。尤庄三郎（後藤。）方ゟ茂、同斷御尋御座候由、承り及申候。同（寛政五年（紀元二四五三年））正月。十一日二度目御呼出に而、柳生主膳正殿（久通。）・佐橋長門守殿（佳如。）御逢有之、金銀千枚分銅之儀、前々出來候者、何之頃に候哉、且私家に而出來候哉、庄三郎（後藤。）方に而も出來候事哉之段、御尋に付、右者五代目德乘（後藤。）儀、權現樣（德川家康。）蒙上意候而吹立候由、記錄に御座候得共、分銅數相知不申候、其後九代目程乘光昌（後藤。）代、万治元年（紀元二三一八年。）吹立被仰付、金分銅數二十銀分銅數二十程出來仕候、其外には出來仕候儀無御座、殊に庄三郎（後藤。）方ゟ被仰付候儀、決而無御座候、全體小判步判共、先祖德乘（後藤。）ゟ從權現樣（德川家康。）被爲仰付候、私家之職業に御座候處、庄三郎（後藤。）ゟ、代勤爲仕置候儀に御座候、何分にも古來之處御取調被成下候樣仕度段申上候處、追々取調可被

申旨被仰渡、同○寛政五年(紀元二四五三年)正月。十八日三度目御呼出有之、主膳正殿、○柳生。長門守殿○佐橋。御逢之上、古來取調候處、何樣其方家本に有之、其上分銅吹立者其方に而御用相勤候趣に有之候。併庄三郎○後藤。茂立合候由申事に候、如何哉との御尋に付、此儀庄三郎○後藤。方に而小判歩判等吹立候節、私方か立合之者差遣候儀者御座候得共、私方え庄三郎○後藤、を爲立合候例決而無御座候、是等も古來を得と御糺被成下候樣仕度旨申上候、同○寛政五年(紀元二四五三年)正月。廿八日四度目御呼出に而、金銀千枚分銅吹立御用松平越中守殿○定信。伺之上被仰付候由に而、長門守殿○佐橋佳如。被仰渡、則私一手に被仰付難有仕合奉存候。其後追々御取調有之、同○寛政五年(紀元二四五三年)。六月十日か相始、金分銅五つ、銀分銅一つ、八月十日○寛政五年(紀元二四五三年)。迄に仕立、同○寛政五年(紀元二四五三年)八月。廿四日蓮池○城内。御金藏え上納仕、十月廿五日○寛政五年(紀元二四五三年)。爲御褒美金三枚、時服三、項戴仕候。此節私家本之譯、并庄三郎○後藤。方之儀、委敷申上候に付、古來之儀共悉御取調被成下候趣御座候。右之通、從權現樣○德川家康。金位定通用大判小判歩判等之製作及調合分量等之定、且分銅定等、德乘光次○後藤。え被仰付、其後代々前書之通相勤來申候。且又小判歩判等吹替之節も、庄三郎○後藤。方え被仰付候共、其以前前文之通私方え御尋等御座候上、被仰付候儀有之、庄三郎○後藤。方かも及相談候事に御座候。

但、右庄三郎○後藤。儀、數代相續仕、御用相勤來候處、不正之儀有之、去る文化七午年○紀元二四七〇年。御咎被仰付、右一件御吟味中茂、始終共差添、其外取扱向、都而私え被仰付、御仕置之節者、私差控之儀相伺申候。且又右御咎以前迄は、先祖規定之通、私方えも仕向來候處、右庄三郎○後藤。跡當三右衞門○後藤。え被仰付候以後者、先祖か仕來候例格も相違仕、并大判金三枚宛相送候儀も無御座候。將又前文之通、庄三郎○後藤。方え新規吹立等被仰付候節者、其以前私方え茂御尋之儀等御座候處、當三右衞門代に至り、新規貳分判壹朱判等吹立、小判金吹替、猶又此度二朱判吹立等被仰付候得共、其儀無御座候。當時之體に而者、權現樣○德川家康。蒙御定候御趣意を取失候哉に奉存候。何共無勿體、於私恐入奉存候間、此段御勘定御奉行え御願申上度奉存候得共、支配違之儀に付、其儀も仕兼候。何卒古來之例に御復被成下候樣仕度奉存候。

右之趣に而、先祖德乘光次○後藤。儀、全く通用金之御取初を相定候根本に御座候、依之古來之儀共、御取調被成下候樣仕度、且又先達而奉伺置候中判金之儀者、金位性合等能出來仕候積り御座候間、篤と御取調被成下度奉存候。尤小判

金五兩に通用仕候儀に付、關東筋國々者、重に端金通用仕候儀故、左程通用も仕間敷候得共、上方筋者專ら大金通用仕候間、別而人氣に茂相叶、重寶可仕儀に奉存候。若又右之修法に而者、當者世に振れ候歟、又者御益筋等如何に被思召候儀も御座候者、何分にも修法替可仕候。金位之次第、調合之分量等、未だ庄三郎○後藤。方えも不申聞、權現樣○德川家康。御定を奉蒙候德乘○後藤。以來、家傳に仕置候儀も御座候間、何樣に茂製作出來可仕候。格別之御憐怨を以、右之段厚く御勘考被成下、何れ之筋に成共御用被下置候樣仕度候。左候者、誠に先祖以來之例格に舊復仕、乍恐私家に取身に取、冥加至極之本懷と奉存候。此段偏奉願候。以上。

辰十一月　　後藤四郎兵衞（○眞乘光美。天保五年死）

○謂フ所ノ誤證文ハ、後藤常市所藏文書中古寫本有リ。云フ、

奉誤申證文之事

一、此度私儀御名代之役義を相背き、萬任雅意に、毎年指上候黃金、并に私義毎年々始元三之御祝義に可罷登候所に、久敷上京御報恩之黃金も差上げ不申、諸事不屆不調法仕り候段、眞平御宥免被遊被下候樣に奉願候處、理兵衞樣（○德乘次男顯乘）御拶挨以御詫言を、萬事共に御宥免被成被下、難有奉存候。向後貴公樣御同苗末々に至迄、急度御下知を相守、毛頭相背き申間敷、爲後日誤證文、仍而如件。

元和元年（○紀元二二七五年○寫本の時の追記歟）四月十日　　後藤庄三郎（印。書判）

後藤德乘樣
後藤理兵衞樣

外ニ後藤常市所藏文書中、文祿（○紀元二二五二年——二二五五年）慶長（○紀元二二五六年——二二七四年）以來ノ古文書若干通有リ。財政篇ニ詳記スレバ、此ニハ之ヲ省ク。

舟町四日市及錢瓶橋

夏○文祿四年（紀元二二五五年）。舟町○市內麹町區。四日市○市內麹町區。間ノ橋側ニ於テ、錢瓶ヲ掘出ス。錢瓶橋ノ稱、是ヨリ起ルト云フ。○慶長見聞集。

舟町四日市及錢瓶橋事蹟

舟町四日市及錢瓶橋　慶長見聞集「町には舟町○市內麹町區。と四日市○市內麹町區。とのあひにちいさき橋只一ツ、是は往復の橋也。文祿四年○紀元二五五年。の夏の頃、此橋もとに錢かめを掘出す。○中略。此橋を錢かめ橋と名付たり」。ト見ユルコト、既ニ之ヲ記ス。錢瓶橋ハ、往古江戸繪圖道三堀○市內麹町區。ノ落口ニ架スル橋ヲ稱シ、外ニ堀ノ中央及龍口○市內麹町區。ニ各一橋ヲ圖ス。別本慶長江戸圖ニハ、堀ノ中央ヨリ稍下リタル處ニ一橋有ルノミ。是レ所謂錢瓶橋ノ初メノ者ナル可シ。然ラバ則チ錢瓶橋ノ名ヲ得ル、是時ニ在ルニ似タリ。而シテ橋ノ左右ニ當時舟町○市內麹町區。在リ、四日市○市內麹町區。在リタルコト、亦以テ推ス可シ。疑ラクハ日本橋區四日市町○市內。及大船

寺院ノ來移創建
寺院來移創建事蹟
本誓寺

町小舟町○市内日本橋區。等、後ニ此等各町の轉移シタル者ニ非ザル歟。

是年○永祿四年(紀元二二五五年)。城下ニ來移及創建シタル寺院若干有リ。○文政寺社書上。

寺院ノ來移創建

文祿四年○紀元二二五五年。相州小田原落城之砌、北條家持分之國々

本誓寺○市内深川區。　文政寺社書上ニ、

當知山重願院本誓寺

起立之義者、天正十八年○紀元二二五〇年。相州小田原落城之砌、北條家持分之國々不殘東照神君○德川家康。之御領地と成、武州江戸遠山左衞門尉居城之跡を御取立、御居城と相定。依之小田原○相模國。之寺院、多く御當地○江戸。え引移候。當寺○本誓寺。住持大譽も、弟子之小僧第二代辨譽也。一人召連、御當地○江戸。え來り、今の日比谷御門○市内麹町區。の邊、其節迄は海端に而獵師共の家居之中に草庵を結び居住あり。或夜南風に而御城内え鉦聲稱名之聲聞ゑければ、神君○德川家康。仰に者、間近きあたりに念佛執行の者は如何なる寺にやと御尋に付、御目附衆參られしに、大譽草庵え、近所の漁士どもおほく集り、念佛を唱居り候に付、庵主は何と申出家に而、何方ゟ此所え來居候哉と尋られしかば、大譽答には、小田原○相模國。本誓寺之住持にて、文賀と申者なりとありけり。其翌日芝筋

○市内。へ御鷹野に被爲成候刻、草庵へ御立寄被遊、御懇之上意被成候。度々登城被仰出し也。或時神君○德川家康。大譽へ御尋ありしは、其方小僧は何者の悴に哉と上意。其時大譽御請に、此小僧は北條家に而大導寺駿河守○政重。と申たる者の三男に而御座候、出家仕度と申願に付、拙僧弟子に仕候。駿河守○政重。女房者、以前此御城に罷在、下總國鴻之臺之合戰に討死仕し遠山丹波守娘に而御座候。父方母方共武士に而御座候と被申上しなり。神君○德川家康。一々被聞召、小僧えも難有上意被下、扨大譽退出之後、大奥に被爲入、おかち殿○太田氏。と申女中を被爲召、小田原○相模國。本誓寺弟子に、其方近き親類有之を存候哉と御尋なり。おかち殿○太田氏。承られ、それは何者の子と御聞被遊候哉と被申上しかは、神君○德川家康。には、大譽申上候趣を御物語ありおかち殿○太田氏。被承、左候得ば、私伯母の子に而、其小僧は從弟に而御座候と被申上。神君聞召、左候はゝ小僧にも對面し、學問をも募候樣に心を添遣候樣にとの上意に付、おかち殿○太田氏。も難有御禮被申上、其後は折節の音信有之、大譽をも大切に致されし也。然る所件の漁士町の場所御用地に相成、漁士の家居引申刻、大譽えは寺地を可被下之由被仰渡、馬喰町○市内日本橋區。其節者一向之よし

原にて有之所を願上、被致拜領、地形を築立候節、神君（徳川家康。）御鷹野御成之節御覽被遊、普請場に而大譽を爲召、是はあまり遠所に而近所に人家之無之、不自由に可有之間、何方にても外の場所見立願候樣にと、被仰出候節、大譽御請には、上意之如く、只今こそかくまて荒蕪に候得ども、御代々御相續に付、後々者此寺地まで御用地に成申候而、可有御座と被申上しかば、ことの外御機嫌うるはしくましませしとなり。其以前日比谷御門邊（今之八代洲河岸。）にて庵地拜領仕候義者、文祿四乙未（紀元二〇五年。）と寺記に有之、坪數不相知。

善國寺（市内牛込區。）　文政寺社書上ニ、

鎮護山善國寺

開闢起立之儀者、開基日惺と申者、池上（武藏國荏原郡。）本門寺十二代之住持、二條關白淵實公之御子に而、文祿四乙未年（紀元二〇五年。）御入國之砌、御懇之御意を以、右日惺ゑ天下安全之御祈禱として、麹町六町目谷（市内。）より七町目谷（市内麹町區。）迄之境内被下置候。拙寺（善國寺。）開基に被仰付、則鎮護國家之儀を以、鎮護山善國寺と寺山號文字奉拜領候。右日惺孫弟子日怪、水戸黄門光圀卿（徳川。）被爲有御信仰、延寶二寅年（紀元二三四年。）拙寺本堂并鎮守毘沙門堂再御建立被成下、其後數多拜領物等御座候由。享保十二未年（紀元二八七年。）急火に而什物舊記等不殘燒失仕候。此時より境内七百五拾坪餘に相成候。其後寛政四子年（紀元二四五年。）麻布（市内。）ゟ出火に而類燒仕、又候什寶記錄等燒失仕候。右類燒に付舊地火除地に被召上候而、當時之地所（市内牛込區。）ゑ替地被仰付候。

牛込神樂坂

江戸志ハ、瀨名貞雄ノ說ナリトテ、善國寺毘沙門像ハ、長谷川久三郎父子得ル所ノ加藤清正具足櫃本尊ナルコトヲ傳ヘ、再校江戸砂子ニハ、土中出現ト記ス。寺地ハ初麹町六丁目谷（市内。）ヨリ七町目谷（市内麹町。）ヲ境内トシタルコト、文政書上ニ見エ、同書上又「中興開基全修院殿故從五位下内膳正了達日性大居士、俗姓岩本内膳正源正房、寛延元辰（紀元二四〇八年。）十一月廿七日寂。拙寺（善國寺。）儀、享保十二未年（紀元二八七年。）急火に而燒失之節、舊地被召上、四谷在角筈（武藏國豐多摩郡。）と申處へ替地被仰付候而、既に賜地ゑ引移候事相極り候節、右内膳正（岩本正房。）殊外被致愁傷、度々御願被申上候に付、六丁目谷（市内麹町區。）より七丁目谷（市内麹町區。）迄貳町に相亙り候境内を七百五拾坪に相減し、舊地住居願之通り被仰付候。是全内膳正（岩本正房。）愁訴之功により候事故、中興開基と仕候。」ト稱ス。卽チ今ノ麹町善國寺谷（市内。）其地ニシテ、御府内寺社帳「境内六百坪糀町六町目横町（市内。）

善國寺」ト記ス者是也。江戸圖説ニハ、「當寺○善國寺。古ヘ馬喰町○市内日本橋區。馬場西北の側に在。寛文十庚辛○紀元二三三〇年。二月朔日の火災に類燒して、糀町六丁目横手○市内。に移る。境内藥師堂あり。」ト有リ。江戸紀聞同ジ。御府内備考續篇ハ、此説ヲ疑フテ「馬喰町より移轉のこと、寺傳にこれなし。藥師堂も古來よりなしといへり。」ト爲ス。今孰カ是ナルヲ知ラズ。

大仙寺

淺草八軒寺町

大仙寺○市内淺草區。　文政寺社書上ニ、

中將山大仙寺

文祿四未年○紀元二二五五年。八丁堀○市内京橋區。に寺地拜領仕候。其後正保元申年○紀元二三〇四年。當所○市内淺草區。え替地被下引移申候。傳聞に、二條關白良實公猶子池上○本門寺。十二代佛乘院日惺上人弟子中將大仙、爲出家得道字旭惺日堂、叡山○江近國。勤學。後傳教大師作子安鬼子母神日法作日蓮之像有感得而、關東え持參り、池上○在武藏國原郡。日惺付候間に、大久保石見守樣○長安。御取持に而、地所拜領仕候。

法泉寺

淺草新寺町

法泉寺○市内淺草區。　文政寺社書上ニ、

妙盈山法泉寺

當寺起立之儀者、文祿四乙未年。○紀元二二五五年。不知由緒、以大久保石見守殿○長安。於矢之倉○本橋區。市内日初而寺地拜領仕候。

同町方書上亦「法泉寺門前○市内淺草區。右町名之儀者、文祿四乙未年○紀元二二五五年。於矢之倉○本橋區。市内日初而寺地拜領仕候○下略。」ト見ユ。

善慶寺

淺草新寺町

善慶寺○市内淺草區。　文政寺社書上ニ、

法鷄山善慶寺

文祿四乙未年○紀元二二五五年。起立仕。拜領地之年代相知不申候。

經王寺

淺草新寺町

經王寺○市内淺草區。　文政寺社書上ニ、

長唱山經王寺

寺號開闢は、文祿四未年。○紀元二二五五年。寺地拜領は、慶長九辰年○紀元二二六四年。に而、最初牛込水道町、○市内。其後大坂町○市内。に引其後矢藏○市内。に引移、其後當町○市内淺草區。に引移候得共、年代不相知。

戒行寺

四谷南寺町

戒行寺○市内四谷區。　文政寺社書上ニ、

妙典山戒行寺

起立之儀は、文祿四乙未年○紀元二二五五年。麹町八町目谷○市内。に起立仕候。

惠光寺

惠光寺○市内牛込區。　文政寺社書上ニ、　市ヶ谷原町

蓮紹山惠光寺

文祿四乙未年○紀元二五五年。起立。

明治四年○紀元二五三一年。ニ至リ、瑞光寺ト改稱シタル者、本寺也。

本法寺

本法寺○市内本所區。　文政寺社書上ニ、　北本所小梅出村町

妙榮山本法寺

當寺開山壽命院日慶聖人、文祿四乙未歳○紀元二五五年。七月六日於神田内。○市地面拜領建立仕候。其已前者、平川に罷在候樣申傳候得ども、舊記等燒失仕、當時相分兼申候。

此外文祿中○紀元二二五二年—二二五五年。ノ創建ト傳フル寺社有リ。其何年ナルヤヲ知ラズ。姑ク玆ニ附記スト云フ。

八幡社

八幡社　麻布龍土(○市内麻布區)

往古ゟ芦毛が窪と申處鎮座被成候と申事に御座候。然る處文祿年中○紀元二二五二年—二二五五年。青山播磨守殿御拜地内宅地之鎮守に而有之候由。

大保福寺

靈龜山理性院大保福寺　駒込千駄木

右は禪宗にて、文祿年中○紀元二二五二年—二二五五年。湯島○市内本郷區。邊にて、寺地拜領起立仕候。○下略。

願行寺

願行寺　駒込追分(○市内本郷區)

既成山光明院願行寺

當寺起立は、文祿年中○紀元二二五二年—二二五五年。江戸内屋敷に而境内拜領。開山眞蓮社諦譽東胤、品川○武藏國在原郡。願行寺開山觀譽祐宗上人之孫弟子也。姓不知。生所武州品川。尤開山諦譽品川○武藏國在原郡。住職之砌、御城に被爲召候に付、遠方に而不便利之由蒙上意、御城近に地所拜領被仰付、品川○武藏國在原郡。願行寺は後住圓達に附屬仕、諦譽拜領之地所に新に山院寺號共同號に仕、一寺造立仕候。則當寺之起發と古來より申傳に御座候。

太子堂

太子堂　文政寺社書上云フ、　中之郷

嘉祥年中○紀元一五〇八年—一五一〇年。慈覺大師建立之由、緣起に相見え候。

別當寶珠山理性院如意輪寺

起立之年代、及開山開基共、相知不申候。尤往古ゟ太子堂別當寺に而、別堂之號相唱申候。

寛文二年○紀元二三二二年。梓行ノ江戸名所記ニ中の郷○市内本所區。太子堂ト載セタレバ、

寛文（○紀元二二一一年―二二三二年。）前ノ者タルヤ論ヲ待タズ。江戸惣鹿子ニハ、「中の郷（○市内本所區。）の太子堂は、慈覺大師關東修行のおり、此堂を造立ありしなり。一ッの石塔を堀出す。石の表に彌陀の三尊の梵字あり、その下にも文字ありと見しが、消て知れがたし。只文明二年庚寅（○紀元二一三〇年。）とありしとなり。文祿年中（○紀元二二五二年―二二五五年。）のことゝかや。」ト見ユ。姑ク茲ニ附載ス。

隅田川大水

隅田川大水事蹟

五年丙申（○文祿○十月廿七日改元、慶長元年（紀元二二五六年）。）**六月十九日乙卯**（○乙卯、三正綜覽。）**廿三日己未**（○己未、三正綜覽。）**隅田川大水、葛西**（○武藏國葛飾郡、一部市内。）**淺草**（○市内。）**被害甚シ。**（○當代記。）

隅田川大水　文祿五年（○紀元二二五六年。）六月十九日・廿三日隅田川出水シ、葛西（○武藏國葛飾郡。）淺草（○市内。）ノ民屋流失スル者少ナカラズ、溺死三四百人、牛馬死スル者數ヲ知ラザルコト、當代記ニ見エ、精シキハ變災篇ニ記ス。葛西志引ク所ノ三圍稻荷社緣起、慶長（○紀元二二五六年―二二七四年。）ノ比大洪水有リ、家康（○德川。）爲ニ淺草川ニ堤ヲ築クコトヲ載ス。抄記シテ上文ニ在リ。其天正十八年（○紀元二二五〇年。）度ニ於ケル築隄ナルヤノ疑有ルコトモ、同ジク既ニ之ヲ記ス。緣起言フ所ノ築隄ニシテ、或ハ天正十八年（○紀元二二五〇年。）度ノ者ヲ指スニ非ズトセバ、則チ恐ラクハ此ノ洪水後ニ於テシタル者ナル可シ。未ダ孰カ是ナルヲ知ラズ。

藤堂氏江戸證人

藤堂氏江戸證人事蹟

是年（○慶長元年（紀元二二五六年。））**大洲**（○伊豫國。）**城主藤堂高虎**（○佐渡守。）**弟正高**（○藤堂。）**ヲ證人トシテ江戸ニ置ク**（○高山公實錄。）

藤堂氏江戸證人　事高山公實錄ニ見ユ。

是歲（○慶長元年（紀元二二五六年）。）公（○高虎。）藤堂（○德川。）の九歲なりしを江戸へ遣はし、秀忠公（○德川。）に侍せしめ給ふ。後大府より下總國香取郡の内三千石の地を正高（○藤堂。）に賜る。

謹按内匠家乘によつてしるす。寛永系譜・行狀・傳記之年譜、玉置覺書、慶長四年（○紀元二二五九年。）の事とし、忠勤錄には、五年（○慶長二二六〇年。）の事とし、忠勤錄には、五年（○慶長二二六〇年。）二月とす。成績には行狀を引て五年（○慶長二二六〇年。）六月十六日とす。皆非なり。宗國史辨あり。

親筆留書江戸へ證人を差下に付、三千石下總にて鷹場被下候。

累世紀事下總國高三千石、大貫・村田・櫻田・南藪・馬乘里・横山・片野・鳥羽・大戸川・飯島・石細沼・谷原・今村・曲淵（○以上下總國。）をあめて十四ケ村。

内匠家乘元祖内匠（○藤堂。）正高儀、慶長元丙申年（○紀元二二五六年。）九歲にて、從高山樣（○藤關東首府トシテノ江戸）

堂高處。江戸へ證人に御下し遊被候。夫まて名を徳と申候。其後從權現様川○徳家康。内匠と御改被遊候。同○慶長。四己亥年○紀元二五九年。下總にて御知行三千石、從權現様○徳川家康。内匠○藤堂正高。拜領仕、則江戸に罷在、台徳院様○徳川秀忠。御傍に十ケ年餘御奉公仕候。右の節、御鷹野先へ、内匠○藤堂正高。方より爲窺御機嫌、蜜柑獻上仕候處、台徳院様○徳川秀忠。御自筆御判の御筆被成下、于今所持仕候。秘覺集同じ。但し大略なり。

外様大名ノ證人ヲ江戸ニ出ス、之ヲ嚆矢ト爲ス。

白銀町壹丁目○市内神田區。誓願寺ヲ神田須田町○市内神田區。ニ移シ、南北ニ門前町屋ヲ設ク○文政町方書上。

誓願寺門前町開設事蹟

誓願寺門前町開設　文政町方書上誓願寺門前書上ニ云フ。

誓願寺門前

一、右門前町屋之儀ハ、田島山快樂院誓願寺、○中略。文祿元壬辰年○紀元二五二年。御當地○江戸。白銀町壹町目邊ニ而寺地拜領被仰付、慶長元丙申年○紀元二五六年。中、神田須田町○市内神田區。元引地ニ相成、東西九拾貳間、南北百三拾壹間替地被下置、南北方ニ門前町屋有之候由申傳。

寺社書上誓願寺書上ニモ「慶長元申年○紀元二五六年。神田須田町○市内。ニ而東西九十二間南北百參拾壹間替地被下置、且從神君様○徳川家康。蒙公資、佛閣僧房造營仕候」ト有リ。其北ハ、往古江戸繪圖、今ノ萬世橋○市内神田區。内ニ營ル所ニ、せい願寺ト記シ、門前兩側ニ寺家ト有リ。卽チ是ナル可シ。實ニすた町○市内神田區。新こく町○市内神田區。ノ東北裏ニ當ル。

〔附記〕　文政寺社書上云フ、

鎮守○誓願寺八幡辨天稲荷合社

慶長元丙申年○紀元二五六年。白銀町○市内。ヶ須田町○市内。え替地之節、則開山齡祖代勸請、一山之惣鎮守と仕候。

稱名院○誓願寺坊中

當院○稱名院。起立之儀者、慶長四己亥年○紀元二五九年。と申事ニ御座候得共、由緒書等ハ、明和九辰年○紀元二四二三年。燒失仕、一向相分不申候。

德壽院○誓願寺坊中

當院起立之儀者、慶長四己亥年○紀元二五九年。と申事ニ御座候得共、由緒書等ハ、明和九辰年○紀元二四三二年。燒失仕、一向相分不申候。

深川村拓開
深川村拓開事蹟

西慶院（○浅草寺坊中）

當院（○西慶院。）起立之儀者、慶長四己亥年（○紀元二五九年。）と申事ニ御座候。

假宿院（○浅草寺坊中）

當院起立之儀者、慶長四己亥年（○紀元二五九年。）と申事ニ而、委細相知不レ申候。

九品院（○浅草寺坊中）

慶長四年己亥（○紀元二五九年。）起立之由ニ候得共、委細相知不レ申候。

深川八郎右衛門外六人、深川村（○市内深川區。）ヲ闢ク（○文政町方書上。）

深川村拓開 文政町方書上深川元町名主忠左衛門書上ニ云フ、

一、深川起立之儀者、書留等茂無レ之、聢と相知不レ申候得共、古來者武州葛飾郡之内（往古之下總國内に御座候由、一説申傳候。）海濱之地所に而、一圓萱野に而御座候よし。然處當町（○深川元町（○市内）。）開發人深川八郎右衛門幷外六人之者、一同攝津國出生之ものにて、（○中略。）乍レ恐神君様（○德川家康。）此邊始而爲御鷹野被レ遊御成候砌、御場先に而八郎右衛門被召上、地名被レ遊御尋候處、當邊萱野而已多く、村里茂隔候に付地名茂無御座候段、奉申上候處、左候はゞ、其方苗字を以、深川と名付、新田開發可レ致旨、蒙上意、則慶長元申年（○紀元二五六年。）ゟ起立仕、次第一ヶ村に相立、深川と號候よし。（○中略。）後年追々町並家作出來仕候に付、惣名深川村と名目相唱、在町とも御代官御支配に御座候處、其頃惣深川村地境之儀者、南之方者、小名木川を境、北之方者本所（○市内本所區。）を境、西者大川を限り、東之方者、同領（○葛西領。）猿江村（○市内。）邊を限り、一圓深川町と號候由。（○中略。）但前書六人之もの之内、今西甚兵衛・金子佐右衛門・苗不相知、作右衛門と申もの者、名前申傳候得共、其餘之姓名者相知不レ申候。尤右之内今西甚兵衛子孫之儀者、只今以て名主役相勤罷在候。其餘之もの子孫之儀、追々斷絶仕候。成當時相知不レ申候。本文深川八郎右衛門儀、深川町方貳拾七ヶ町（○市内深川區。）幷村方とも、子孫代々名主役相續仕候處、七代目八郎右衛門義、組合清住町（○市内深川區。）大達孫兵衛と申もの、家名退轉仕、右跡式取建方之儀に付、組合一同不念之儀有レ之、御咎茂難レ計候に付、大勢之者を厭ひ、八郎右衛門壹人之越度に申成し、寶暦七丑年（○紀元二四一七年。）十一月十一日出牢仕、御預ニ相成候處、同（○寶暦七年（紀元二四一七年）。）十議中之儀ニ茂御座候間、名跡相續願茂難レ相成、家斷絶仕候。尤開祖ゟ代々菩提所猿江泉養寺（○市内深川區。）ニ墳墓御座候。且右之もの儀者、當所（○深川。）開發人子孫、殊ニ前書大勢ニ代りつる越度を引請、絶家仕候儀ニ付、無縁ニ相成候も歎ヶ敷、

深川廿七ヶ町（市内深川區。）申合せ、年々少々宛出銀仕、追善等不怠候。

又云フ、

一、舊家　名主忠右衛門

右先祖、本姓は今西氏ニ御座候得共、四代目三郎兵衛事忠右衛門カ、佐藤と名字相改申候。尤系圖書物等、度々の類燒ニ而燒失仕候間、巨細の儀は相知不申候得共、申傳の分左ニ申上候。

先祖今西甚兵衛と申者、生國攝津國ニ而開發人深川八郎右衛門同樣、慶長年中（紀元二二五六年―二二七四年。）御當地（江戸。）ヱ罷下り候六人の者の內ニ而御座候。當深川（市內深川區。）其砌人家稀ニ而、萱野多き場所の由、草創カ當所ニ住居仕候。（略。）（下此外六間堀町、海邊大工町、海邊大工町裏町、蛤町（以上市內深川區。）等ノ書上、亦慶長元年（紀元二二五六年。）ノ起立ト爲スコト同ジ。

六間堀町（市內深川區。）

一、當町（市內深川區六間堀町。）の儀は、同所（深川村。）の內に而、慶長元申年（紀元二二五六年。）開發の由申傳、同所（深川村。）の內分郷に而、古來カ伊奈半左衛門樣御代官所ニ有之、地方の儀は、惣名深川町（市內。）の內

分郷六間堀と相唱、深川村高ニ籠り、御水帳の儀も深川町一體ニ御座候。

海邊大工町（市內深川區。）

一、當町（海邊大工町。）之儀、町名者、一體に相唱候得共、起立年代並地所之儀も、數ヶ所飛地入會有之、近々町屋作に奉願、場廣に相成、且御用地渡り等に而代地相隔り、其向寄、里俗之唱有之、組合に而相成、町用取扱候間、右之分外に相分ヶ、左に申上候。

萬年橋續、里俗上町分海邊大工町

一、當町之儀者、武藏葛飾郡西葛西領之內に而、慶長元申年（紀元二二五六年。）起立之旨申傳、惣名海邊新田と唱、古來カ伊奈半左衛門樣御代官所に有之。（略。）（下

一、舊家　名主八左衛門

右先祖之儀者、慶長元申年中（紀元二二五六年。）海邊新田（市內深川區。）幷深川村分郷六間堀村（市內深川區。）開發仕候名主次郎左衛門弟平右衛門と申、分家に有之、次郎左衛門、平右衛門兩人共、六間堀村野之口（市內深川區。）に致住居、則家號を野口と唱。（略。）（下

海邊大工町裏町（市內深川區。）

一、當町（海邊大工町裏町。）起立之儀は、同所（深川。）海邊大工町に而申上候通、慶長元申年

○紀元二二五六年。起立の旨申傳、惣名海邊新田○市内。反別に籠、古來ゟ伊奈半左衛門様御代官所に有之。

一、當町○蛤町。之儀者武藏葛飾郡西葛西領之内に而、慶長元申年○紀元二二五六年。開發之旨申傳、古來ゟ伊奈半左衛門様御代官所に有之、惣名海邊新田高之内に而、寛永○紀元二二八四年―二三〇三年。慶安○紀元二二三〇八年―二三一一年。之頃にても候哉、隅田川に御成之節、土地之者共、蛤を獻上仕候以來、蛤町と唱候由。前々者海邊蛤町と相唱、今以里俗之唱に有之。

永代寺門前仲町南裏通蛤町

而シテ六間堀町○市内深川區。神明、海邊大工町裏町○市内深川區。滿穗稻荷社、猿江○市内深川區。泉養寺、皆是時ノ創立ニ係ルコトハ、別項之ヲ記ス。

〔附記〕　神田臺拓開

武江年表左ノ如ク記ス。他ニ所見無ケレバ、果シテ事實ナルヤ否ヤヲ知ラズ。

慶長元年丙申○紀元二二五六年。

駿河臺○市内神田區。を開かる。

附記　神田臺拓開

城下ニ來移シ若クハ創建シタル寺社、是年○慶長元年（紀元二二五六年）。**亦若干**

寺社ノ來移及創建

有リ。○文政書上。葛西志。

寺社ノ來移及創建事蹟

社寺ノ來移及創建　寺社ノ來移若クハ創建ハ、以テ城下ノ拓開ヲ意味スルノミナラズ、以テ市街繁榮ノ反影ヲ縮示ス。入國後其如何ニ多キ乎ハ、注目ス可キ現象也。

神明社

神明社

深川元町（○市内深川區）

鎮座勸請之譯、古來ゟ申傳には、深川八郎右衛門持地所え往古ゟ小祠有之候神明を勸請す。其比は近邊悉く芦藪に而、人家纔に五六戸も有之候由に御座候處、人戸も少々取建候に隨ひ、九月十三日は當社祭禮に而當所之者廿五六人打寄、御ひしやとて、當國に而は祭禮抔之前後打寄、酒宴相催申候事と唱來候。

――文政寺社書上

神明

一、神明

右者、町内○市内深川區六間堀町。東側町屋東隣に有之候。當町○市内深川區六間堀町。鎮守に而、六間堀神明と相唱、別當の儀は、同所川○深川。猿江泉養寺持に御座候。右は慶長元申年○紀元二二五六年。の頃、當所川○深川。の邊一圓深川村と申、百姓家起立仕候頃、當所川○深川。に有來り、則當所川○深川。ニ鎮守ニ祭り候社ニ而、當時惣名深川町六間堀と相唱候。

兩村高内、村町の分氏子有之、當町○市内深川區六間堀町。幷同所○深川。元町○市内。貳ヶ町氏子、宮元と相唱、鎮守之儀、都而世話仕。

——文政町方書上

深川海邊大工町裏町（○市内）

滿穗稲荷社

滿穗稲荷社

當社者、慶長元申年○紀元二五六年。起立之由。已前社之建坪三坪之御除地に付、三坪稲荷と唱候趣に有之候。

——文政寺社書上

深川猿江（○市内）

泉養寺

醫王山妙王院泉養寺

當寺之義者、往古深川之地、當時森下町○市内深川區。之邊井上河内守殿下屋敷之處ニ草創いたし、尤其頃深川開發人深川八郎右衛門開基ニ御座候由。其砌々深川神明別當職兼帶いたし罷居候。其後右地所御用地ニ相成、爲代地、當時之場所○市内深川區猿江町。被下置候得共、年月之義者、相知不申候。

元祖秀順法印、慶長元申年○紀元二五六年。開基、元和五己未○紀元二七九年。十一月十九日寂。

——文政寺社書上

葛西志引ク所、同寺記ニハ、

武州深川開祖二十七ヶ町名主深川八郎右衛門者、攝津國産ニ而、慶長○紀元二五六年—二七四年。以前、今之深川○市内。茅野ニ而、家居無之而、埴生之住居ニ而、幽成營いたし居候處、乍恐御當家御成始、於御場先、八郎右衛門被召出、地名御尋被爲遊候處、一圓茅野ニ而、村里も隔、地名も無之旨申上候處、同人○深川八郎右衛門。苗字を以、深川と名付、起立可致依嚴命、慶長元申年○紀元二五六年。より起立致、其後追々御當地繁榮ニ隨ひ、町並に相成、深川○市内。從草創名主役相勤、子孫引續相續致候。

常泉寺

此等ハ何レモ深川○市内。拓開ノ史實を證ス可キ遺跡ニ非ザル莫シ。乃チ別項ヲ參照シテ可也。若夫本所○市内。方面ノ拓開ト見ル可キハ、

常泉寺　葛西志云フ、

常泉寺境内三千四百七坪。内除地千三百七十八坪。貢地二千廿九坪。村○小梅村市内本所區。の南の方々切土手の邊にあり。法華宗富士大石寺末なり。久遠山と號す。寺領三千石を賜ふ。是は本乘院殿御佛供料として、寶永七年○紀元二三七〇年。寄附し給ふと云。開山は仙樹院日是上人なり。慶長元年○紀元二五六年。當寺○常泉寺。を創し、元和七年○紀元二八一年。六月廿八日示寂す。開基は此村○小梅村市内本所區。の里正高橋九兵衛が十四世の祖なりと云。慶長十一年○紀元二六六年。六月十一日卒し、啓遠院淨仰と號す。

東京通志亦「久遠山常泉寺。本所區小梅町○市内。ニアリ。域内千四百拾八坪。日蓮宗。慶長元年丙申○紀元二六五年。二月高橋某新右衛門。之ヲ創建シ、僧日是妙樹院。ヲ以テ開

山トナス。」ト記ス。

碩運寺　文政寺社書上云フ、

本所石原町

鎮護山碩運寺

慶長元丙申年（紀元二五六年）起立仕候。

神田・湯島・本郷・上野（市内）方面ニ起立シタル寺院ハ、左ノ如シ。

淨念寺　文政寺社書上云フ、

淺草小揚町

化用山常照院淨念寺

當寺起立、慶長元申年（紀元二五六年）駿河臺（市内）ニ在レ之與聞。其後慶長十巳（紀元二五六年）年今之淺草小揚町（市内）ニ移轉ス。

改撰江戸志ニハ。「西福寺（淺草區市内）と同時に、三州より初は駿河臺（今の觀音坂の邊なり市内）に移されしと。今も駿河臺觀音坂（市内）は、當寺（淨念寺）の觀音名高きゆへ、彼所の地名ともなれり。」ト有り。文政寺社書上ハ、觀音坂ヲ龍寶寺（淺草區市内）ヨリ得ル所ノ名ト爲スコト、別項ノ如シ。未ダ孰カ是ナルヲ知ラズ。若夫レ東京府誌ハ、本寺ノ起立ヲ「永祿十一年戊戌（紀元二二八年）僧露休開基、開山不詳ト記ス。」

高林寺　文政寺社書上云フ、

金峰山高林寺

駒込

權現樣（德川家康）御入國之以後慶長元丙申年（紀元二五六年）元神田（市内）にて金峰山藏王權現之御跡之地を、開山桂岩和尚拜領仕候。因レ茲山號を金峰山と申候。其時之御奉行は、山本帶刀殿・天野清兵衞殿ニ而御座候、

江岸寺（本郷區駒込）　文政寺社書上云フ、

見海山江岸寺

駒込

起立之儀者、慶長元丙申年（紀元二五六年）駿河臺（市内）ニ而寺地拜領仕候。同（慶長）九甲辰年（紀元二六四年）御用地ニ罷成、本寺高林寺幷當寺（江岸寺）共、湯島臺（市内）ニ而新地被下置、引移申候。其地ハ只今御茶之水（市内）と申候所ニ御座候。

感應寺（市内下谷區）　文政寺社書上云フ。

谷中

光照山感應寺

起立者慶長元丙申年（紀元二五六年）神田（市内）ニ而地所拜領仕候。

稱往院（市内淺草區）　文政寺社書上、

淺草

一心山極樂寺稱往院

慶長中（紀元二五六年―二七四年）湯島（市内）邊にて起立仕、其後年代不レ知、當地（市内淺草區）

ニ引移申候。

開山鑁蓮社白譽上人稱往和尚、慶長十六年〇紀元二二七一年。五月廿五日寂。下野國喜連川之執權伊藤外紀之子也。永祿二年〇紀元二二一九年。誕生、元龜四年〇紀元二三三年。薙髮、常陸國玉里村照光寺門ニ入、天正十六年〇紀元二二四八年。香衣參內、三十の時幡隨上人弟子と成、武州瀧山八幡之夢之告ニ而彌陀之像を感得す。其後洛東一心院ニ勤修し、院主關東濟度を勸玉ふに付、武江湯島に來り、帖誓と云道心者之庵に住す。男女歸依す。幡隨上人より運慶の作の中尊、湛慶作之脇士を授り、慶長元年〇紀元二二五六年。一宇建立、一心山と號し、稱往院と名付く。上人また上京し、相州小田原に一行山稱往院と云を開き、其後勢州に至り、菩提山內宮の御手洗五十鈴川之末、丈六の彌陀堂の庵をしむ。

江戸砂子ニハ、「開山白譽上人、慶長元年〇紀元二二五六年。起立。〇中略。往古は小田原〇相模國。に在り、慶長〇紀元二二五六年—二二七四年。の比湯島〇市內本郷區。にうつさる。その後又此地也。」ト見エ、改撰江戸志ニハ、「白譽慶長元年〇紀元二二五六年。開闢といひ、又總系圖に云所に依に、始小田原〇相模國。にありしと云は覺束なし。小田原〇相模國。おのづから別と見ゆ」ト云ヒ、東京府誌ハ、「慶長元年丙申〇紀元二二五六年。僧稱往湯島〇市內。に剏立ス。〇中略。俗捨世寺ト呼ブ」ト記ス。

最教寺　葛西志ニ、

最教寺境內二千五百坪拜領地。大雲寺押上村〇市內本所區。の北に隣れり。法華宗、身延久遠寺〇甲斐國。の末なり。天船山　號す。開山は本山二十一世通心院日境上人と云。開基仙能院日崇、慶長元年〇紀元二二六五年。當寺〇最教寺。を起立し、寛永十三年〇紀元二二九六年。七月廿六日示寂す。此寺始は上野の池の端〇市內。に有。

櫻田西久保〇市內。方面ニ起立シタル寺院ハ、左ノ如シ。

喜運寺〇市內小石川區。　文政寺社書上云フ、

光國山喜運寺

開闢之儀者、慶長元丙申年〇紀元二二五六年。櫻田御門內〇市內。に而寺地拜領仕起立仕候。其後慶長九辰年〇紀元二二六四年。駿河臺〇市內。に引地に罷成候。

上行寺〇市內芝區。　文政寺社書上云フ、

上行寺

富士山上行寺　芝二本榎

往古は相州小田原に罷在、天正十四年〇紀元二二四六年。北條氏政よりの朱印、今に所持仕候。尤小田原〇相模國。に起立之年代、相知不申候。江戸起立之儀は、慶長元

光圓寺

丙戌年（紀元二五六年）。於櫻田（市内）寺地拜領仕候。

光圓寺（市内芝區）　文政寺社書上云フ、

櫻田山光圓寺

起立之儀者開山釋了空、慶長元丙申年（紀元二五六年）。櫻田（市内）に於て起立仕候。

芝切通

教善寺

教善寺（市内麻布區）　文政寺社書上云フ、

長慶山信行院教善寺

起立之儀は、慶長元丙申年（紀元二五六年）。武州豐島郡於西之窪向坂氏開基ト有之候。

麻布龍土六本木

寺院ノ來移及創建

慶長二年丁酉（紀元二五七年）。城下ニ來移リ、及創建スル所ノ寺院、若干有リ。（文政寺社書上。江戸紀聞。東京府志料。東京府誌。）

寺院來移及創建事蹟

寺院ノ來移創建　左ノ如シ。

大圓寺（市内芝區）　文政寺社書上ニ、

泉谷山大圓寺

芝伊皿子

當寺起立之儀は、慶長二丁酉年（紀元二五七年）。開山桂寮和尚、溜池（市内）邊に草庵を結、住居之由申傳候。右桂寮和尚儀、東照神君樣（德川家康）御前え被召出、折々法話聞召、御懇之奉蒙上意、其砌神君樣（德川家康）櫻田溜池（市内）邊え被爲成候節、御杖を以、四方之境を御定被下置、則寺地に拜領仕候而、梵刹を草創仕、山號を泉谷と仕、寺號之儀を天淵と仕候。

西蓮寺

心法寺

町（大圓寺門前）之儀は、慶長二丁酉年（紀元二五七年）。二町方書上大圓寺門前書上亦當門前、月中、大圓寺開山諦巖桂寮和尚、櫻田溜池（市内）に而地所拜領仕、泉谷山大淵寺建立仕候。ト有リ。

西蓮寺（市内芝區）　文政寺社書上ニ、

白鳥山西蓮寺

當寺起立之儀者、慶長二丁酉年（紀元二五七年）。武州豐島郡江戸於櫻田邊に、寺地拜領仕候。尤記錄燒失仕、委細之儀相分不申候。

三田寺町

心法寺　東京府誌（東京府志料同）云フ、

心法寺町（市内麹町十町目）ノ東北角ニ在リ。寺地東西一十九間、南北一十六間、面積四百六十三坪五合八勺。浮土宗。京都知恩院末派。慶長二年丁酉（紀元二五七年）創建。僧然翁開山。

江戸紀聞ニハ、左ノ如ク見ユ。

關東首府トシテノ江戸

常榮山天性院心法寺（淨土宗、智恩院末。麹町十丁目〇市内）

開山然翁照山上人崇公大和尚。

千手觀音。（閻浮檀金立像一寸八分。秦川勝守尊。）

地藏尊。

寺中、貞松院。最勝院。

往古は、寺の境内ことの外廣かりしとなり。源の牛若丸〇義經。奥州下向の時、此寺へ參詣ありしと云。おぼつかなき說也。（里人の傳ふる所也。）

大法寺

大法寺（〇市内麻布區。）　文政寺社書上ニハ、

榮久山大法寺　麻布一本松

起立之儀、年代相知不申候。

開山慈眼院日利聖人、慶長十九甲子年（〇紀元二七四年。）十一月十三日卒。

東京府誌ハ云フ、「慶長二年丁酉（〇紀元二五七年。）創建、僧日利開基。」ト。

盛德寺

盛德寺（〇市内赤坂區。）　東京府誌ニ、

盛德寺（町（〇赤坂氷川町）西ニ在リ。寺地東西二十五間三尺、南北二十五間、面積七百三十四坪三合二勺。禪宗曹洞派。上野國利根郡沼田村龍華寺末派。慶長二丁酉（紀元二五七年）創建、僧梵汲開山。）

大圓寺

大圓寺（〇市内本郷區。）　文政寺社書上ニ、

金龍山大圓寺　駒込

開闢起立、慶長二丁酉年（〇紀元二五七年。）柳原（〇市内神田區。）に而拜領仕候。

實相寺

實相寺（〇市内本所區。）　文政寺社書上ニ、　北本所表町

見應山實相寺

起立者、慶長二丁酉年（〇紀元二五七年。）に御座候。

本立寺

本立寺　荏原郡大崎町（〇武藏國。）ニ在リ。　下大崎

起立之儀は、往古上目黑村（〇武藏國荏原郡。）本立寺開山は、池上十二代の祖佛乘院日惺上人にして、慶長二年（〇紀元二五七年。）の草創なり。——文政寺社書上

附記

〔附記〕創立年代明カナラザレドモ、亦此前後ニ在ル可シト思ハルヽ寺院有リ。卽チ文政寺社書上ニ、

高岩寺

萬頂山高岩寺　下谷（〇市内）

起立年代相知不申。往古ハ御茶之水（〇市内。）に有之候由申傳候。

開山扶嶽太助和尚、慶長二戊戌年（〇紀元二五七年。）十二月廿三日寂。

普門山慈眼寺

起立年代相知不レ申。往古八町堀〇市内京橋區。に而寺地拜領仕候處、御用地と相成、當所〇市内芝區。江替地被二仰付一由。度々之類燒に而記錄燒失仕、委細之儀相知不レ申候。

開山翁轉和尚、慶長二丁酉年〇紀元二五七年。四月十三日卒。

增上寺轉移

三年戊戌〇慶長三年（紀元二二五八年）。八月、增上寺ヲ日比谷〇市内麹町區。ヨリ芝〇市内芝區。ニ移ス。〇三緣山方丈歷代系譜。文政町方書上。武江年表。

增上寺轉移事蹟

八、

當寺〇增上寺。草創元地者、貝塚今麹町〇市内。之邊、中頃移二而于日比谷〇市内。邊、後慶長〇紀元二二五六年。——二二七四年。初移二而于芝一〇市内。云々。

天正十八年〇紀元二五〇年。大相國家康主〇德川。領二關八州一入二御武江一之時始而謂二師爲一檀越一、慶長三年戊戌〇紀元二五八年。八月移二寺芝今地一〇市内芝區。也。

——三緣山方丈歷代系譜

八月〇慶長三年（紀元二二五八年）。三緣山增上寺、日比谷〇市内麹町區。より今の地〇市内芝區。へうつる。

七軒町

片門前壹町目

片門前貳町目

「其ころは、今のヤヨスがす〇市内麹町區）の南、日比谷町〇市内麹町區）の方にありしとぞ。この邊をひゞや町といふ事、むかしは潮入の地にて、漁人海中に枝付の竹を竝べ立て、魚の入るを待て取る。これをひゞといふ。正字なし。今も海苔をとるに此ひゞを用ふ。ひゞかせぎをなすものの住居の地なれば、ひゞや町といへり。後芝口（〇市内芝區）にうつされてもひゞや町と號しけるが、後に芝口とあらたむ。新肴町、彌左衞門町〇市内京橋區）も此舊地に有しとぞ。——武江年表

此外諸書略ス。鐵醬塵蓋抄ニハ、慶長七年〇紀元二二六二年。ノ條ニ「芝淨土宗鎭西派三緣山增上寺、依二御拜寺、飯倉邊〇芝山内（〇市内ヲ指ス者歟。寺替被二仰付一芝口〇市内麹町區屋内ヲ指ス如シ。寄屋橋御門〇市内麹町區。內羽柴美作守秀治、後堀美作守改」ト有リ。轉移前ノ地堀氏邸ト爲リタルヲ推ス可シ。餘ハ上文天正十八年〇紀元二五〇年。ノ條ヲ參看セヨ。門前地ヲ賜フ、亦多ク此時ニ在リ。

七軒町〇市内芝區。

一、當町〇七軒町。起立之儀者、年久敷儀に而、書留等燒失仕、相知不レ申候得共、慶長三戌年〇紀元二五八年。中、增上寺當所〇市内芝區。へ轉地被二仰付一候砌、境內門前地共、拜領有之、以前井口屋敷と申候由、申傳に御座候得共、何故相唱候哉、舊記相知不レ申。町名之儀者、往古地主七軒に而所持仕候に付、七軒町と相唱申候由申傳候。

片門前壹町目〇市内芝區。

片門前貳町目〇市内芝區。

關東首府トシテノ江戸

中門前壹町目　中門前貳町目　中門前參町目

中門前壹町目○市内芝區。
中門前貳町目○市内芝區。
中門前參町目○市内芝區。

○以上五町書上略ス。共ニ慶長三年(○紀元二二五八年)增上寺門前地ト爲リタルコトヲ記シ、又以前井口屋敷ノ稱有リタルコトヲ記ス。

——文政町方書上

北新門前町

北新門前町○市内芝區。

一、町内起立之儀、町名之起等、年久敷義に而、書留燒失仕、相分不申候得共、慶長三戌年○紀元二二五八年。中增上寺當所○市内芝區。え轉地被仰付候節、境内門前地を拜領有之候趣に而、當町○北新門前町。之儀、增上寺元涅槃門前に有之候。

富山町

富山町○市内芝區。

○書上略。略同文也。

——文政町方書上

濱松町壹町目

濱松町壹町目○市内芝區。

一、當時起立之儀者、濱松町四町○市内芝區。共、古來久右衞門町と相唱申候。右者慶長○紀元二二五六年——二二七四年。之頃、增上寺御代官奥住久右衞門と申者名主役相勤罷在

濱松町貳町目　濱松町三町目　濱松町四町目

候節之町名に而、同人儀元祿九子年○紀元二三五六年。名主退役仕候跡、遠州濱松出生不仕候に付、年月等聢と相分不申候。

濱松町貳町目○市内芝區。

濱松町三町目○市内芝區。

濱松町四町目○市内芝區。

○以上三町、書上略。濱松町一町目(○市内芝區)ニ同ジ。

——文政町方書上

增上寺子院

增上寺代官　奥住忠左衞門

一、舊家

右當町○南新門前二町目代地。(○市内芝區)住居にて、舊記等火災之節燒失仕、相分り兼候得共、先祖奥住久右衞門儀は、增上寺中興開山觀智國師一族に而、慶長三戌年○紀元二二五八年。同寺○增上寺。當所○市内芝區。に轉地之砌、同寺○增上寺。境内幷門前地共、地割繩張被仰付、其節か增上寺領代官仕、幷當時芝濱松町○市内。は、元增上寺門前町屋に而、元町名久右衞門町と相唱、名主役兼帶相勤罷在候處、同人儀元祿九子年○紀元二三五六年。中名主退役仕候由に申傳候。

〔附記〕增上寺子院

——文政町方書上

關東首府トシテノ江戸

三緣山志ニ據レバ、增上寺子院ハ、中興興弘ノ日十三院有リタリト云フ。

廣度院（增上寺子院。）

酉譽上人（聖○聰。）御當山を開基せられ、廣度を以て院名となし給ふ。その時別に一院を建、書閣般舟の別場とせらる。其遺趾をとゞめ給はんとして、國師（存○應。）別に法嗣圓融をして開創せしめ、酉譽上人（聖○聰。）を以開祖としたまへり。故に本眞言宗たりし時の本尊不動明王を安置し、往時の制範をうしなはざらしめらる。

天陽院（增上寺子院。）

開祖生譽珍公は、酉譽上人（聖○聰。）の一族にて、千葉滿胤の息なり。應永卅一辰年（紀元二○八四年。）武藏國日比谷飯倉の邊に一寺を創造す。道德優長にて、自他宗の碩德歸向し、遠近の緇紳欽仰せずといふ事なし。（當院に傳ふるは、珍公大德永享三亥年（紀元二○九一年）花洛にめされ、禁闕にて淨土の眞門を演說せしかば、帝より賜紫の勅命あり、是より道名四方に高し、又此時種々の寶器をたまへり、後世につたふと云々。）寶德元巳年（紀元二○九一年。）十二月廿五日寂化のゝち二百年、堂宇發心の僧となゝまりて念佛し、數世皆淨家の法儀をつとめて、此所にあり。其中間東國の戰に寺寶什具奪はれ、寺門も廢蕪に及びしに、御當山（增○上寺。）此地（市○內芝區。）に御造營の時、十三院のうちに加はり、子院につらなる。是開山上人と開祖と同氏なる故なりとぞ。

花岳院（增○上寺子院。）

開祖知雲上人は、御當山（增○上寺。）第六主たり。隱棲の時當院（花○岳院。）をひらきて專修の別場とし、學徒の問論講義を他にゆづりて、ひとへに西刹の素願を遂んとせられし地なり。舊地は今より北の方にありしと云。

天光院（增○上寺子院。）

開祖圓也上人は、御當山（增○上寺。）第十一世たり。堂閣房宇自燒せしかば、悉く再興し、源譽上人（後爲國師。）に讓與し、當院（天○光院。）をひらきて隱栖住閑し、ひとへに名利を厭ひて、三心の秘奧にすゝむ。御當山（增○上寺。）今の地（市○內芝區。）にうつりし時は、南の地にありしかど、寬永中（紀○元年——二○二八四年——二○三三年。）此地にうつる。其以前の地は今の光學院の所といふ。又今の源壽院の地とも云。

常照院（大門（入北側三島谷入口角。）○僧上寺子院。）

開祖周公は、武藏國淺茅原の人なりと云。由緣いまだ詳ならず。當院（常○照院。）中に善光寺如來を安置す。（緣起鎭座の部に出す。）當院もと芝浦（市○內芝區。）の地にありて不

斷說法などありしかば、今も當山○僧上寺。內にて說法を許可あるは、當院ばかりなり。

觀智院○僧上寺子院。

始誠諦庵と云。又普光院と名く。永祿年中○紀元二二一八年——二二二九年。開祖徹公は、佐竹義篤の臣田中越中守の二男にして、常福寺六世感譽了秀上人の弟子となり。一說に云、大八木三郎義武が三男にして、常陸國久慈郡久米村に生れ、同國增井正宗寺主因義藏主辨宗禪師は伯父なりしかば、是に投身して出家し、諸國を雲水し、歸國のゝち、常福寺了秀公に歸入し、改して淨宗となり、後又東國の知識に遍參の時、日比谷(○市內)の地に一院を建立し、般舟の道場とせりと云々。出家學行し其後東國五畿の學匠にまみえ、解了の關鎖を知量し、つゐに武藏國箕田の鄕に一院を結び、誠諦庵と號す。其比喜多美三郎或時遠山家に來駕の時、立よりて數刻法問を聞き、大に歸崇ののち資糧をおくれりとなむ。しかるに御當山○增上寺。貝塚○市內麴町區。より此地にうつり、御造營の時、國師○存應。の德光を仰ぎて、庵主吟寮第一に子院につらなりしかば、國師○存應。是を歡喜したまひて、第一座に列せしめらる。其後國師○存應。退職の時、當院○觀智院。を隱閑の地と定めせられしによりて、普光院と改む。又演譽大僧正の時享保○紀元二二三七六年——二二三九五年。の始、名號を賜ひ、觀智院と改むべきの命あり。

寺院ノ轉移及創建

寺院ノ轉移及創建事蹟

西福寺

是年○慶長三年(紀元二二二五八年)。寺院ノ轉移シ、及創建シタル者若干有リ。——三緣山志

文政寺社書上。葛西志。○西福寺記錄。

寺院ノ轉移及創建

左ノ如シ。

西福寺○市內淺草區。　西福寺記錄○文政寺社書上同。云フ、

東光山松平西福寺真雲院

慶長三年○紀元二二五八年。起立。當寺根元者、三州に有之。開山貞譽於駿府一寺を建立し、號西福寺。慶長三年○紀元二二五八年。今の駿河臺○市內。の下に一寺建立し、依三州之舊號東光山西福寺。蓋し山號幷御稱號は神祖所名也○朝野舊聞裒稿案云、「天正(○紀元二二三三年——二二五一年)の頃、松平の稱を賜ひし事、寺記に見えたり。」開山號眞蓮社貞譽願故了傳上人、姓產不詳。嗣法於下總大巖寺按譽虎角。嘗て駿州遊歷住西福寺矣。神祖○德川家康。御壯年之頃より、時々召貞譽佛教之奧儀を尋玉ふ。天正十一年○紀元二二四三年。奉台命駿府に一宇草創、號西福寺。住十有餘年也。慶長三年○紀元二二五八年。依台命來干當國、○武藏國。建一寺神田村、依三州之舊號西福寺。住十有一年。退又遊駿府。于時深川法禪寺無住也、緇素請貞譽住。纔ニシテ退矣。元和元壬戌○乙卯歟。年○紀元二二七五年。五

月廿七日終於法禪寺之境中。慶長三戌年〇紀元二五八年。於駿河臺下、〇市内。境内凡六千六百七坪餘拜領。寛永十五戊寅年〇紀元二九八年。同所御用地ニ相成、於當所〇市内淺草區。替地被仰付。

祥雲寺　〇今北豐島郡池袋村ニ在リ。

祥雲寺〇今北豐島郡池袋村ニ在リ。文政寺社書上天文元年〇紀元二一九二年。和田倉門内〇市内。ニ創建シ、後駿河臺〇市内。ニ移ルト爲スコト、既ニ之ヲ記ス。同書上又云フ、〇上略。又々其後、慶長三戌年〇紀元二五八年。駿河臺〇市内。御用地ニ罷成、小日向郷金杉村〇市内。に引地仕。

稱念寺　淺草新寺町

稱念寺〇市内淺草區。文政寺社書上ニ、光澤山滿志願院稱念寺起立之儀は、慶長三戌年〇紀元二五八年。ニ御座候。

實相寺　淺草八軒寺町

實相寺〇市内淺草區。文政寺社書上ニ寶樹山實相寺慶長三戌年〇紀元二五八年。起立と申傳候。

經王寺　市ヶ谷川田久保

經王寺〇市内牛込區。文政寺社書上ニ、大乘山經王寺慶長三戌年〇紀元二五八年。於市ヶ谷田町〇市内。「牛込區」除地拜領仕、起立有之候。

榮泉寺　芝西應寺町

榮泉寺　葛西志押上村〇市内本所區。ノ條云フ、榮泉寺境内除地百廿八坪。德正寺〇市内本所區押上町。の北に有。當寺〇榮泉寺。も天台宗にて、中ノ郷成龍寺〇市内本所區。末なり。壽桂山延命院と號す。慶長三年〇紀元二五八年。の起立と云。

法泉寺　澁谷

法泉寺　文政寺社書上云フ、光明山法泉寺起立之儀、舊記燒失相知不申候。東京府誌云フ、法泉寺一町（〇芝西應寺町）南ニ在リ。寺地東西二十間、南北十六間、面積一百六十四坪。眞宗、京都東本願寺末派。慶長三年戊戌（紀元二五八年）創建。僧純海開山。」

長谷寺　澁谷

長谷寺〇市内麻布區。文政寺社書上ニ、普陀山長谷寺起立之儀は、御入國以前ゟ本尊十一面觀音之像ヲ安置仕、御入國後山口修理亮殿澁谷原ニ而下屋鋪拜領之節、當寺境内圍込ニ罷成、右同人堂宇建立被致、大中寺十二代門庵宗關和尚ヲ請シ、致開山祖、菩提寺ニ仕置。然處外櫻

田溜池○市内。の端ニ龍雲院與申候大中寺末院有之、古跡拜領地ニ御座候處、住持天堯代類燒仕、元和六七年之頃歟。殿堂仕兼當分空地ニ御座候處、修理亮殿居屋鋪に被相望、本寺え相談之上、公儀え被願上、拜領被致候。但年月者元和八九年之頃と相見候へ共、聢と相分不申候。右爲代地、同人下屋鋪之內長谷寺有之候場所に而、壹萬九千三百八十八坪被指上、龍雲院之代地ニ被下置候得共、無住ニ付、長谷寺え合寺同樣ニ相成、龍雲院之號相唱不申候。當所長谷寺は、慶長三年○紀元二五八年。宗關和尙山口家依請住職ニ罷成、同年○慶長三年(紀元二二五八年)三月十五日入院之記錄相見候。

堀氏江戸證人

慶長四年己亥○紀元二五九年。春日山○越後國。城主堀秀治○左衞門督。子利重○堀市正。ヲ質トシテ江戸ニ送リ、府中○甲斐國。城主淺野長政○彈正少弼。ハ、末子長重○淺野采女正。ヲ江戸ニ送ル。居邸詳ナラズ。○譜牒餘錄。寬政重修諸家譜。

淺野氏江戸證人

堀氏江戸證人　天下ノ實權漸ク家康○德川。ニ歸スルヤ、慶長四年○紀元二五九年。ニハ、外樣大名中早クモ已ニ質子ヲ江戸ニ送ル者有リ。堀秀治○左衞門督。ノ如キ其一也。譜牒餘錄堀主稅書上云フ、

淺野氏江戸證人事蹟

左衞門督秀政○堀秀治○越後一國領知仕候。市正利重○堀儀、秀治○堀。爲證人、從越後國、慶長四己亥年○紀元二五九年。權現樣○德川家康。御代台德院樣○德川秀忠。え被召出、江戸に相詰、御奉公仕候。

寬永諸家系圖傳堀左馬助利重譜亦「慶長四年○紀元二五九年。秀治○堀。利重○堀。をして、大權現○德川家康。に人質とす。こゝにおいて、利重○堀。越後國より江戸に赴き、台德院樣○德川秀忠。に仕へ奉る。」ト見ユ。邸宅地詳ナラズ。

淺野氏江戸證人　ハ、

淺野彈正少弼長政事、石田三成讒訴に付、大閤○豐臣秀吉。之前不宜候處、權現樣○德川家康。度々被仰直被下、無別條罷在候。依之御當家○德川氏。え御奉公之志深御座候付、末子采女正長重○淺野。關東え遣之、台德院樣○德川秀忠。え御奉公仕候樣に奉願候處、十歲過候而江戸え可遣候旨就上意、慶長四年○紀元二五九年。長重○淺野。十二歲ニ而江戸え罷下、同○慶長。五年○紀元二六〇年。正月より台德院○德川秀忠。え御奉公仕候。

——譜牒餘錄松平安藝守書上。

長重○淺野。

父長政○淺野。豐臣大閤○秀吉。につかふ。かのとき石田三成しば〳〵讒訴する事

關東首府トシテノ江戸

ありといへども、東照宮（徳川家康。）の御かへりみにより恙なき事を得たり。これによりて御家（徳川氏。）をしたふこゝろざし切なりしかば、かねて長重（淺野。）をして關東にまいらせ、台德院殿（徳川秀忠。）に奉仕せしめむことをこふ。慶長四年（紀元二二五九年。）東照宮（徳川家康。）の仰せによりて江戸に至り、五年（慶長。）正月より台德院殿（徳川秀忠。）の御傍に勤仕す。

——寛政重修諸家譜

〔附記〕　溝渠疏鑿

校註天正日記慶長四年（紀元二二五九年。）二月ノ觸書中、新規ノ川々ホッサク入用ハ、公儀ニテ被成候ニ付、其所ニテ構ヒナシト有リトスルコト、既ニ之ヲ記ス。果シテ然ラバ、此頃亦溝渠疏鑿ノ事有ルヨリ、乃チ此觸書ヲ見ルニ至リタル者歟。他ニ所見無ケレバ、某ノ新渠ヲ掘鑿セシヤヲ知ラズ。

附記　溝渠疏鑿

是年（慶長四年（紀元二二五九年。））寺院ノ創建シタル者有リ。（文政寺社書上。）

寺院創建

寺院創建事蹟

左ノ如シ。

龍寶寺

龍寶寺（市内淺草區。）　文政寺社書上ニ據レバ、

金剛山藥王院龍寶寺　淺草

開山豪海ハ慈眼大師法兄ニ而、東照宮様（徳川家康。）御歸依ニ付、於神田駿河臺、慶長四乙亥年（紀元二二五九年。）四月開基被仰付候。唯今駿河臺觀音坂（市内神田區。）ト呼候は、當寺（龍寶寺。）之舊地ニ候由申傳候。

東京府誌ニハ、「年月不祥、僧慈覺開基、寛永年間（紀元二二八四年——二二三〇三年。）僧豪海中興。モト駿河臺（市内。）ニアリ。」ト見ユ。若夫改撰江戸誌ニ、觀音坂（市内神田區。）ヲ淨念寺ニ依リテ得タル名ト爲スコト、既記ノ如シ。未ダ孰カ是ナルヲ知ラズ。

正覺寺

正覺寺（市内淺草區。）　文政寺社書上ニ據レバ、

池中山盈滿院正覺寺　淺草黑船町

當寺起立慶長四己亥年。（紀元二二五九年。）其後天和三亥（紀元二三四三年。）極月十五日寺社御奉行本多淡路守様御寄合ニ而、拜領地被仰付候。

妙圓寺

妙圓寺（市内下谷區。）　文政寺社書上ニ據レバ、

圓住山妙圓寺　谷中三崎

開闢慶長四己亥年（紀元二二五九年。）寺地八百三拾貳坪四合拜領仕候。

南臺寺

南臺寺（市内芝區。）　文政寺社書上ニ據レバ、

高峯山南臺寺　三田寺町

往古之儀相知不申、慶長四亥年（紀元二二五九年。）於八町堀（市内京橋區。）寺地拜領被仰付、

一宇建立仕罷在候。

常林寺

常林寺（○市内芝區。）　文政寺社書上ニ據レバ、

三田寺町

虎嶽山常林寺

起立之儀ハ、慶長四己亥年（○紀元二五九年。）八町堀（○市内京橋區。）ニ而、寺地拜領仕候。

仙翁寺

仙翁寺（○市内芝區。）　文政寺社書上ニ據レバ、

三田寺町

桃源山仙翁寺

起立之儀は、慶長四己亥年（○紀元二五九年。）於ニ八町堀、（○市内京橋區。）寺地拜領仕、寺建立仕候。

玉鳳寺

玉鳳寺（○市内芝區。）　文政寺社書上ニ據レバ、

三田寺町

梧棲山玉鳳寺

起立之儀ハ、慶長四己亥年（○紀元二五九年。）八町堀（○市内京橋區。）ニ而拜領仕候。

廣稱寺

廣稱寺（○市内麻布區。）　文政寺社書上ニ據レバ、

麻布宮村町

城久山廣稱寺

起立の儀は、武藏國都筑郡石川之郷小田澤將監信利と云者有、生國は近江國佐々木家之幕下ニ而、天正（○紀元二五一年。）——之頃、織田信長石山本願寺と合戰之時、本願寺御味方仕、其後顯如上人ゟ刺刀幷十字名號法名敎西と賜候。慶長四己亥年（○紀元二五九年。）古郷ゑ返り、豐島郡西ノ久保城山（○市内。）ニ草庵を結罷在候。（○下略。）

源光寺

源光寺（○市内本所區。）　文政寺社書上ニ、

本所表町

中郷山源光寺

起立之地者、本所中之郷原庭町一名蛇山（○市内。）と申所に御座候。

東京府誌ニハ、慶長四年己亥（○紀元二五九年。）僧源長開基並開山ト在リ。

細川氏江戸證人

五年庚子（○慶長二六〇年。）正月宮津（○丹後國。）城主細川忠興（○越中守。）三子光千代（○細川。後忠利。）ヲ質トシテ江戸ニ居ラシム。（○譜牒餘錄。細川家記。）

細川氏江戸證人事蹟

細川氏江戸證人

慶長五年庚子（○紀元二六〇年。）正月忠興（○細川。）遣ニ其三男光（後改ニ名忠利。○細川。）於江戸爲質。（諸侯獻ニ質——譜牒餘錄。○細川越中守書上。）

一、十一月（○慶長四年（紀元二二五九年。））忠興君（○細川。）宮津（○丹後國。）ゟ大阪（○攝津國。）に御出、御誓詞を差上られ候。

敬白起（調イ）證文前書之事

於江戸初也。

關東首府トシテノ江戸

一、秀頼様（○豐臣。）御取立之上、奉ㇾ對ニ内府様（○德川家康。）中納言様、（○德川秀忠。）毛頭別心疎略奉ㇾ存間敷事。

一、親類縁者傍輩たりとも、内府様（○德川家康。）ニ存替、聊も構ニ別儀一、表裏を奉ㇾ存間敷候。何様にも奉ㇾ守ニ内府様（○德川家康。）御下知一、違背申間敷候事。

一、自然内府様（○德川家康。）御爲惡敷承屈候ハ、速ニ可ニ申上一事。

右之條々、若構ニ曲節一、於ㇾ令ニ違犯一者、神文。

慶長四年（○紀元二二五九年。）十一月日　羽柴越中守　忠興判

榊原式部大輔殿

有馬法印

金森法印

家康公（○德川。）御悦喜被成、彌無二ニ被ニ思召一候。尤向後加賀（○前田氏。）と御縁者振被成間敷旨、被ニ仰渡一、御三男光千代君（○細川忠利。）御證人として、江戸ヘ被遣べきに極り候也。

一、慶長五年庚子（○紀元二二六〇年。）正月二十五日光千代君（○細川忠利。）大阪（○攝津國。）を立て、江戸ヘ御越被成候。（○以上忠興譜。）

一、慶長五年庚子（○紀元二二六〇年。）正月二十五日、江戸ヘ御證人として、大阪（○攝津國。）御發足被成候。（○細川忠利ヲ指ス。）御供ニハ中島備中・福地與兵衛・松田一ニ杉原。慶唯・牧五助・住江甚兵衛（元明。一ニ甚五郎、後ニ甚兵衛ト有。小衛門養子、實ハ堀平衛門弟也。）松田五左衛門（五衛門）・本庄久衛門・稲富平七・桑原喜兵衛等也。

一書、住江以下ハ、歩立ノ中小姓ト有。（○以上忠利譜。）

是時ニ於ケル細川光千代（○忠利。）ノ江戸居邸、詳ナラズ。

細川家記

二月（○慶長五年（紀元二二六〇年。））貝塚青松寺ヲ櫻川通（○市内芝區。）ニ移ス。（○文政書上。府内誌殘篇。）

青松寺轉移　ハ、

萬年山青松寺

（○上略。）東照源君（○德川家康。）□鈞軸、兼崇桑門、天正辛卯（○十九年（紀元二二五一年。））頒璽符、賜ニ腹田二十二石一、文祿壬辰（○元年（紀元二二五二年）。）賜下馬二大字一（寛文八年（紀元二三二八年）羅災而亡。）又降ニ賜禁約三條一、謂禁ニ山中殺生一、禁ニ草木剪伐一、禁ニ諠譁諍論一、當ニ俊鷹時一、慶長庚子（○五年（紀元二二六〇年）。）增ニ廣城堞一。仍使ニ多良左近大夫告ニ住持尹天一、遷ニ寺於城南一。賜ニ米五百斛一、賜ニ役若干人一。木原氏司命、伊天移ㇾ之。寛永六年（○紀元二二八九年。）災、春道建。寛文八年戊申（○紀元二三二八年。）二月災。官令曰、青松寺隣ニ接上祖廟院一、（○增上寺。）他時有ㇾ災、亦不ㇾ可ㇾ量、自今之後、宜ニ易ㇾ地移ㇾ寺。住持

秀的上書曰、謹奉二官命一、然吾山（青松寺。）上祖神君（德川家康。）自命所レ賜之地也、乞許二於今山中一、而易二寺基一、然則官無二祖廟之患一、吾山（青松寺。）亦將レ俾二與國家一相爲悠久一、永々無レ已。制曰可。萬年山距二江城之南一數里、屹二立海面一、其高可二一百丈一。其延□不レ可レ窮。北則界二愛宕山（○市內芝區。）南則接二三緣山（○增上寺。）西背二於天德（○市內芝區。）東面二於櫻川（○市內芝區。）實是城南一鎭嶺也。山俗曰二含海一。臨二溟激一、故得名。卽主山也。地曰二貝塚一、昔有二（○在歟。）城西一。今平川天神（○市內麹町區。）南有レ坂、名二貝塚一、卽其所也。

——文政寺社書上

一、當門前町起立之儀は、青松寺文明八申年（○紀元二一三六年。）於二貝塚（○市內麹町區。）起立仕、其後天正十九卯年（○紀元二一五一年。）十一月御朱印頂戴仕候由。右御朱印地之內ニ、百姓共居屋敷御座候處、右貝塚（○市內麹町區。）御用地ニ被二召上一、慶長五午年（○紀元二六〇年。）二月中櫻川通（○市內芝區。）ニ而替地被二下置一、青松寺引移候ニ付、櫻川通（○市內芝區。）之內、青松寺表門南之方ニ百姓居屋敷御座候處、寛文八申年（○紀元二三八年。）二月類燒之砌、當時之場所（○市內芝區。）三間貳拾七坪六合貳勺五才之地所え引移申候由。尤同寺拜領地境內之內ニ御座候。其後何頃か青松寺門前町と唱、町方御支配ニ相成候哉、舊記燒失仕、委細相分不二申候一。

——文政町方書上

八重洲町安針町

八重洲町事蹟

春（○慶長五年（紀元二二六〇年。）和蘭船一艘泉州堺浦（○大鳥郡。）ニ到ル。家康（○德川。）命ジテ江戸ニ回航セシメ、船長以下ニ邸宅ヲ與ヘテ之ヲ留ム。今ノ八重洲町（○市內麹町區。）安針町（○市內日本橋區。）其地也。（○通航一覽。外交志稿。）

八重洲町　慶長五年（○紀元二六〇年。）和蘭船泉州堺浦入港事蹟ハ、外交志稿、接蕃年表ニ取リ、「五年庚子（○慶長二六〇年。）春、和蘭甲必丹耶楊子一船ニ駕シ、和泉堺浦ニ至ル。德川家康令シテ、江戸ニ來ラシム。遠江洋ニテ逆風ニ逢ヒ、破船ス。辛苦シ浦賀（○相模國。）ニ至リ、江戸ニ入ル。家康（○德川。）之ニ邸宅ヲ賜フテ府下ニ住セシム。」ト記ス者是也。其顚末通航一覽ニ詳記シタレバ、姑ク之ヲ左ニ抄ス。

慶長五庚子年（○紀元二六〇年。）異船一艘、和泉國堺浦に（大鳥郡に屬す。）入津す。尋問あるに、阿蘭陀人ならびに諳厄利亞人にて、商賣のためはじめて渡來せるよしを訴ふ。よて奉行より注進あり。（此頃成瀨隼人正、來津清右衞門と堺（○和泉國）の奉行なり。）東照宮（○德川家康。）其異人を江戸にめされて、猶糺問せしめらるゝに、偏に通商を願ふよしを申す。則御免ありしが、本船破壞して便船なく、數年江戸に滯留し、月俸及ひ屋敷を賜ひ、時々召されて異國の事等尋させ給ふ。

慶長五庚子年（自註、西洋年暦一千六百年。）泉州堺之浦に不見馴大船一艘著津す。遂に吟味候處に爲商賣始て咬嚕吧より渡海の阿蘭人幷諳厄利亞人也と云り。依之堺之役人早速江戸へ注進仕候處、江戸へ乘廻し可申由被仰付則堺之浦（和泉國。）より出帆す。時に於海上遇難風相州浦賀に打寄らる。然共破船に付陸より江戸へ被召御詮議被遊候處彼者共申上候は、日本渡海可蒙御赦免爲願、始而來朝仕候、於御赦免は年々致渡海商賣仕度候由申上る。其後歸國仕度存候得共便船無之故江戸へ致逗留事八九年。其中は御扶持等拜領す。阿蘭陀之頭人ヤンヤウス、諳厄利亞之頭人安針（アンジン）と申者逗留之間折々御城へ被召異國之物語共御尋被遊候。殊にヤンヤウス儀は首尾宜し。此兩人之者共、屋敷拜領仕暫住居する故、ヤンヤウス居所をやよすかし（○市内麹町區。）といひ、アンジン居所を于今あんじん町（○市内本橋區。）といへり。（○長崎御用書物。古集記。長崎大記。長崎雜話。）

慶長五年（○紀元二六〇年。）泉州堺の浦に大船一艘來津せり。仍て容子を尋るに阿蘭陀人幷に諳厄利亞人爲交易願貴國へ渡海せし由訴ふ。卽注進有之處其船江府へ可乘廻との御事なり。然るに彼船南海を乘廻り、遠州灘にて難風に逢、相州浦賀え打寄破船す。此旨言上之處、船中之人數陸地より可差越旨被仰渡、卽陸より江府表え參上す。依之委細被遂御詮議處、彼兩國之者共、日本渡海商賣仕度旨、御願申上る。則達上聞願之通御免被仰出。然るに可令歸國乘船無之、江戸に八九年之間滯留せり。其間御扶持方居屋鋪被下置、時々營中え被召呼、外國筋之事抔も御尋ありき。拜領之居屋鋪は阿蘭陀ヤンヨウス居たる所をヤヨスカシ、（○市内麹町區。）諳厄利亞人アンジン居たる所をアンジン町（○市内本橋區。日蘭陀船圖、其外引用書略。）といへり。（長崎志。山本氏筆記。○阿）

八重洲町（○市内麹町區。）ハ、東京地理志料「八重洲河岸ハ昔シ蘭人ヤンヨウスノ居シ處故ニ、此名アリ。八重洲舊時ハ八重洲ニ作ル。子等ニ作ルモノアリ。此ノ如ク數樣ニ寫セドモ、稱呼ハ必ズヤヨスナルベシ。今八重洲ニ作ルヲ以テ、終ニヤヘスト唱フルハ非ナリ。人見私記寛永十二年（○紀元二二九五年）三月ノ條ニ、馬場ハヤヨスガシ、長人町也トモアリ。昔シヨリヤヨスト呼ビシナリ。○下略。」ト云ヒ、東京通志「八重洲町壹町目古ハ老月村ト稱ス。落穗集云、德川氏ノ初入江ニ臨ミ、漁人多ク此ニ住ス、慶長八年癸卯（○紀元二二六三年）ノ頃、之ヲ築造シ、新莊直頼等五人此ニ居ル。又市街アリ、內町ト稱ス。後之ヲ京橋（○市內京橋區）ニ移ス。又慶長中（○紀元二二五六年―二二七四年）英人ヤムヨースヲ此ニ置ケ、因テ八代洲河岸ト稱ス。」ト云フ、卽チ其地。

安針町　通航一覽云フ、

慶長五庚子年（○紀元二二六〇年。）諳厄利亞人、阿蘭人と同船して、和泉國堺の浦（○大鳥郡に屬す。）に渡來し、通商を願ふよし、奉行註進に及ぶ。（このころ成瀨隼人、米津清右衞門堺（○和泉國）の奉行なり。）よて

東照公（○德川家康。）彼等を江戸にめされ、僉議を遂らるゝに、願の趣意不審の事も、なきによりて、江戸滯留をゆるされ、月俸及び宅地を賜ひ、時々めされて、異國の事等御尋あり。（船破損により、滯留九年に及ぶ。）

慶長六辛丑年、（○紀元二六一年。）去春（○慶長五年（紀元二六〇年）。）船堺浦（○和泉國。）へよる。是はイギリスと云島の船なり。黑船の敵なりと云々。然間船中に具足大鐵砲數多有之、具足は腰より上ばかりなり。內府公（○德川家康。）見物し給ふ。（創業記考異。）

慶長五庚子年（○紀元二六〇年。）漢乂刺亞國人と和蘭國人、各一大船に（按ずるに、諸記諳厄利亞人、阿蘭陀人、同船のよしを記す。今各船のよし記すは誤りなるべし。）漢乂刺亞は能船を操り、水戰に習熟し、能劒を遣ふ。其勇悍諸國皆畏る。伊幾利須海賊といふ是なり（外國入津記。○此次ニ、長崎大記、長崎記、長崎雜話、古集記引用ノ記事、及長崎實錄大成、長崎御用書物引用ノ記事有リ、略ス。）

慶長五年（○紀元二六〇年。）アゲレス人、阿蘭陀人同船に乘組令渡海、阿蘭陀一所に商賣之願を訴るに付、竟に蒙御免、其時エゲレス頭人アンヂンと云者、これも阿蘭陀ヤンヤウス同前に江戸に逗留し、折節には御禮を勤む。彼後には名氏を三浦アンヂンと云。江戸にて屋鋪を拜領し住居す。其跡アンヂン町（○市內日本橋區。）と云是なり。アンヂンも、日本渡海御赦免之御朱印致頂戴由云傳ふ。（長崎拾芥集。）

唐人安針の（按ずるに、安針とあるは、諳厄利亞人なり。今唐人と記すは俗稱ならん。下相中留恩記略に、朝鮮人と記すは誤りなるべし。）墓坂（ンカ）拾（按ずるに、相模國鎌倉郡の山中なり。）山道に在り。此邊より海上をながむれば、江戸前悉く見ゆるなり。この唐人は、昔江戸日本橋に住居し、鳥を商ひ渡世してありしが、其後この村へ（按ずるに、同郡（○相模國鎌倉郡）逸見村をさす。）來て相果けるとなり。唐人病の床につき、吾果なば、江戸眺望の地へ葬吳れよとて、相果ける故、此山中に墓あるよし申傳ふ。昔し安針が住し所とて、今に日本橋（○市內。）にて安針町と申由。近頃此唐人の墓安針町（○市內日本橋區。）より再興供養あり。

一、一向宗淨土寺、京都西本願寺の末寺。此寺に唐人安針の守本尊唐佛正觀音の像あり。（三浦古尋錄。○按ずるに、此書及相中留恩記略の記載信じがたしといへども、世に唱ふる一說なれば、姑く存す。諸記、阿蘭陀人ヤンヨウスは、江戸に止り、諳厄利亞人安針は本國に歸るとあるを是とす。）

三浦安針屋鋪跡は、邊見村（○相模國鎌倉郡。）の中程にて、淨土眞宗淨土寺の南にあり。今は畠地となれり。傳へいふ、安針は朝鮮の人にて、本朝に歸化し、三州に住す。砲術に妙を得、其術を諸士に相傳す。よりて東照大神君樣（○德川家康。）に拜謁し奉り、關東御打入の後、當村（○相模國鎌倉郡逸見村。）にて二百二十石の知行を賜は